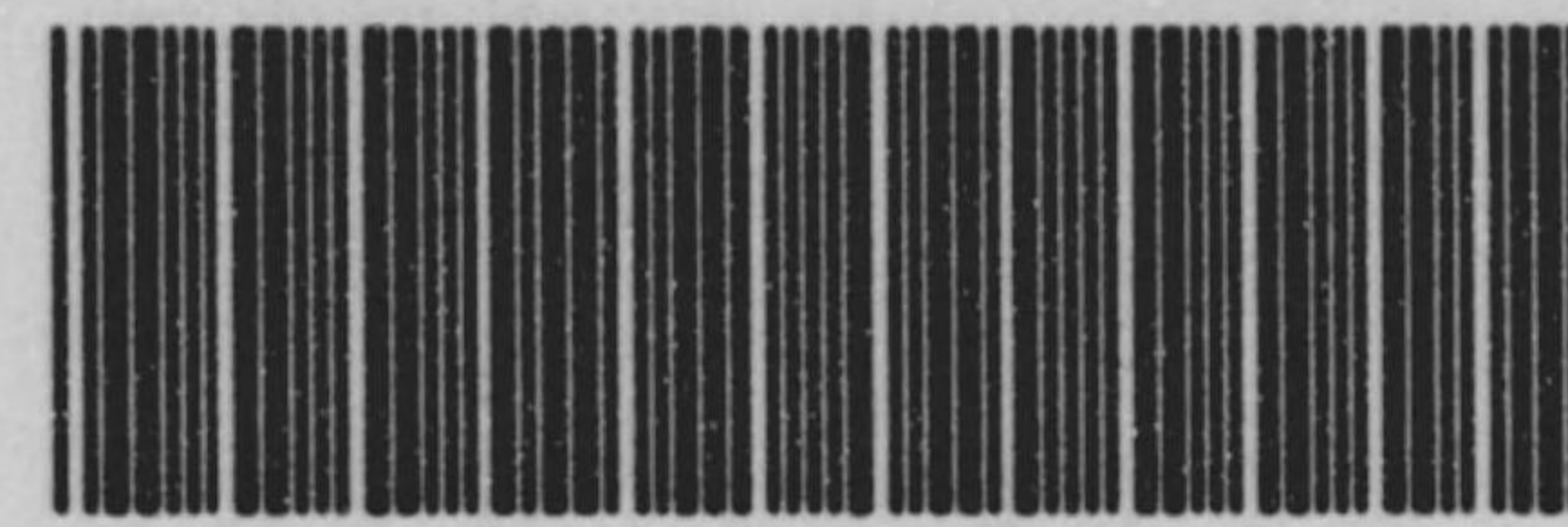


253
827



* 0041325000 *

1

0041325-000

253-827

教育学概論

小野久三・著

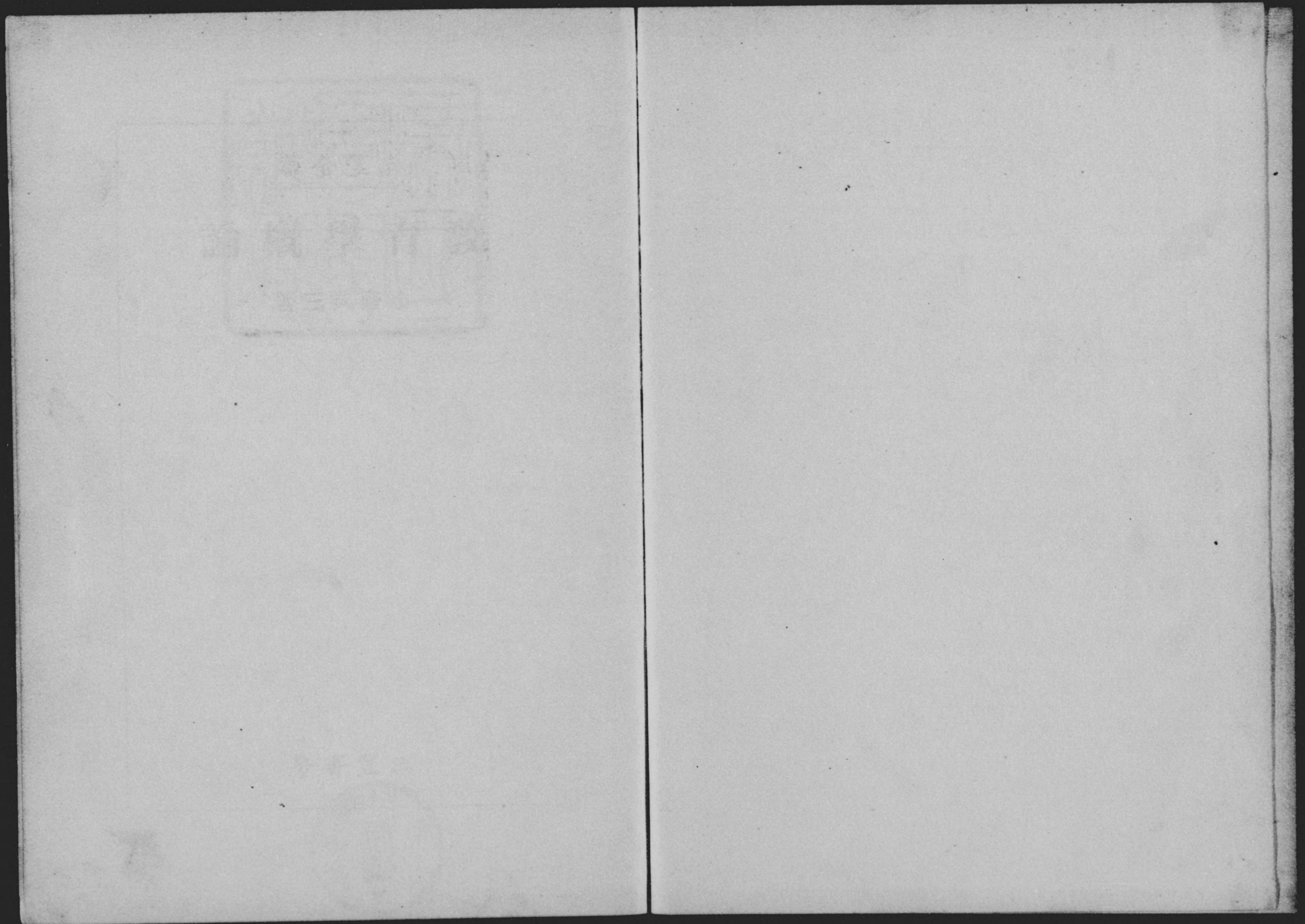
三笠書房

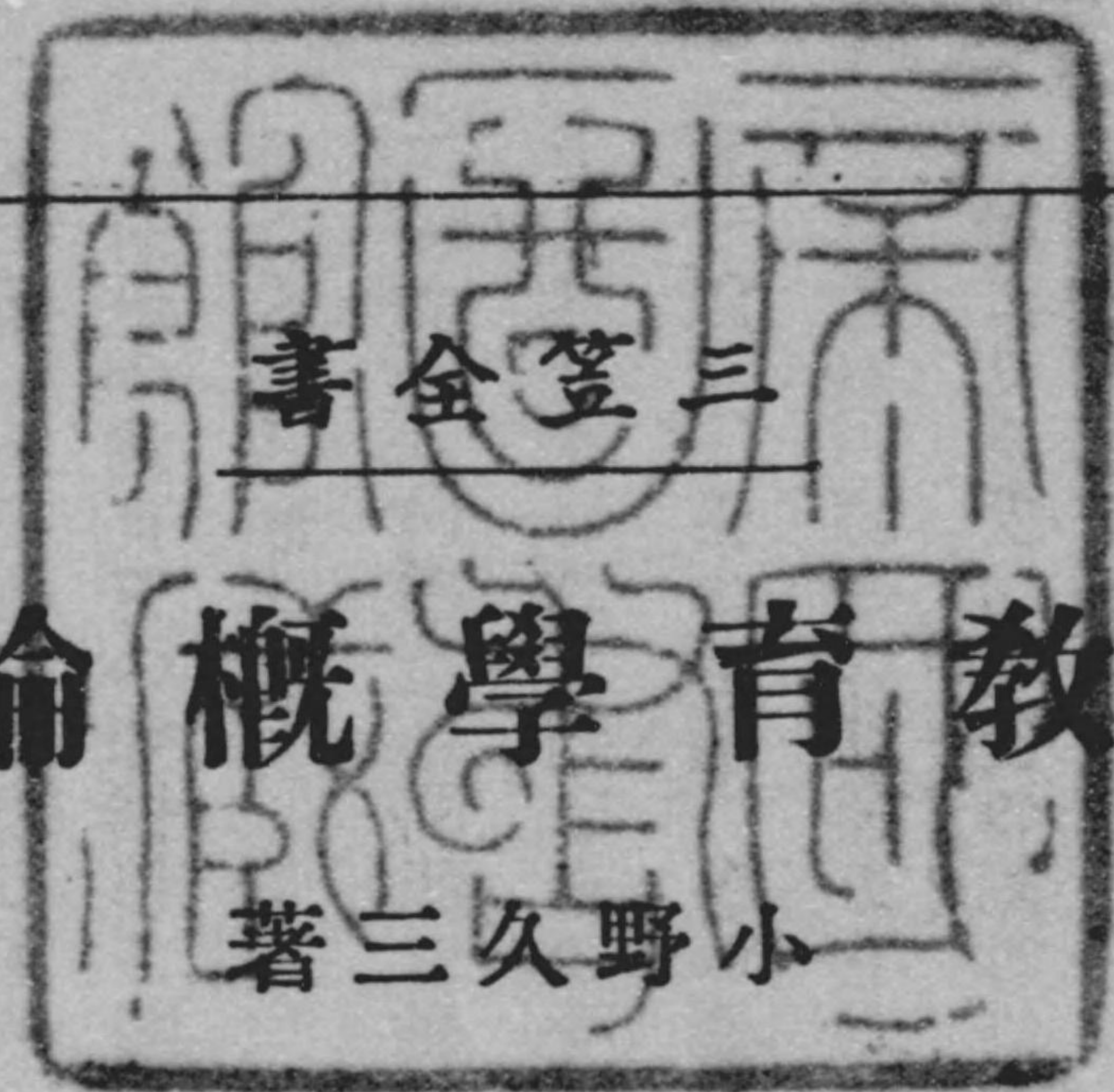
昭13

AHB

この著作物は、著作権者不明のため、著作権
第67条の規定に基づき、平成12年3月2
けで文化庁長官の裁定を受け使用するもので

107





教育學概論

小野久三著

三笠書房



253
827

序

何よりも先に本書の讀者に望みたいことは、極く樂な氣持で讀んで貰ひたいことです。本書は、初めの意圖よりは随分變更された内容を持つやうになりました。私は初め、教育一般を、その理論、その歴史、その制度等各方面から見て、極めて概括的のものを書かうと考へました。併しその企ては讀者に何物も與へないであらうことを恐れ、教育に關して少くとも何等かの問題を提供するといふ意味で、大體その歴史的方面からの検討を試みることにしました。

従來の教育史の教科書を開いて見ますと、教育者や學者、教育説や實踐等々の現象的のことを、いろ／＼の形で羅列してゐます。しかもそれ等は、何等か便宜的な方法で、唯單に羅列されてゐるといふに過ぎないやうな場合がずるぶん多いやうに思はれます。

ある教育説、又はある人物のある行爲等が果してどのやうな理由によつて生れ、又どの



やうな形をとり、そして又どのやうな方向をとらねばならなかつたか、又教育制度や方法についても、それ等が據つて立つべき土臺となるもの、又その土臺との内面的聯關は、果してどう説明さるべきか、といつたやうな點については、從來の教科書からは、我々は何物も期待し得なかつた。

こゝに筆者の拙い乍らの一つの試みは、以上のやうなあきたらない點を幾分でも緩和しようとしたものであります。こゝでは、緩和といふやうな、多少曖昧な言葉を以つて表す方が適當かと思はれる。なぜならば、教育乃至教育史におけるこのやうな方向は、政治・經濟・社會等と教育との聯關點を検討し、教育に對して正當な科學的位置を與へることに依つて愈々明確となるのであつて、そのことは、現在の教育にとつては、理論的にも實踐的にも一個の發展的な課題として残されてゐるからであります。

次に教育の任務とも言ふべきものについて從來考へられて來たものを吟味しつゝ、そこから發展的なものを見付けようと努めたことです。現在のところ私共にとつて規定し得る教育の任務は凡そ次の二點であります。

第一に、人間一般、特に兒童の生物學的特質即ち先づ形態的——形態學的、及び機能的

——生理學・心理學的、及び生物學的なものの總計の研究。

第二に、環境が被教育者に、望ましい傾向に影響するやうに組織し變更すること。

第一のものは、兒童學に屬し、第二のものは、教育の理論及び諸多の技術を基礎として考へねばならない。而してそのいづれも、一定の歴史的發展と社會的羈絆の上に置かれてある。

以上の如く考へれば、教育を、單なる觀念の中に求めたり、又兒童の中にのみ求めたり、或は教育それ自身の中にのみ求めたりするやうな態度は止揚されねばなりません。

かゝる觀點から本書は、この二つの任務を規制する諸々の條件が、實際教育活動の上に、どのやうに働いて來たかを、夫れづゝの問題毎に出來得る限り具體的に論述せんとしたもので、各章毎に横の聯絡をとつたものではない。随つて問題それ自體の系列が著しく片寄つてゐることは本書の缺陷であり、又本書の將來性、發展性を物語つてゐるのであつて、かゝる試みの價值が、讀者によつて正當に批判されんことを心から望むものであります。

引用文献の名稱及頁数は、出来る限り掲出を避けました。それは、本書に、寧ろ「讀物的」な興味を持たせたいといふ意からであります。 4

著者識

目次

序

第一章 西歐における教育の概観 一

第二章 英吉利の教育 一八
——義務教育を中心として——

第三章 佛蘭西の教育 三五
——ルソーを中心として——

第四章 獨逸の教育 五三
——ルーテルを中心として——

第五章 我が國に於ける教育の概観 七一
——明治を中心として——

第六章 王朝時代の教育 九六

——綜藝種智院を中心として——

第七章 江戸時代の教育 一〇〇

——水戸藩學制改革を中心として——

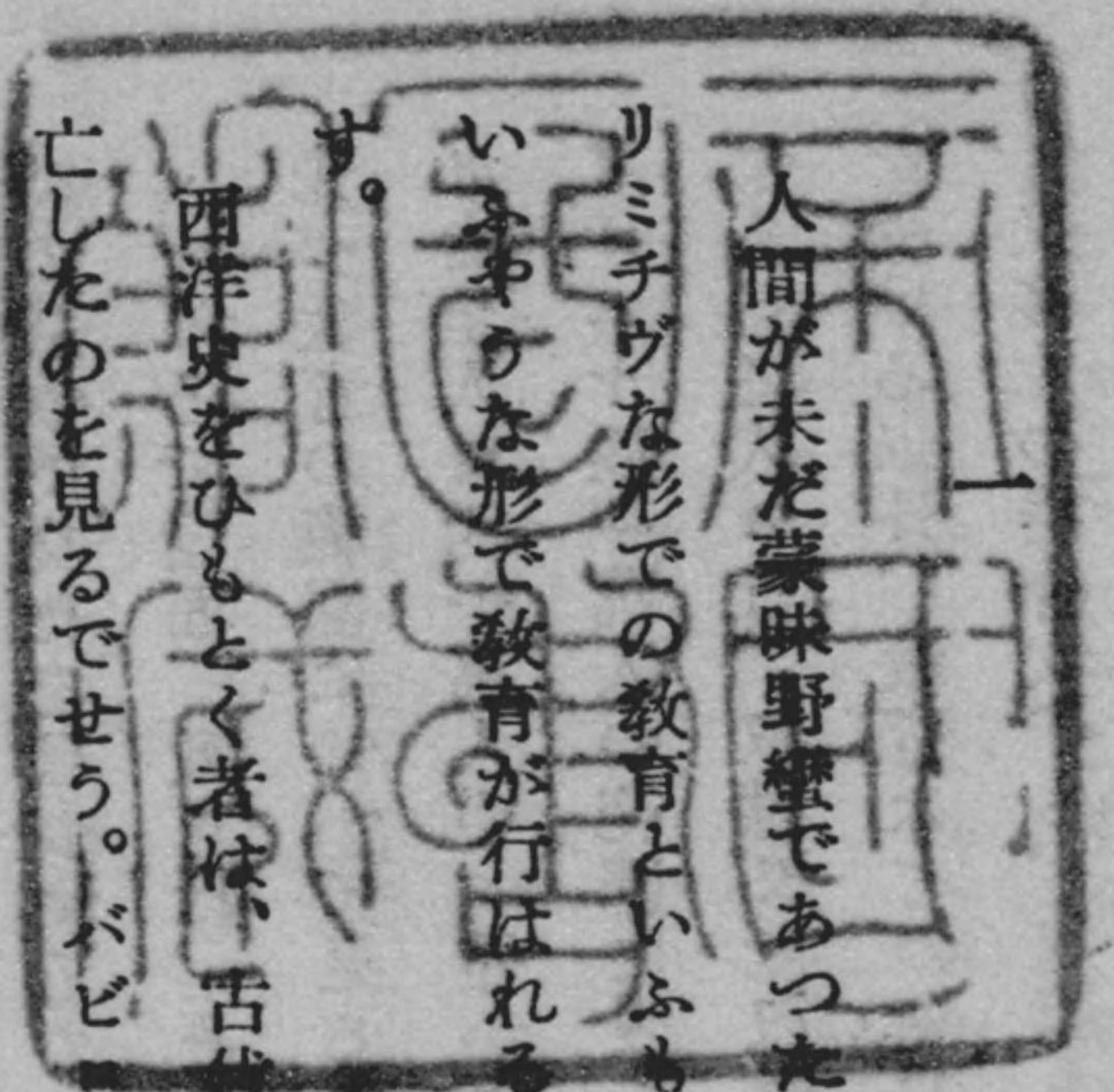
第八章 福澤諭吉論 一〇三

第九章 森有禮論 一〇五

第十章 新島襄論 一〇七

年表 一九四

第一章 西歐における教育の概観



人間が未だ蒙昧野蠻であつた時代から原始的社會生活を營むに至つた時代において、ブルミチヴな形での教育といふものは行はれたにちがひない。けれども、「具案的影響」といふやうな形で教育が行はれるやうになつたのは、國家の發生を劃期とするものでありま

西洋史をひもとく者は、古代において、いくつかの國家が地中海の縁邊を中心として興亡したのを見るでせう。バビロニア、フェニキヤ、アッシリヤ、イスラエル、エジプト、ギリシヤ、ローマ等がそれでありま

此等の古代國家は所謂奴隸制國家と言はれ、奴隸の労働を基礎とせる國富を中心として、

貴族並に平民を含めた支配階級の國家統治が成立してゐたのであります。エジプトのピラミットも、ギリシヤのパンテオンも、ローマのコロセウムも皆かゝる基礎の上に築いた當時の貴族的文化を代表するものであります。

ところで當面、教育は、そのやうな基礎の上にどのやうな形を以て現はれたでせうか。先づ教育の範圍について見るに、勿論それは社會の上層部に限られ、例へば、スパルタの如き全人口約十萬人中、僅かに九千人のドリヤ族の範圍を出でず、アテネも亦約五萬人中イオニヤ族一萬人の範圍に限られてゐたのであります。勿論この支配者群の四倍乃至九倍にも餘る人々は、奴隸又は奴隸的境遇下におかれ、「物言ふ道具」として動物的な取扱ひを受ける以外、教育などの對象とはなされなかつたのであります。

又多くの場合女子も、奴隸と共に教育の圏外に立たされました。蓋し、古代國家の時代は母權制を餘影として、すでに父權制確立期に入つてゐた時代ですから、女子の地位も亦低下しつゝあつたわけです。たゞこゝに注目すべきは、ヘブライ民族が、その特異な宗教的信念の立場から、家庭の教育を中心として婦人の地位を高め、後代の歴史に重要な位置

を占めてゐることです。又ローマにおいても、表面父權の優位が確立されてゐるにもかゝらず、家庭内の子供の教育を中心として、これは實際的の立場からやはり婦人の地位が正當に認められてゐるのであります。ですけれども、一般的趨勢は此の時期にあつてはすでに、女子に對して奴隸的な地位を與へつゝあつたのであります。例へば、古代ペルシヤの盛時といはれるサイラス王の時代にあつては、女子は義務として毎朝夫の前に跪き「あなたは私に何をさせますか」といふ意味のことを九回繰返して言はなければならなかつた。勿論その後、歴史は、女子の地位を次第に高めて來たといふものの、この古代における教育疎外の事實が象徴する女子の奴隸的地位の餘映が綿々として現在に及んでゐることも亦明かな事實であります。

扱てそれでは古代國家において行はれた教育の目標は何であつたでせうか。從來の教育史によると、例へばギリシヤにおいては「身心の調和的發達を遂げた公民」の養成が理想であり、ローマにおいては「意志的實際的國家的人間の形成」といふことがその理想であつた等々と述べられてあります。けれども、私共はさうした觀念的なものでなく、もつと

具體的目標といつたやうなものを探つて見たいのです。

例へば古代ベルシヤにおいては兒童は國家に保護せられ、七歳までは父母の膝下であり、それ以後は公立の學校において教育を受け、十五歳まで身體と道德の訓練をされ、十五歳以後は青年組に入れられて兵士となり、五十歳に至つて兵役を免除されるのであります。

この教育の國家統制と武力的訓練といふことはあらゆる古代國家において、種々異つた形においてゞはありますが、行はれた教育の形態であります。このことは、當時の國家が對外的には近隣と絶えざる戰爭の危険にさらされ、又國內的には尨大な奴隸群の統御の必要あり、といふわけで、教育も亦かゝる問題を克服しつゝ、國家の體制を維持するといふ目標を持つ可きであつたことを示すものであります。即ち當時の支配者達にとつては、自分たちの舊社會の維持のために以上の如き教育が強化され、それによつて自己の地位を安固にしなければならなかつたのであります。要するに古代の教育は國家的強制力を以て行はれたといふ點で一見近代教育に類似してはゐますけれども、勿論それは古代社會の經濟的構造の制約以外に出ることができなかつたのであります。

二

中世は、北方の新興ゲルマン族を中心として封建的支配の體制が着々準備せられ、一方イデオロギーとしてはキリスト教の教權が愈々強固となつた時代であります。

古代國家の廢墟の上に打ち立てられた中世國家は、武士階級を中心とする土地貴族の支配の體制であり、古代の奴隸は一應は解放されたが、その途上、土地と貢納制に縛られた農奴に轉化されたのであります。

この體制は封建的收取と、それを神聖化するための宗教的ヴェールとの二重の制壓を蒙つた暗黒の體制であつたのであります。

以上の如き土臺に照應して教育も亦、來世主義、天國主義、主情主義を以て彩どられ、キリスト教の強化を目的として起された高等教育においても亦、ギリシヤ哲學の粉飾を施した神學をその眞髓としたのであります。

更に中世末期に及んでは、法王權の衰微と新たなる土地貴族の擡頭に應じて、武士の教

育が高潮され、武士道の華とうたはれた十字軍が亂舞するに至りました。

併し乍ら、教権の牙城たる中世の大學及び本山學校がサラセン文化の影響の下に、その教科内容として取り入れた科學的諸要素によつて次第に宗教的ヴェールを取り外す役割を果すやうになり、又一方、都市の勃興に伴つて生れた市民學校も亦著しく近世的色彩を以て、重い中世の扉をおし開きつゝあつたのであります。

三

近代に入つたころ、乃はち歴史上の出來事から云へば、伊太利の商業都市を中心として起つたルネサンス（文藝復興）を起點として、フランスの大革命から現在に至るまで、この間約五百年五世紀の間を、それ／＼近古近世最近世などと學者達が區別してゐますが、實際この五百年の間といふものは西歐を中心とする殆ど全世界の國家社會には、一つの特殊な活力、今までのどの時代とも異つた社會力とでも言ふべきものがスク／＼と生ひ立つて來たのであります。それは、近古・近世などと區切り得ない一貫した力を以て貫かれて

ゐる時期なのであります。手近の教科書を取り上げてみても解るやうに、先づ第一にヨーロッパのアメリカ發見を中心とする發見につぐに發見、發明につぐ發明の時代、つゞいて十六世紀の全歐にわたる宗教改革、十七世紀に入つてクロムウエルの革命、つゞいて名譽革命の時代、この間、歐洲大陸は揉みに揉みぬいた諸戰亂の、その血に汚れた土の間からロマノフ王朝のロシヤ、ブルボン王朝のフランス、ステュワート王朝のイギリス、ホーヘンツォルレン家のプロイセン、更に小さい國では、オランダ、ベルギー扱てはスキス聯邦など續々と新しい近世國家が生れて來たのであります。

そして、英國に發展した産業革命が、どし／＼結實し、東方植民地戰となり、つひに一七七六年アメリカの獨立を最初の聲として、自由獨立が叫ばれ、一七九二年には巴里の都がギロチンの血しぶきに狂喜することとなりました。

この植民地戰を中心として展開し、ナポレオンの失脚を以て終る約百年間の英佛兩國の大規模な對立抗爭を、或る史家は「近世百年戰爭」と規定してゐます。けれども、つゞいて起る歐米の諸々の内部的紛爭を見る時、その原因は、遠くルネサンスの昔に歸らなければ

ば到底徹底的な解釋を下し得ない、更に嚴密に言へば、産業革命を起點としての前後の事情より、この數百年の歴史を見る時、そこに一聯の嚴格な法則が支配してゐることを知るのであります。英佛の政治的な對立を以て、之をその限りに於いて「近世百年戦争」などと稱することの誤謬は明かであります。成る程、かのジャンヌダークの出現をクライマックスとする、華やかな中世武士道の戦ひ「百年戦争」も英佛の領土争ひが原因ではありませんでした。然しそれだからといつて、近世初頭の百年間の戦争の眞の起因も亦「百年戦争」であるとは云へるわけのものでなし、要するにこのやうな歴史観は、あれやこれやの出来事から、特徴を拾ひ出して「何々時代」と締めくゝるに過ぎない。それは分析のない史観であり綜合のない史観であつて、正に非科學的史観であります。

その後歐米の内亂が次第に鎮まり、東洋への侵出が全く新しいやり方で行はれ始め、印度・印度支那・支那及び日本列島にまでその手が延びて、こゝに全世界が二つの色に色どられるに至つたのが一八〇〇年の末頃であります。二つの色とは植民地とその本國であります。かくして、世界は再び攪亂の徴を示し、西にモロッコ問題や南阿問題、東には南ア

ジヤを中心とした問題、更に新大陸に南米中米等々の問題、その究極において又歐洲戰亂が爆發するに至つたのであります。

四

扱て以上は近世史の極めて大ざつばな敘述であります。私共は歴史のかゝる段階にあつて、教育は、どのやうなものとして現はれねばならなかつたかを、一應概観したいと思ひます。

先づ中世の一般民衆が全く教育の圏外におかれたのに反して、近世教育においては民衆の教育が叫ばれるに至つたことに注目したいと思ひます。それは最初、宗教改革の内部で取り上げられ、「國家の支配者も亦、漸く國民教育のゆるがせにすべからざるを看、次第にその整頓に着手するに至る」といふやうな經路を通つて、こゝに國家的教育義務制の確立を促して行つたのであります。

蓋し高まりつゝあつた近世諸産業によつて要求されるものは、土地に縛りつけられた農

民ではなくて、土地と鋤から放たれた自由な労働民衆であります。と同時に近世諸産業はその建て前上、科学を基礎とするが故に、中世の無智な農民をば、一定度の文化水準に引き上げる必要があります。中世の市民学校は自然發生的な形で、ある程度此の要求を充すものではありましたが。併し、目まぐるしい産業の進展は、つひにこの教育を、もつと廣汎な國家的な規模において取り上げることが不可避にしたのであります。かくて、ドイツ・オーストリアを先導として、イギリス・フランス・アメリカ等々、各國夫々の事情に應じて、夫々異つた形においてはありますが、一樣に同じ問題を解決しようとの努力がつけられました。

併し乍ら、この産業の要求は、もと／＼何等か宗教的な恩恵から出發したものでなければ、又人道的な要求でもなく、本質的には利潤追求の一環としての要求でありますので、眞に合理的な形で之を解決しようとすることは望めません。そこには産業の貴族たちの恣意が働らき、限度が働いてゐるのであります。ですから、普通教育の體系が整ふに至るまでの過渡期、或は外形上の整頓を見た後と雖も、民衆の肉體的消磨と並んで精神的貧困が

存在するのであります。特に産産革命を中心とする近世産業の確立の時期においては、長い労働時間と高い生活資料とに基づく民衆の生活不安と並んで、無智と迷信と不道德行爲との蓄積が廣汎化してゐたのであります。この事實を前にして、近世産業の正しき要求に即しつゝ眞に合理的な教育を目くろんだのは、かのロバート・オウエンであります。

近世産業乃至近世工業は、その技術的基礎が變轉止むことなき進歩性を持つてゐるといふ點から、「種々異つた社會的機能を交々擔當し得る、凡ゆる方面に發達した個人」を要求する。この意味においてオウエンによつて目標とされたものは「終始一貫、常に合理的に考へ行動するやうに身心共に完成された男女」でありました。

かゝる見地からオウエンは十九世紀の初葉イギリスの片田舎ニューラナークに性格形成學院と稱する一つの實驗學校を起したのであります。それはオウエン自身の經營にかゝる一紡績工場に附屬したもので、木綿工或は紡績女工上りの教師との活々した會話の中で、子供は新知識を求め、機械の性質・使用法等を學び、ダンス音楽によつて健康と優美さを養はれた。かゝる環境に養はれた子供達の新性格、新行爲は、オウエン自身述べてゐるや

うに、「かざらぬ美しさと自然な禮儀とを示し、それが外來者を驚ろかし魅了した」。當時之が全歐に喧傳され、「ニューラナークの不思議」と稱せられたといふことを以てもその成果が想はれます。

ニューラナークは、一紡績工場を中心としたオウエンの理想郷であつて、「村の家々は工場の各部をなし、全部が一つになつて、ゼンマイ仕掛で規則正しく進んで行く一つの機械のやうに共働し……そこでは、泥酔も警察も裁判官も、救貧法も、慈善も全くその跡を絶つた」と言はれてゐます。まことに、環境の組織化としての教育の任務から見れば理想的のものではありません。併し乍ら、この試みは當時の英國の現實に對しては、理論的にも實踐的にも一個の「未熟な空想的な」試みとして、短命に終らねばならぬ運命を持つてゐたのであります。けれども、このオウエンの試みは、近世教育の持つ發展的の契機を把へて之を高く掲げゐるといふ點で、將來の教育に對して暗示深き問題を提供したものと云へるでせう。

五

以上近世に入つて展開された教育の主要な部面——國民教育について述べましたが、次に教育説の方面を一瞥させよう。

近世初頭、即ち行き詰つた中世的勢力が打開され新しい體制を生み出しつゝあつた時代にあつては、一般の學界の趨勢と共に、教育説としても進歩的な見解が續出しました。ルソーを筆頭とするフランス啓蒙派の自由への教育、近世科學の父、ベーコンの流を汲むロツク、コメニウスの經驗主義の教育、フランス實學派と呼ばれるモンテーニュ、フェネロンの教育説等々。勿論之等は、同じく進歩的と云はれるものの、各國夫々の社會の情態進展の程度によつて差異があります。例へば、一應は封建を揚棄し、端緒的には近代的産業の一段階、マニユファクチュアに達してゐた英國を背景としてのロツクと、英國産業革命の餘波を受けてゐたとはいへ、ブルボン王朝の絶對權に壓倒されてゐたフランスの尖鋭な啓蒙主義者と、再び封建制に逆行しつゝある神聖ローマ帝國に發した新教思想家達と各々

その特殊點があるのであります。此等の點を明かにすることによつてこそ、始めて私共は歴史上の人物をその正當な位置に置くことが出来るでせう。

扱つてその後、ドイツの理想主義哲學を中心として或は論理的精密さを持ち、或は詩的幻想の姿で展開された諸々の哲學の諸流派によつて教育説も亦益々體系的のものとして現れるやうになりました。カントとペスタロッチによつて打立てたナトルプの教育説、ヘルバルト、チルレルの道德教育、ディルタイの生命哲學によるシュプランガーの文化教育學説等。

此等の諸説の特質とも云ふべきものを見出すために、こゝに文化教育學を取り上げて見ませう。文化教育學の基礎をなすディルタイ派の文化哲學においては、文化は世界精神の段階的發展であり、自然的及び神的存在の調和の完成する世界的過程である。つまりこゝには超個人的な世界精神があり、その發現が政治・經濟・學問であるといふのであります。又「個人は社會の平等無差別の原子型態」であるといふ社會の有機的機械觀及び文化が一時代より他の時代へ量的にのみ増大するといふ連續的成長觀によつて裏付けられてゐ

ます。

だが國家發生以後の個人は果して平等無差別な原子型でせうか。又果して文化は量的發展に止るでせうか。奴隸と農奴とプロレタリアートの存在、古代文化と封建文化と近代文化との質的差異を想つたゞけでも、この哲學が社會の物質的な條件から目を外らした遊離的のものであることがわかるでせう。

次に此の文化哲學を基礎とする文化教育學において重要な部分、個性論に目を轉じよう。シュプランガーによれば生命が追求して行く價值の方向は、理論的・經濟的・審美的・社會的・權力的・宗教的の六種であつて、その各種の方向に應じて理論型・經濟型……等の個性の類型が生ずる。而して教育者の任務は、生長しつゝある若人の心奥に立入つて、その將來發展すべき個性の方向を理解し、之に文化價值を傳達することによつて、之を充分に發展せしめ、將來それ／＼独自の方向において文化を生産し發展せしめるやうにするこゝとであるといふのであります。

此の個性論に基づいて、エー・シュテルンは、教師の生活型式（精神構造）なるものを

規定しました。それによれば、教育者は、上述の六つの類型の中の社会的な生活形式に属し、愛を中心活動として、しかもこの愛は、戀愛でもなく受容的愛でもなく、純粹價值的見地に立つ子弟愛と文化愛とであるべきであります。而してかゝる子弟愛と文化愛とを中核としてそれに理論的・審美的・經濟的等の精神が結合した完全圓滿な個性であらねばならない。即ちこゝでは、「教育の神聖」「天職」が強調され、教育者は、地上的な現實的な關係を離れた「無垢な天使」の守護者として、遠く天上に祭り上げられてゐるのであります。即ちこの教育説は教育の政治的疎外に油を注ぐものと言へるわけです。

更に此の教育説の具體的主張としてのケッセラの文化學校の説、トリートマンの國民文化科の説等を見るに、「生命の把握」とか、「國民社會の激動の緩和」「國民的意識の高揚」といつたやうな空漠たる觀念的言葉の蔭に特殊な意義を含めたものが語られてゐるのであります。

蓋し、近世諸國家が、自由競争の工業生産の段階から、次第に獨占の段階に入り、新たな國民的装ひを以て對立しなければならなくなつた時代、就中、歐洲大戰後の破局的な

ドイツの情勢の中から生れた理論として見れば、その特殊の意義も奈邊にあるかを略々知ることができませう。

以上私共は西歐の教育史について、その特徴的な點の概観を述べましたが、以下近世教育の三つの源泉をなすフランス・ドイツ・イギリスについて、やゝ立入つた検討を行きたいと思ひます。

第二章 英吉利の教育

—義務教育を中心として—

一

英國は周知の如く、近代産業の標本國と言はれてゐます。従つてその意味においては、近世機械工業の基礎に立つ文明の典型的な面を代表する國であります。

併し乍らそのことは、その他の國々の文物乃至諸制度が、其の範を英國に求めたものであるとか又は、其の出来合の型を英國に見出したのであるとかいふことではありません。例へば當面、教育について之を見るも、近世普通教育の廣汎な基礎が確立されたのは、英國にては一八七〇年のフスター教育法案を劃期するにもかゝらず、佛國にては一八三三年のギゾーの教育令であり、獨逸においては、既に一七八四年のプロシヤ普通國法による

教育の國家統制の實現の時期であります。

機械の先驅、産業の先驅、そして文明の先驅たる英國、乃ち十八世紀の後半から十九世紀の前半にかけて所謂産業革命が最も本格的全面的に行はれその波及するところ、歐洲は勿論全世界に衝戟を與へ、各國夫々の歴史的事情の制約の下に、同じ變革を夫々の姿において遂行せしめる槓杆となつた英國、この英國において何故に近世普通教育が、以上の如き時期に後れた時期に登場しなればならなかつたか。この點は本章を通じて明かにしようと思ふところであります。

ところで、英國が一種の典型國と見られるその文化現象の觀點からではなく、其の基本構造に觀點が置かれてゐるのであります。即ち十五世紀末葉から十六世紀初葉にかけて行はれた土地所有の集中化を序曲として、徐々に封建的な基礎を崩壊せしめ、一六八八年の名譽革命を劃期として轉生せる近代英國は、前述の産業革命の拍車を得て、其の典型的な基礎構造を獲得したのであります。

かゝる本格的な道程を経て出現した近代英國は、その基本的諸特質において一般性を持

つものであり、その一般性は當面、この國の教育機構にも貫徹してゐるものと見られます。これ本章において明かにしようと思ふ第二の點であります。

次に教育義務制に注目する所以は、それが近代國家の教育的努力の中核であり、教育における生産點を代表するものだからである。

蓋し近代教育は、近代國家構成の特質上、形式的には平等主義、機會均等主義の宣言の下に、産業の兵士達の生活技術的、イデオロギー的、社會的訓練乃至は政治的訓練を内容とするものでありまして、強制普通教育は必然的に國家的要求として現はれるものであります。要するに私共は、近代英國における教育義務制の確立過程を、英國々家の基本構造との關聯の下に検討してみようと思ふのであります。

二

近世普通教育は、それが國家的統制の手に納められる以前にあつては、即ち中世的な封建的な殻を破つて成長した産業組織が、必然に要求する一定度の文化水準に對して、なほ

個人的に答へなければならぬ時期にあつては、人道的な、宗教的な形での學校教育が現はれた。英國近世教育史上に現はれるジョセフ・ランカスター及びアンドリュウ・ベル等の業績は、恰かもかゝる時期を代表するものであります。

ベルはランカスターと共に所謂相互教授法の創始者として有名であります。この教授法は單なる思ひ付きの教授法として見逃すべからざる特質を持つものであります。即ち彼自身の語るところを以てすれば「一人に授くるに教授の方法を以てし、而して善くこの法を行はんに、校長一人の監督を以て全校生徒を教育することを得可し」と。

校長一人で全校生徒の教育をするし、勿論これは空言ではなくて、彼がそのマドラスにおける實驗を基礎として言明するところであり、且つ殆ど同時に同様の方法を以て貧民教育に手を染めたランカスターのそれと共に、十九世紀初頭の英國初等教育界に普及した事實は蓋し注目に價する。

ベルガマドラスよりロンドンに歸つて「互教法」を著したのは一七九七年、當時の英國は既に紡績機、織機及び蒸汽機關等の諸發明改良が一應完了して、近世的な機械工業の黎

明期にありました。「世界の工場」イギリスにおいて支配的なものは機械工業であり、それは單に生産面に止らず爾餘一切の社會的諸關係に浸透するところの迫進力を持つてゐました。機械は、過去一切の勞働要具に劃一的な進行を與へ、その進行に對して技術上勞働者が隸屬せしめられ、且つ勞働總驅が男女老幼様々な個々人によつて構成されるやうになると、茲に兵營的な規律が造り出される。そしてこの規律は更に完全なる工場規律制度となり、監督上の勞働を十分展開せしめて、産業上の下士と兵卒とへの分業を生ぜしめるに至るものであります。ベルの所謂相互教授法の内容はまさにかゝる工場制的な規律と組織とを反映するものではないでせうか。彼がエツヂウォルスなる人に贈つた答書の一節に「抑々陸海軍の制は畢竟此の監督法の大なるものにして、軍人の行爲は皆之に制せられ候ものに候へば、學校の大組織は宜しく之に則り申すべき義と考察仕り候云々」と。そして彼のこの「監督法」は分團化された受教生の上に助教生を置き、助教生の上に上等助教生を置き、その上に教員を配し、最後に校長が一點に之を集中し、その「黒簿」に全監督の成果が反映されるのであります。近代教育の尨大な監督機構の雛形を提供したものは言

へないでせうか。

三

ベル及びランカスターによつて試みられた初等教育における改良主義的な企圖は、夫々一八〇八年設立のローヤル・ランカスター協會及び一八一四年設立の全國民協會として發展し、その限りでは教育の國家統制への道を準備したものであると言ふことができます。併し乍ら、例へば前者がクエーカー派を背景とし、後者が「既設教會の教義によりて貧民の教育を普及するための全國協會」と註せる如く、各々宗派的な偏見の埒外には出でず、且つその教義による「品性の陶冶」と教授の方法に終始してゐたがために、當時の機械工業の進展と、それに伴ふ少年並に幼年勞働への増大する要求、それ等の假借することなき使用の結果として無知と道德的墮落に對して、之を如何に處理すべきかといふ現實的な社會的な問題との聯關の上に教育を取り上げることが出来ませんでした。この點において一歩進めた者はロバート・オーウェンです。彼は「萬民のための教育」「合理的人間の養成」

を標榜し、國家教育を強調しました。即ち「あらゆる國家が善政を行はんと欲するならば、人間の性格形成に對して其の主要なる努力を傾倒すべきである……國家教育制度においては、最善の教育方法を採用することの願はしきは勿論であるが、これにも増して願はしきは又最善なる教育内容を採用するといふことである」と。

即ち彼によれば「善き教育内容」の國家的採用こそ願はしいのであります。こゝによる内容とは何か。それは人類文明の頂點たる機械工業が人間の「合理的性格形成」に對して影響を及ぼすやうに配置された善き環境であり、延いては合理的な社會秩序でありました。そこで彼は機械の悪しき充用が生んだ悪しき環境に由來するところの多數の民衆の無知と不道德と墮落とに對して人道的興奮を覺えつゝスコットランドのニューラナークの小植民地の一紡績工場を中心として、理想的な教育を試みたのであります。これ當時全歐に宣傳された所謂「性格形成學院」であります。

オーウエンにおいては、ベル及びランカスターの場合の如き宗派的偏見が克服され、之に替ふるに「善き教育内容」を以つて、且つその社會改良的な體系との聯關において、教

育の國家統制が積極的に情熱的に取り上げられてゐます。

併し乍ら當時の英國の社會的、政治的事情の下にあつては、乃ち大工業がなほその霸權確立に至らず、一方それが未だ古い貴族的な支配の紐帶によつて結びつけられてゐた當時にあつては、教育義務制を一舉に取り上げることとは不可能でありました。こゝにおいて所謂工場法中にその要求を含めることによつて、必要程度の効果を收めようといふ一系列の努力が現れて來ます。

四

近代英國は全體として最も代表的な近代國家であると同時に、それは無数の小國家の集合であるとも言へます。小國家とは即ち工場である。工場制的な規律と組織とを除いて英國を考へることは出來ません。農業部面においてさへ、その企業的な經營と農業労働者の充用とによつて、同じ規制が貫徹させられる。

かゝる小國家内の暴君の行動に對する最初の社會的反應としてさし向けられたものが工

場法であります。だが機械工業の初期にあつては、この小國家内の独自の専制的な規律が
強行される結果、外部的に與へられた工場法は往々空文化される場合が多い。例へば、一
八〇二年の工場法にては、「勞働者乃至一般庶民に對する教育的施設を國家が營まねばな
らぬ」ことを原則的に認め、その條項中にも、「勞働時間の制限」「夜業禁止」等々の肉體
的、保健的規定と並んで「徒弟は讀書算の教育を授けらるべきこと」との規定を設けてお
ます。

併し乍ら一八一五年頃は既に空文化し、新たに工場法運動が発生したが、其の結實とし
ての一八一九年の工場法の如きは却つて何等の教育條項も含まないものでありました。そ
して一八三四年の工場法及び一八四四年の改正工場法において貧弱乍らこれを取入れるに
至つたのであります。

蓋し、機械工業の進展は一般の文化水準の向上を要求し、産業の貴族の勢力の増大は、
古き貴族的勢力との對立から、自己の側に大衆的基礎を獲得するための政治的啓蒙を必要
とする等の理由から教育義務制の要望が高まつて來たわけであります。こゝにおいて、單

に個々の工場を取締る工場法に附隨して教育を統制するのみでは不充分でありまして別個
獨立の統制を打立てねばなりません。その最初の現れは、一八三三年の初等教育への國庫
補助金の支出の決定であります。これは、一八一六年の「庶民教育調査委員會」及び一八一
八年の「國庫補助學校調査委員會」等の準備段階を経て實現されたもので、金額は年二萬
ポンド、一八三九年以後は三萬ポンドに増してゐます。其の後、一八五八年、國民教育の
状態を研究調査するための「ロイヤル委員會」の組織、一八六一年、ロバート・ローの「成
績に基ける補助案」等を基礎として一八七〇年、劃期的なフォスター教育法案が成立した
のであります。其の三大原則とするところは、

- 一、學校費が有志者の努力によつて辨ぜられない地方にては税金を課し得ること。
- 二、有志的努力の缺乏する地方においては、輿論の要求に應じて地方教育の代表機關
(スクール・ボード)を設置すること。

三、其の地方的機關の勢力により五歳より十三歳までの強制教育を行ひ得ること。
以上であります。なほその外、私立小學校及び各宗派小學校への補助金下附によつて、そ

れ等への國家的統制を強化し、國教會より教育上の勢力を分離せしめ、唯宗教々育に對しては無干渉主義を採つた等のことを指摘することが出来ます。

五

この原則的な部分に現はれてゐる著しい特徴は、教育の「有志」委任的、「地方」委任的傾向ですが、これは所謂輿論と共に長期の論争を経て教育の國權的統制を實現することに至つた英國の近代史的背景を物語るものであります。即ち小國家的統制の蓄積された經驗を基礎として打ち立てられ、且つその綜合として現はれた英國の教育統制にとつて、それは避く可からざる傳來的な影をなしてゐるものでせう。この點は例へばフランスの學制及びその流を汲む日本の學制等が、最初から政治的に持ち込まれ、そこに餘すところなき國家的統制を具現せしめてゐるのは著しく異なる所以であります。

兎も角このフォスター教育令の時期は、既に大工業覇權の確立期に當り、その支配的勢力の產物であると言ふことが出来ます。勿論部分的には、例へば宗教々育に對する中立的

態度に見る如く、舊勢力との妥協的要素を含んではゐるけれども、全體としては、まさに英國における教育義務制にとつて一飛躍であり、劃期的な業績であります。それ以後における諸段階は單に部分的な改變乃至量的な進展にすぎません。即ち一八七六年の學齡一ヶ年延長（十四歳迄）、一八八〇年の就學義務履行の強制に關する規定、一八九一年の小學校全部の無月謝制採用、及び一九一八年のフィッシャー教育令を劃期する小中學校の統一化、補習學校義務制化への努力、視學制度の緊張等々を數へることが出来ます。尤もフィッシャー教育令は、歐洲戰後の特殊な社會情勢への反應として生れたものでありまして、その意味において一エポックを表すものではありませんけれども、それはフォスター教育令及びその後の諸改變を基礎としたものであり、その意味において、やはり傳來的な英國的特質を負ふものであります。そのことは同時にこれら一切の教育義務制の歴史的な背景の下に國民教育を強調する勞働黨の教育政策にも集中的に現はれて來るところである。

勞働黨は國民教育の重要性を主張して次の如く言ふ「純經濟的立場から見、一國の資本の最も重要な部分はその包容する人間である。國民の體力智力を増進するために投ぜら

れる富は、あらゆる投資の中で最も収益の多い投資である」と。一つの産業単位においても、そこに投資せらるゝ資本の最も重要な部分はその包容する人的要素であるといふことも亦確實なのであります。

要するに英國における教育上の國家統制の特質は、一つの生産單位を基礎として、あくまでもその實情に即しつゝ考慮した全體的統制を打立てると云ふ點にあるかに思はれます。

六

教育義務制の形態上の諸特質と共にその内容的側面、就中その目的乃至目標についての考察も亦必要であります。こゝにそれを約説的に取り上げませう。

國家的義務制確立以前にあつて、乃ち教會的な勢力乃至は工場法の強制力等によつてそれが代行されてゐた時期にあつては、日曜學校、週間學校施設などが主要な機關でありましたが、その教育目的として揚言されたものは、宗教的なヴェールを以て包まれた「品

性の陶冶」「徳性の涵養」等々以外のものではありませんでした。それは、例へば古い傳統を誇るパブリック・スクール乃至はその他の高級諸學校において「善良なるキリスト教紳士の養成」を目標としてゐるのにその原型をもつものであると言へませう。

かくてひとは大英國の教育理想は「紳士」にありとし、これを中心として養はれた英國國民性について云々するかも知れない。成程、當時世界の産業界に君臨した英國にあつては、世界市場における自己の地位に對する誇りや、機械文明が産む暗黒面に對する宗教的な感じ方や、不可知論的な物の考へ方や等々の一般的な紳士的な教養は、産業の貴族及び國家機關の高級分子並びにそれらをめぐる上層部分にとつては必要なものであつたに違ひありません。併し乍ら既に産業革命は英國國民を相異つた二つの部分に分裂せしめたと言はれる如く、他の一方の國民を形成する尨大な労働者人口は、イングランドの大工業諸都市に蝟集するものと、アイルランド、スコットランドの農業地方から流入して来る、より低度の生活水準の下にある移住民との混和によつて、血縁のみならず、その風習、生活感情等においても著しい變化を遂げた。であるから彼等は、所謂「紳士」的教養とは恐らく

對蹠的の教養を必要としたでせう。彼等は、カーライルの言つた様に「無情冷酷な自由放任の犠牲者」として、絶えざる飢餓と窮乏の自由に直面し乍ら、如何に思索し行動すべきか、何を要求すべきか、といふことを自ら學び取らねばなりません。そして彼等の自己教育はチャーチズムに成長して行つたのであります。

かゝる國民に對して「品性の陶冶」を宗教と共に語ることは、一方が一方に對する支配の紐帯を強めること以外に何か残るでせうか。それは、無知と墮落と不道德とに對しては觀念的に善き内容であるに相違ない。併し乍ら、例へばオーウエンにおける「善き教育内容」乃ち機械の合理的充用と小國家内の生産行程の合理的な統制によつて與へられるところの、善き環境によつて身心共に合理的な發展を期待せんとするものに比しては、現實遊離的な空疎な觀念的な内容として止らざるを得ないでせう。

七

支配的な觀念體系にその終局を持つ目的の以上の如き設定は、更に進展して新たななる装

ひのもとに現れて來ます。即ち「教育義務制の目的とするところは特殊な職業の特殊化された専門的知識技能を與へんとすることではなくて、人そのものに附隨するところの人間としての技能を發達せしめ、將來特殊化の基礎とはなり得るけれども、或る特殊な職業に對する功利を越して價値を有する興味を作り上げることにある。」

こゝで言はれることは「人間としての機能」であり「一般的な興味」であり「基礎教育」であります。總じてかゝる一般的陶冶乃至は順應力養成は近世普通教育の要望の中に遍在するところであるが、特に産業上の諸變革の標本的に行はれた英國においてはそれが特徴的に表現されてゐます。蓋しそこにおいては、都市と農村、本國と植民地との對立が鋭角的に成長し、かゝる關係があらゆる二元的な分離の伏線となつてゐるのであります。即ち産業の指揮官とその兵卒乃至豫備軍、肉體労働と精神労働等々の分離が蓄積され擴大され普遍化されて行くのであつて、教育における基礎とその特殊化とか、一般的陶冶と職業的陶冶とかの分裂は蓋し必然であります。かくて基礎的、一般的陶冶にあつては、社會的な生産行程と労働行程からの用心深い隔離と抽象的な「人間」のための教養とが要求さ

れ、注入と劃一と無上命令的な規律とが要求されるのであります。そこでは所謂「全面的に發展した人間」への道は鎖されざるを得ないのです。

一般に、教育におけるかゝる矛盾の止揚は、單なる勞作主義的な試みを以てしては不可能であつて、それはより廣汎な前提條件の成熟を待たなければなりません。そしてそのことは、單に英國についてののみならず、總べての近代國家における教育義務制についても言ひ得ることであらうと思ひます。

第三章 佛蘭西の教育

——ルソーを中心として——

風光明媚を以て聞えるジュネーヴの湖畔、國際都市ジュネーヴの廣場の一角に、四大改革家記念碑といふものが立つてゐます。即ちルソー、カルヴァン、ヴォルテール、ドリユール、シエールの四人群像が、自由と清澄の大空を見つめ乍ら、スイスの生んだ歴史的人物として永く記念されてゐるのであります。

扱て私共は手近の近世史の頁を繰つて見る時、更に上記の四人以外にも、ペスタロッチ、ラチヒウス、モンテイニウといふ様な所謂近世の啓蒙家達が、皆多かれ少かれスイスに關係があつたといふことを發見するでせう。



このことは唯單なる偶然でせうか。或は又それは、スイスの風光明媚に歸すべきでせうか。

こゝでふと心に浮ぶものは、詩人シルレルの傑作として人口に膾炙されてゐる「ウィリアム・テル」、即ちスイス建國の傳説であります。

中世時代のスイス二十二州は獨逸のハプスブルグ家の所領であつて、スイスの民はその壓政の下に呻吟してゐました。このハプスブルグ家の壓政の手先、代官ゲスレルが、一農夫ウィリアム・テルの一矢に倒された時、スイス全土の民衆が立ち上つて獨立を宣言したのであります。

スイスが、かゝる傳統を誇る國であればこそ、ルソーを生み、ヴォルテアを生みカールヴィンを生んだのだと言へないでせうか。且つスイスは、十八世紀においてすでに、その進歩した政治制度と共に、小規模乍ら工業も比較的發達してゐた様であります。ルソーの父が時計師であり叔父ベルナルが技師であつた等といふことから推して、當時のスイスは、實に羨望に價する程自由と活氣の漲つてゐた國であつたらしい。

それ故に、ルソーも自ら一七五四年その懸賞當選論文「人間不平等の起源並に根據に關する一論攷」の序文において、「自然が人間の間に設ける平等と、人間のとるに至つた不平等に就いて先づ最もよく自然と調和し、社會と公的秩序の維持と、個人の幸福とに最も都合よき方法においてこれらの兩者を國家の中に巧みに結合せしめ且つ調和せしめ」てゐるものとして、ジェネバ共和國に讃辭を呈してゐるのであります。

スイスが近代の先覺者達を生んだのは、決して單なる偶然や、その土地の空氣や景色の故ではない、總じて一個の思想家乃至は思想は忽焉として現はれるものではなくて、それを生むだけの實際的な理由と根據とがあるといふことを知るのであります。

二

當面の人物たるルソーは、周知の如く近代教育史の又近代思想史の第一頁を飾る人でありまして、近代の教育思想、即ち自由主義、直觀主義、勞作主義等々あらゆる教育説は、彼ルソーから發してゐるとは、現在教育理論家の定説とする所であります。けれども私共

はそのやうな探索趣味には陥るべきではない。一つの教育理論を遠く人類の初發までさか上り、又はギリシヤにまで遡ることは、或ひは必要な場合もあるでせうが、それがもし單に、その學說に重味や古色をつけて一種神秘的なものにせんとする意圖から出たのであるならばそれは現實に教育を進めるものでは斷じてあり得ない。

例を行論上、「勞作主義」教育にとります。ご存じのやうにこの主張は、革命後の獨逸共和國の時代、即ち思想混亂の絶頂にあるドイツにおいてケルシエンシュタイナーにより代表的に唱導されたものであります。

ところでこの理論の主題は、煎じつめるところ「勞働は神聖なり」といふにあつて、その勞働が如何なる形のものであらうと、即ち手工業的のものであつても、或ひは大工業附屬の機械によるものであつても、そこに何等の區別がない。一律に「勞働は神聖」なのであります。又アメリカのデューキの説く「生産」教育は、その根本を一言で言へば「學校は社會の縮圖である」といふのであつて、その立場から、アメリカ社會の縮刷版として、そつくりそのまゝ機械を學校に移入して「これが社會だ」といふのであります。

何故に勞働は神聖なのであるか。何故に學校は社會の縮圖であるのか。私共はこゝでルソーに訊ねてみませう。

彼の「エミール」は、その先生によつて、人間の「自由」を教はらうとしてゐます。先生は「先づ第一に子供に與へなければならぬのは、自由の觀念ではなくて所有の觀念である」として一片の土地に蠶豆を植ゑさせ、水をやり、雜草を取り除ける。それは「彼の時間、勞働、骨折り、彼の人格を加へたのであるから、誰に對しても、この土地は自分のものであると主張することができる」のです。ところが一日園丁が來てみると、自分の植ゑた草が無くて蠶豆が出來てゐる、そこで彼は、自分の「勞働による先取權」を主張してエミールを屈服させます。此處まで來れば「所有權及び交換の觀念」までは一步しかない。とルソーは言ひます。即ちルソーは勞働の先取權を説いて以て自由主義を體得させる、もつとはつきり言へば個人の自由競争を教へ込むのです。ルソーは確かに當時にあつては充分の確信を以て自由の爲に勞働を説いた。ルソーにおける勞作主義は、その基礎を進歩的な自由においたが故にのみ進歩的であつたので、彼は決して單なる「勞働の神聖」を説い

たのではなかつたのです。

然るに現在の勞作主義、少くともケルシエンシュタイナー等によるその主張は、かゝる基礎に立つてゐるだらうか。若し立つてゐるとしたならば現實の社會はかゝる意味の自由を許容するでせうか。否。社會はすでに自由の女神を墓穴に送り込んでゐる現在なのです。

三

ルソーが「エミール」で述べてゐることは、一人の教師による一人の生徒の教育、即ち家庭教育であります。私共はこゝで次のやうな疑問を持ちます。即ちルソーの時代を轉期としてあらゆる近代國家には統一的な學校教育が榮えて來ました。時代の先覺ルソーが、何故エミールに對して、この組織的な教育、學校教育への見透しを與へてゐないのだらうか。「勞働の先取權」を説いて個人の自由競争を教へようとする「エミール」に、何故かうした小さな殻を與へねばならなかつたのか。成程從來の教育史家達は、「それが所謂ルソーの自然である」と、概念的に片付けてしまひます。果して「自然」であるならば、そ

れは「人間性」といふやうな立場からの自然であらうか。この點を少々吟味してみたいと存じます。

ルソーは、その懺悔録に見る如く、かのルイ十六世治下のフランスにおいて、放浪と迫害と耽溺の中に一生を終へた人であります。彼の眼に映じたフランスの社會は、最早や救ふべからざる混濁と廢頽の社會で、この渦中から彼の社會に對する根本的批判の言葉が生れるのであります。即ち「善良な社會制度は人間を最もよく不自然にすることのできる制度である」と。十七世紀の中葉即ち名君ルイ十四世の時代において、かの名宰相マザレン、リシュリウの開明的な政策があつたけれども、その政策の下に、諸産業の保護助成、航海植民の伸展が行はれ、ば行はれる程、そして王室と貴族と僧侶との富即ち國富がつもればつもる程、又パリが社交と禮容と風俗との中心となればなる程、フランスの社會的分裂が益々激しくなつて行くのであります。しかもフランスはその後名君出でず、ルイ十五世治下においては、行政の紊亂財政の困難、宮廷風紀の壞廢その極に達したと言はれる。此等一切の事象の底を流れるものは、廣汎な自營農民が、その牧歌的な生活と土地と故郷を

喪失して、滔々として都市に集中する過程であります。既に名君ルイ十四世治下においてすらパリは「浮浪人の王國」化し、一六五六年には勅令を以て救貧法を發布せざるを得ない状態でした。

ルソーの「新エロイズ」は農民のために書かれた小説で、都市文化の下らなさを暴露したのですが、その序文の中で彼は次の様に言つてゐます。「小説はその讀者の境遇を愉快にし、讀者をそれに結びつけてはなれぬやうにしないでだめだ。そしてどうしても大社會の箴言を破り捨てるやうにしないではならぬ。それには、それ等の箴言をそのあるがまゝに示してその誤つてゐる所輕蔑すべき所を讀者に示さねばならぬ」と。この破り捨てねばならない「大社會の箴言」が益々堪へ難きものとなつた當時の情勢をば卒直に表明してゐるのであります。

四

かゝる風潮の中に徹すれば徹する程、ルソーにあつては、この状態からの徹底的な解放

への道を、たとへ多少ロマンチックな意味においても探し求めねばならなかつたのでせう。げにルソーにとつては如上の人口の都市集中の一事だけでもすでに歐洲の破滅を思はせるものであります。同じく上記序文中で「この傾向（都市集中）は各國の住民を一地方の數個に集中蝟集せしめて、或る數點の地以外は皆荒蕪荒廢に歸せしめるのである。斯うして都市が盛になるために、一方では國民の人口が減少し、馬鹿な人達の目を驚かす『淺薄な光輝』は、歐洲をしてその滅亡に赴かしめてゐる」と。この歐洲の滅亡は、あながちルソーの誇大な幻想ではありません。イギリスにおいてすでに、十四世紀の末葉から十五世紀にかけて行はれた農民の土地喪失過程が、其後次第にヨーロッパ各國に瀰漫し、各國共それ／＼特殊の様相をとりつゝも、近代的産業への大轉換が徐々に進行し、特にフランスでは最早や抜きさしならぬ政治的解決に迫られてゐたのであります。地方農村の荒廢、都市をめぐけて蝟集する浮浪者の群、しかも當時のフランスの生産状態の下にあつては、即ちマニユファクチュアを基礎として漸く芽生えかけたばかりの機械工業の下にあつては、封建制より來る交通の不整備と商品市場開發の未發展との故に、このルンペンの大

群を正規な近代的プロレタリアとして吸収し盡すだけの能力が無かつたのであります。この光景こそ心ある者に歐洲の破滅を思はせるに充分であつたと想像し得るのであります。

此の破局的な社會情勢を前にして生れたルソーの教育論が、あらゆる既成の封建文化諸制度の打倒を以て一貫してゐるといふことは、まことに故あることでありまして、「自然人か社會人か、人を造るか市民を造るか」と尖鋭に問題を提出しつゝ社會人として覆はれてゐるあらゆる衣をかなぐり捨てた眞裸の自然人を目標としたことも充分肯けるのであります。

従つて彼の「エミール」における家庭教育は、例へば吾が國の紹介者が言ふが如き「世の母親に捧ぐる絶好の参考書である」といつたやうな意味での家庭教育ではなく、當時のあらゆる廢類的な諸制度の影響を拒否しつゝ一個の捕はれざる自由人を仕立て上げようとする、一種の抗議の意味での家庭教育であります。であるからそれは單なる教育お談義ではなく、一個の統一的見地を含んでゐるのであつて、マニユファクチュアより大工業確立への社會的轉換の時代を正しく反映するものであります。だからこそそれは十九世紀にお

いて普及した兒童研究、教科課程の整備を豫言するかの如き精緻を極めた兒童觀察と五歳、十二歳、十五歳を劃期とする教育課程の問題を提起してゐるのであります。そこに彼の進歩的な立場を認めざるを得ないのであります。

五

以上において私共は、ルソーの教育説の最も特徴的な面について、概略的な検討をなし、併せてその教育史的位づけを試みました。つゞいて、私共は、ルソー及びかの啓蒙主義者達によつて見透しを興へられ、且つ爾後封建制度解體の一世紀間に互つて形成されたフランスの教育をその制度的の面において約說的に述べてみたいと思ひます。

ルソーの死後十年、一七八九年を劃期とする大轉換の時期につゞく一世紀間は、政治的、經濟的變動の坩堝の中から新しい社會機構が形成され強化され擴大されて行く過程であります。即ちそこではブルボン王朝をトップとする一切の抑壓と欺瞞の體制が眞向から斧鉞を加へられ黑白を問はれ、車輪にひしがれて行くと同時に、人民の名において宣言された

自由、平等、人權、科學の解放、教育の機會均等等の言葉が、形成された新しき社會の中に其の限界性を露はにすればする程、近代工業の騷音の中から批判と検討の眼を向けられて來るのであります。

この過程の中に形成されたフランスの近世教育も、その初發においては、即ち國家の手によつて制度化される以前にあつては、僧侶的な一聯の努力がなされました。

併し乍ら此の僧侶的な努力は、近世諸産業の確立と農民の封建的生活羈絆からの分離とに由來する民衆の加速度的貧窮の増大と、文化水準向上の要求との間に横はる矛盾の解決に對して甚だしく無力なものでありました。であるからそれは、十八世紀に入つて躍進的に現はれる世界市場の普遍化と、それを伴ふ國內産業整備の急迫には到底應ずることができず、こゝにおいてシャロツティは、一七六三年、普通教育の國家統制の必要を説き、ヴォルテール、ディドロは、中世的大學の必要論を唱へる一方、小學教育の實施を要望するに至るのであります。この要望が最も尖鋭に提出されるのは、かの大革命の時期でありまして、一七八九年乃至九五年の擾亂の期間には、當時の革命政府部内の種々の流

派の人々によつて、例へばタレラン、コンドルセー、ラカナール等々によつて、徹底的な強制國費教育案、宗教團體の解散が討議され決議され、部分的には實施され、九五年には、かゝる政策の一つとしてパリ師範學校の設立を見たとあります。

併し乍ら當時のフランスは、かの絶大なる民衆的エネルギーの高揚にも係らず、宣言された第一共和を維持展開し得るだけの社會的根據を缺いてゐたが故に、愛國的・國民的統一を希求する廣汎な獨立農民層に基礎を持つナポレオン一世の帝政に座を譲らねばならなかつたのであります。

一七九九年以後着々實施せるナポレオンの全國內政策は、著しく劃一集權的のものであります。その學制も亦、上に大學長官、學區總長があり、その下に各分科大學、中學、小學が統制を受けるといつたやうな形のものであります。ナポレオン政權の集權的特性の根據は、要するにフランス國內外の封建制打破のための武力的統一にあるのであります。當時の學校用の教科書「問答示教」において、子供達は次のやうに言ふことを教へられました。

「クリスチャンはその治める君主に、そして私達は特に私達の皇帝ナポレオン一世に對して愛と尊敬と服従と、忠節と軍事的奉仕及び帝國と彼の帝位の保護のための課税等に對して義務を負ふものであります。私達は又陛下の安全のために、そして國家の精神的繁榮のために熱烈なる祈りを爲すべき義務を負ふものであります云々」と。若いゼネレーシヨンに對して、かゝる熱狂的支持を要求しなければならなかつたナポレオンにとつて、その組織した教育體系が、學校の統制、教員の統制、授業への干渉等を含めた一點集中的のものであつたことは當然であつて、あらゆる文化統制策（反政府諸新聞の禁止、非フランス的書籍、演劇の禁止等）の重要な一環をなすものであります。

六

扱つてこのナポレオン時代の教育制度を特色づけたこの劃一性は、果してナポレオンを以て終りを告げたのでせうか。

一八一四年ナポレオンの失脚とルイ十八世の即位によつて實現した復古王政は、勿論十

八世紀の王政とは質的に異つてゐるとは言へそれがブルボン王朝の正統派である限り、その全政策において僧侶の特權を前面に押し出したことは當然であります。従つて教育においても、僧フレッシューが大學監を拜命せる如く、僧侶が國家の全教育を委任され、「宗教道德の薰陶」を以て眼目としたのであります。しかもその著しい教育の干渉統制の機構は直接にナポレオンの統一を繼承し次の七月王政に之を引渡したのであります。

一八三〇年から四八年までのオルレアン王政は、その實質においてすでに、近代商工業を基礎とせる金融貴族の政權でありまして、この時期の教育政策は、一八三三年のギゾーの教育令に表現されてゐます。それによれば各邑をして少くとも小學校一校を設けしめ、從來顧みられなかつた女子教育のための女子小學校女子師範學校の設置、更に育幼院（幼稚園）の設置をまで含む廣汎なものであります。そして全體として勿論、ナポレオンの統制體系の特色を失はず、加ふるに、「課業の始めと終りとに必ず神を禮拜せしめらる」といつたやうな宗教的粉飾によつてオルレアン王政の絶體化に努めつゝ、「教育の政體への適應」を徐々に完成して行くのであります。

その後フランスは、一八四八年の屍の上に第二共和を打樹て、一八五一年のナポレオン三世のクーデターを経て一八七一年の第三共和に至り、かの大革命の鯨波は一應の平静を取り戻すのであります。しかもこの平静は、一方において、近代的大工業制覇と近代國家としての地盤の確立とを告げるものであり、同時に他方においては、フランス全土にわたる分割零細農の窮乏化と、その都市流入により形成されたプロレタリアートの展望多き動きとに裏打ちされたものであります。

一八五〇年文相ファルーによつて發せられた教育令が、督學機關の系統を獨立せしめ、特に小學督學の任務として、小學校教員の授業の監視、任免懲罰、試験への臨場等を規定しあるが如き、そこに明かに政治的緊張を思はせるものがあります。盛り上る六月の要求に對し、秩序と文明と財産との名において屍の山を築いた、その同じ手によつて制定された教育令として見れば、この監察機構の緊張も故なきことではないのであります。○扱て以上の時期を通じて、形成された教育諸制度、諸機關の整備にも係らず、フランスは、かの九十三年の尖銳にして展望多き諸決議、即ち徹底的な國費義務教育、宗教との分

離等々を依然として貫徹し得ない。一八六五年文相デュリーの教育申報によれば、當時全國兒童中、完全に教育を受けたるもの僅かに五分の二、徴兵の三分の一は讀書き不能者、罪人中の文盲者は八十一パーセント。

これが、フランス近代國家が、十九世紀の三分の二の時期を通じて擧げ得た教育効果であつたのです。勿論それは、教育を條件付けるところの、諸々の社會事情からの歸結でありまして、それ故にこそフランスは、大革命以後もう一度かの一八七一年の批判に直面したのであります。しかも、禮容と饗宴と宗教心に富んだヴェルサイユ政府が、鐵血支配のビスマルクの軍隊の協力によつて、古代的な無神論のパリを壓伏し、その上に打立てた第三共和においては、かの展望多き批判は凡て黙殺され、その外形的共和的法制上の改新の中に、ナポレオン以來の實力が收められてしまつたのであります。

第三共和においては成程、「一八七〇年の敗戦（プロシヤによる）は主として兵卒と人民との教育の不完全による」との立前から、一八八〇年代の諸法令が、無月謝義務教育、宗教と教育との分離の確立を告げてゐるけれども、宗教は「道德教育及び公民教育」に置

き代へられ、「節制と勤勞と、謙遜と寛容と、良心と品性」といつた徳目が教授要目中に織り込まれ、教育監督機構の如き、例へば、縣評議會の持つ権限の中に學科課程教授方法諸規則實施の監視、初等教育の校内規則の制定等に至るまでを含められたやうに、ファールーの場合以上に擴大された形をとつてゐるのであります。

要するにフランスの教育制度は、ナポレオンにおいて、著しく中央集權的劃一的性格を與へられ、ギゾーにおいて、それが抜けがたきフランス的地盤を獲得し、ファールーの補足を経て第三共和に引きつがれたものであります。そしてその中に一貫するところのナポレオンの統制は、かのルソーを筆頭とする啓蒙主義者達の言葉とは、恐ろしく對蹠的のものとならざるを得なかつたのであります。

第四章 獨逸の教育

——ルータールを中心として——

一五二一年春未だ淺いある日の夕暮、西南ドイツの、とあるほの暗い樹林にさしかかつた旅人の一行がありました。僧服に身を固めた丈高い男を中心とした四人連の一行が黙々として歩いてゐました。

道の兩側は丘陵つゞきで、既に人影もなく、一條の小川の潺湲たる音の外は、寂として聲なき静けさでありました。一行が、軒傾き壁落ち、見る影もなく荒れ果てた二古祠に近づいた頃、忽ち、四邊が騒然として、馬蹄の音も荒々しく、一隊の覆面の騎馬武者が現れ、驚ろく旅人の一行に近寄りさま、件の僧服の男を搦め捕つてあわたとしく夕靄の中に姿を

消してしまひました。

此の僧服の旅行者こそマルチンルーテルで、彼が一五一七年、ウイッテンベルヒ城内會堂に九十五ヶ條の質問書を公表して以來、ドイツ國內には宗教改革運動が遼原の火の如く燃え擴がつたのであります。

ローマ法皇と、法皇の手によつて王冠を戴くべきドイツ皇帝とは、やつきとなつて、内部の反動的な運動の鎮壓に努めました。併しその鎮壓の度が加はれば加はる程、プロテスタントの氣勢も亦益々昂つて來るといふ有様でした。皇帝カール五世は、ローマ法王との提携の下に物々しい大會議をウオルムスに開き、一舉にして、この異端者を裁斷しようとして決心しました。けれどもルーテルは斷乎として自説を曲げないのみか、口を極めて法王を攻撃したのであります。ウオルムスの審問終つて歸る彼の、身邊は非常に危険な状態にあつたのは當然あります。

此の時、サクソニヤ侯フリードリヒがルーテルを救はんとして豫め彼と謀を通じ、陽に之を襲撃すると見せかけて、己の所領の一なるワルトブルグ城に彼を迎へとつたのであり

ます。

その後彼は侯の庇護の下に、城中深く身を隠して、聖書の獨逸語譯を完成し、又諸々の言説を以て侯の政策を援助したといふことは、十六世紀の西洋史が私共に語るるところであります。

二

扱て私共はこゝでルーテルの教育説を約説的に取り上げてみよう。

ルーテルによれば、凡そ父母はその子に教育を受けさす義務を持つ、この義務は、國家の要求するところであるから、兒童が若し學に就かなければ、國家は父母に命じてその就學を遂行させねばならぬ。そのためには、町村が學校を建て、普通教育を行はねばならぬ。

普通教育の學科は、宗教及び古語を中心とする國民として缺くべからざる陶冶と、生活に必須なる知識、技能とである。そして此の教育を擔當すべき教師は、自ら先づ教育を受けた人であつて、或は示範を以て、或は教訓を以て、子弟を教へてよく社會の尊信を受け

るに足るべき者でなければならぬ。

社會も亦、教師に對しては尊信を拂ふべきである。かゝる教師は、その僧侶たると、俗人たるとを問はず、教職に就く前、先づこれに必要な修養を経ねばならぬ。要するに、ルーテルの意見は教育の普及と、教育の義務制と教科の制定と教員の養成との四點に歸着し、總じて國家的義務教育制の必要を説いたものであります。

凡そ近代國家の成立するところ、教育の義務制が叫ばれ、計畫され實施されるに至るのは歴史の命する當然の経過でありました。ルーテルも亦その軌道に沿つて、正しい言説をなしたものと云へるのであります。

ところで私共のこゝに興味を覺えることは、ルーテルを隔たること一世紀半も後に至つて、なほルソーは、國家の教育を言はず、個人的な家庭教育の規模において教育を問題にしてゐるのに、それに對して、ルーテルは、早くも十六世紀の中葉國家的義務教育の規模において教育を取上げてゐると言ふ事實であります。

これは、どう見るべきでせうか。果してルソーに對してルーテルが幾層倍かの進歩性を

持つてゐるせいでせうか。此の點を考へるには、私共は或る違つた角度から眺めてみる必要があります。

三

中世末期は、法王權の衰微と共に、ドイツ、イタリヤに君臨せる神聖ローマ皇帝の威嚴すでに廢れ、當時百を以つて數へるドイツ國內の封建領主達は、各々雄を競ひつゝ、強力な開明政策によつて、ドイツ全土を統一しようとの野望を抱いてゐたのであります。サクソニヤ、バヴァリヤ、ブランデンブルグ、プロシヤ等の領主達は、その著しいものであります。

かゝる領主達の此の野望、この政策は、當時すでに、封建體制の根底をゆるがしつゝ、あつた新らしい經濟狀態を封建的に合理化しようとする必死の努力、即ち一方封建の梘を強力に民衆に押しつけつゝ、一方、農民を土地と鋤と故郷とから解き放し、賃銀労働者として、近代工場に送り込む過程、以上の様な過程を反映してゐるものであります。

此の新しい情勢に最も賢明に適應しようとしたものが世に言ふ名君でありまして、その採つた政策は統一的な國策の樹立、諸制度の改善、産業の振興、教育の統制等々、しかも之等をば、封建の框内で解決しようとするものでありました。

此等の名君達は、己れ自ら開明的生活に浸り、且つ、近世的殖産工業を奨励し、重金政策を採り、銀行を興し、煙草、鹽等の政府專賣制を打立て、そして一方國境線擴大を目標として軍備充實を策する等、あらゆる近代國家としての裝備に努めたのであります。

當面、サクソニヤ侯も亦勿論かゝる名君の一人であります。そして當時、ドイツに君臨せる舊い封建的勢力としてのハプスブルグ家のドイツ皇帝に對して、同じくドイツ統一を志す他の封建領主達と共に、一個の反對勢力を形成してゐたのであります。ですから、事宗教に關しても亦、ハプスブルグ家がローマ教會を代表するのに對して、必然その改革派たるルーテル派の庇護者となつたのであります。

ルーテルが法王權に對して投げつけた火の如き抗議は、ルーテル自身の主觀においては、純粹に、宗教の立場からのものであつたとしても、客觀的にはその足場を求めた開明君主

の政策的軌道に沿つたものとして現はれて來たといふことは否定し得ない事實であります。であるからこそ、ルーテルの所説は一見甚だ進歩的であると共に、中世紀的衣を脱することとができません。即ち教科の中で宗教と古語とを最も重んじたといふ如き點を想ふ可きであります。

四

こゝで私共は、暫らく、ルーテル獅子吼の後數年にして西南ドイツを中心にまき起つた大動亂即ち所謂農民戰爭に注目しよう。農民の牧歌的な生活も、中世末期に至るに及んで、堪え難き壓力を蒙るやうになりました。即ち中世都市の勃興と共に領主達の欲望が増大する。その充足のためには農民からの徵發が次々に加重され、且つ都市の繁榮そのものが、「農民に對する都市の支配」の形で種々の不利益を農民に齎したのであります。特に西南ドイツにおいては、都市の發展と領主の專制とが甚しかつたためにこの兩方面からの壓力が甚しく、十五世以來農民一擡の頻發を見るに至りました。時恰も、中世封建社會の支配的

イデオロギーとしてのローマン・カソリックに對する批判の形で宗教改革運動が起されたのであります。従つてその革新的イデオロギーはそのまま農民運動を激成する原因となつたことは當然であります。勿論、イデオロギーは一つの油であつて、その背後には壓力を蒙つた農民の生活があり、ツンフトから締め出された中世都市職人達の行き所のない生活があつたのであります。殊に後者は、所謂プレベニアと稱せられ、現實生活の打開に對して燃える様な欲求を持つてゐたのであります。かの再洗禮派及びそれを通じて成長したトーマス、ミュンツェルの一派はこの欲求を代表するものと言はれてゐます。そして、此のミュンツェルの指導を中軸としてかの一五二四―五年の、参加人員三萬と稱せられ大農民戦争が展開されたのであります。

その要求するところは、かの「十二綱領」によれば、

- 1、村落(ゲマインデ)自ら、牧師の任免權を握ること。
- 2、大十分一税(穀納)の總收入中より、牧師の俸給を控除せる殘額を、貧民救済に充當すること。(小十分一税―畜納―の徴收は神意に悖る。)

- 3、各人の身體の自由を認むること。
 - 4、山河における鳥魚捕獲の自由を認むること。
 - 5、山林における木材伐採の自由を認むること。
 - 6、勞働義務を、舊の如く輕減すること。
 - 7、領主が、規定以上の勞働を要求する場合には、豫め農民の同意を得、又相當の報酬を提供すること。
 - 8、小作料を輕減して、農民を保護すること。
 - 9、裁判の公平を期すること。
 - 10、領主が不法に占有したる共同地(耕作地、牧草地)は、之を村落に返還すること。
 - 11、死手相續(トードフォール)を廢止すること。
 - 12、以上各條項中、神意に副はざるものあらば、之を撤回する。
- 以上の如き要求は、現在の社會から見ればまさに隔世の感あるもの乍ら、その裏を讀むことによつて、中世農民の生活の程を窺ひ得るものであります。それにしても、以上見る

如く、この運動は頗る不統一のものであつたので、領主側の奸計に乗すべき機会を提供することによつて、容易に全運動を惨敗に導いたのであります。即ち、先づ良好なる休戦條約を掲げて、農民軍の統一を攪亂し、その間に兵力を集中して、虱つぶしに農民を蹴散らす——之が、領主側の常套手段であつたのであります。

五

ところで、かゝる運動、かゝる不遜(?)の要求の氾濫に對して、ルーテル自身は如何なる態度をとつたか。

彼は、此の行き過ぎたる一派及びその指導の下に立ち上つた三萬の農民軍に對して、平和勸告書なるものを送つたのであります。その書の前半においては、衷心農民の窮狀に同情し、貴族等の壓制虐待を憎む旨を述べ、後半において論鋒を一轉して農民そのものを詰責し、兵力に訴へることの不心得を諭してゐるのであります。曰く

「汝等農民が十分の權利を有する事は吾敢て之を否まず、然れども汝等が自ら起つて、

その權利を強要するは、之最も不當なる行爲なり、即ち神の意志に背くものなり。汝等に對して眞に基督教徒たらんと欲せば、唯だ迫害に對して忍び、黙して神の威を仰ぐのみ。基督教徒の本分は、靈界の殉道者たる一事にあり。暴行者來つて汝が家産を掠奪し、住宅を焼き果ては凶刃を汝が頭上に加ふる事ありとも、唯運命を神慮に一任して敢て逆ふ事勿れ。若し夫れ、暴に報ゆるに暴を以てし干戈に訴へて彼等貴族僧侶輩に抵抗するが如きは、是れ直ちに邪教異端の行動のみ」

ルーテルの平和勸告書にもかゝらず、亂民の勢益々猖獗を極むるに至つた時、更に彼は、一書を草して國內の有力貴族たちに送り、暴民を看過すべき理由なしと説き、速かに之を討滅すべき事を勸告したのであります。即ち、ルーテルは、純粹に宗教的の立場をとるかかのように見えて、今や完全に領主側に立つたのであります。勿論これは、最初からのルーテルの立場であり、且つ新教ルーテル派の本質を語るものではありません。

扱て、この農民戦争の結果、農民及び都市プレベア達の生活は勿論改善されず、寧ろ以前にも増して之等を虐遇する領主達もありましたので、一般の不平はルーテルの一身に

集り、かのローマ教會も、違つた立場からではありませんが、好機至れりとばかり之を攻撃するといふ有様でした。曰く「ルーテルは、自ら暴民動亂の種子を蒔き乍ら、更に貴族を煽動して、農民を殺戮せしめたるは不信不義の最も甚しきものなり云々」

兎に角、「ドイツ國民の大規模な企圖」と稱せられるこの運動も慘憺たる敗北と加重した壓力とを以て終りを告げたのであります。そして、之によつて齎らされた生産力の巨大な喪失が、領主にも、又都市にも大きな痛手であつたことは勿論であります。

だが、それ故にこそ、テリトリエンの諸侯は益々容易に、その國家的權力を確立し得たのであります。

ルーテルの雄叫びは、正にこの國家的權力の成長に油を注ぎ、又そこにこそ彼の言説の明確な限度があつたと言ふ可きであります。

六

ルーテルの所説に見る如き、宗教の衣を着けた近代教育が、その衣を完全に脱ぎ捨て、

質的に生れ變る迄には、即ち嚴密に言へば一九一九年のドイツ新憲法による學制統一までには、幾多の政治的乃至經濟的變動の波にもまれつゝ其の色を染め更へてゐるとは言ふものの、その中に一貫したものを私共は認めざるを得ないのであります。

十六世紀以來高まつた社會の新しい状態に適應した新しい諸政策が、ヨーロッパの封建君主達によつて採用されました。そして、例へばフランスの如き中央政權としての王權が極度に伸長したところでは、ルイ十三世、十四世の如き名君の此の方面における目ざましい活躍があり、新しい經濟關係の中から求め得た國富の上に、豪華なヴェルサイユが現はれ、花のパリが現はれ、諸々の文藝が花咲いたのであります。

然るに、フランスにおいては、以上の如く一應新しい情勢に適應を遂げたとはいふものの、その主體が、行き過ぎた尨大な王權であつたがために、眩惑的な都市文化の徒花の陰には、堪え難い地方農村の荒廢があり、近代産業の底力となる何物も残さぬといふ有様でありました。そのことは當時の文化をも、そのやうなものとして特徴づけたのであります。ロココ式の建築と、華麗な文藝と、肩をそびやかすパリー貴族の禮容とは、その背後

に何等の力も、進展性も見出すことのできないものであつたのです。従つて教育部面の如き、次代への推進力を培養すべきところは、甚だしく閑却され、或は單なる僧侶的な試みのまゝに放置されてゐたのであります。

これに對して、ドイツの場合は、既に述べましたやうに、分散した封建的勢力のお互の争覇的關係において、著しく活氣付けられてゐたのであります。勿論、その各々の目標とするところはドイツの統一であり、王權の確立であり従つて統一國家の實現であります。その限りにおいては、フランス專制王政國家の跡を追ふものではありますけれども、變化した社會情勢に對する適應の仕方、ある異つた型を打出したことを認めざるを得ないのであります。

それは、近代的諸産業に對する溫室的保護助長策と、それとの不可分離的關係において取り上げられたる文化的諸政策——それ等の、封建的框内での餘すところなき解決——それ等を通じて、内は他の封建的諸勢力を壓し、外は、フランス其他の強力な國家に對抗すること、これが、ドイツの名君によつて、努力された體系であつたのであります。

これは誠に困難な事業でありまして、かのフレデリック大王において、始めて成功したといはれてゐます。大王が、父ウイリアム一世の酷烈な薰陶を恐れ國外に逃れようとして捕はれ、將に死刑に處せられようとしたといふ如きエピソードは、此の時代、この國の王者の精力的な生活を物語るものであります。

七

斯くして、ドイツは、教育部面にあつても普通教育整頓の先鞭をつけた國なのであります。即ち、ルーテルの死後、五十餘年にして、最初の強制教育令が、ワイマール侯によつて實施され、次いで、一六四二年、現今ドイツ小學校制度の基礎と言はれるゴータ侯、エルンストの新教育令が現はれ、降つて、一七三六年、フレデリック・ウイリアム一世の普通學校令が出たのであります。この令の内容は、校舎・教員・就學・教科の四要項から成り、校舎においては、市町村は、王から贈られた材木を使つて、校舎を建てるべきであるとし、第二、教員については、その任務・待遇等を規定し、第三、就學に關しては、五歳から十

三歳までを學齡とし、第四、教科に關しては、宗教・國語・算術・唱歌の四科目とした。

68

これによつて、始めて、内容の整備した教育制度ができたのであります。

ウイリアム一世の子、かのフレデリック大王は、更に父の志をつぎ、七年戦争の終つたあと、ヘツケルに命じて、地方學事通則を起草させ、一七六三年に之を發布しました。ヘツケルは、又ベルリンに實科學校を起し、師範學校を附設して、教員養成に努めた人ですが、王は之に保護を與へ、一八一一年トテツチンの教員養成所を收めて、之を州立師範學校としました。之は實に公立師範學校の始めと稱せられてゐます。

勿論法規上の整備は直ちに、その實際の整備ではありません。事實當時の社會の狀態を以てしては、無學文盲者が大多數であつて、教化の必要を辨ぜず、不完全な校舍は多少現はれたにしても、その教師たるや、廢兵・職工・中途廢學の學生等であつて待遇も亦極めて薄く、衣食にすら窮する者が多かつたと言ふ状態であります。

此のことは、興隆期プロシヤの半面を物語るものであると共に、大王が、その木材と共に、國民に與へようとした教化の性質を示すものでもあるでせう。即ち、その教育は、昂

まり行く近代産業のための優良な兵卒として、國語・算術を必要とし、且つ、王權に對する絶對的信仰のための宗教を必要とするものであります。

同じく、當時、ドイツ帝國の南部、オーストリアでは、一七七四年、有名な女王マリア・テレサによつて、普通教育令が發布されました。これは、フェルビゲルの起草にかゝり、テレサ學校令とも言はれてゐます。

フェルビゲルについて、キンデルマンがでて、女王の子ヨーゼフ二世を助けて、亦邦内學事の普及に盡瘁し、殊に師範學校を建て、教員を養成し、實業教育を唱導して、手工・裁縫・編物園藝等を奨励しました。これより、他の聯邦も以上の二邦に倣ひ、他の歐洲諸國にも及んだのであります。

ドイツ國內における、教育の國家統制の以上の系統的政策を見る時、既に述べましたやうに、それ等は、封建君主たちの、近代産業に對する保護助長策とは決して無關係ではないといふこと、否、その全體系中の不可欠な要素として、教育も亦取り上げられてゐるといふことを認めるのであります。

69

斯くしてドイツの近代教育への歴史的的努力は、唯單にルーテル個人の進歩的な見解に發するものではなくて、この國の政治的、經濟的發展の獨特な型に規定されてゐると言ひ得るのではないでせうか。従つて、又ルーテルの見解、言説は、その時代と、社會とによつて、限界づけられたものとして之を理解し、それによつて、ドイツの教育を理解すべき鍵も亦準備されるのではないでせうか。

以上の見地から、ルーテルを中心として、ドイツの教育を略説的に取扱つたのであります。

第五章 我が國に於ける教育の概観

—明治初期を中心として—

一

開港以前のことですが、薩摩に濱崎太平治といふ商人が居て、この人が琉球國から洋糸を購入して來て藩主に獻じたことがあつた。ところが、誰一人としてこの糸の原料がわからぬ。そこでわざ／＼人を遣はして西陣に問ひ合せたが矢張りはつきりしたことがわからなかつた。

その後この糸がスロツスル製のものだといふことが解つて、この事から鹿兒島藩では、六千錘の紡績機械を英國のブラット會社に注文して城下の磯村に紡績工場を建てることになつた。勿論其の工場の建築から機械の運轉に至る迄、凡て米國人技師の手をわづらはし

たといふのですが、これが文久三年のことでした。

又、群馬縣の富岡製糸工場は、明治五年に開かれたのですが、之を模範工場と云つて、先づ二百名の工女を募集して製糸の法を習はせ、この傳習生を各地の工場に派遣して洋式製糸の教師としたものです。

これ程當時の我が國の技術は西歐に劣つてゐたわけなのです。これからどん／＼紡績、製糸の工業が発達したわけですが、この際に當つて二つの重要な問題が後に残された。

一つは、急速な生産力の發達と國內市場の開發は、正規の、大規模な工場工業の發達よりは寧ろ、膨大な農村の過剰人口から安價な労働力を購ひ、又は工場なしに問屋制の家内工業の量を増したること。更に一つは、國家的な見地から國內の産業を發達せしむる爲め、國家が續々と模範工場を建てたり、職工や技師の養成に當らねばならなくなつた、といふことです。

教育的に見れば、前者は國民大衆を教養から切りはなす機縁となる懼れがあり、後者は國民總體と游離した教育を形成する機縁となる懼れがあります。

大體がこの紡績産業といふものは、先づ農村に進出して行つて、農村を破壊し、なまの労働力を吸収するやうに出來てゐるものであつて、産業資本の典型たる英國などでも十九世紀の始め頃までは、労働者の教育など、全然手もつけないやうな状態でありました。

ところが、紡績工業が發展するにつれて、益々紡績機械そのものの生産が必要となり、次いで旋盤などの發明が成功すると、どうしても労働者の機械學的、數學的な智識が必要となつて、一八三二年にジョン・ラッセル卿が國內の教育に大刷新を加へたのです。

けれ共、英國の産業は、自由競争の上に立つだけの時間的な餘裕があつたので、卿の英斷の以前にも既に方々に學校も出來てゐたし、又特別に技術者を養成する爲にはグラスゴウ其他に工業學校や機械學校が、個人の手で設立されてゐました。

この點、我が國の工業教育は、英國のそれとは丁度逆の形をなして、前述の如く先づ政府自身が世話をやいて種々の施設をしなければならなかつた。

明治四年八月に、工部省に工學寮といふものを置き、これが明治十年一月に工部大學校と改稱され、十八年に文部省の管轄に入つて現在の帝大工科となつたものです。

始め工學寮の教師は全部外國人であつて、生徒は主として工業に従事せる官吏及び技術見習生より成り、之を大學と小學に分けた。専門科目は、土木、機械、造家、電信、化學、冶金、鑛山の七科目で修業六ケ年間、卒業後は工部省に七年間奉職すべし、といふ義務年限づきのものでした。

外人教師の數は、明治十二年十一月現在で百三十餘名の多きにのぼり、五十二萬圓の學校豫算のうち三十四萬圓即ち約三分の二が傭外國人教師の俸給であります。外人教師の殆んど全部は英國人であつて、伊太利人の數名は畫學教師でありました。さき頃ラグーザお玉で話題に上つたラグーザ氏は彫刻教師で、明治九年八月から十五年七月までの在職、月給二百七十七圓七十五錢と見えてゐます。

兎も角、このやうな膨大な人件費では仲々やりくりがつかない、寧ろ「本校卒業生ヲ以テ外國教師ニ代フルニ如カズ」といふわけで、愈々明治十三年二月に、卒業生中から十一名を選んで英國に留學せしめた。この十一名の中には有名な高峯讓吉博士も、石川縣士族の一學生として化學を専攻させられてゐます。

これらの人々が明治十六年三月に歸朝してからは、日本の工業界にも人材を有するやうになりましたし、又事實我國は明治十三年の官營工場拂下規則が出された頃を中心として、所謂獨り立ちの出来る程の資本制を確立したのであります。

このやうな政府の技術養成の方策には、勿論民間財閥の協力も行はれ、又民間の教育事業には政府が援助を與へてゐました。明治七年には三井家が工學寮に獻金して銀盃を贈られ、又三菱會社の商船學校は大久保利通卿の建議によつて明治八年から年額一萬五千圓の補助を付けるなど之れであります。この傾向自體が、前節に述べたところの専門教育が國民から游離する結果を導くことになるのであります。

要するに教育が官僚臭を持つことになるわけのもので、この傾向を多分に有つたのが、



官吏養成の教育機關たる帝國大學である。

東京帝國大學は、その前身が舊幕時代の昌平校及び開成所であつて、その入學者には、初め、一定の身分的な制限を付し、加ふるに大學そのものが文部省のやうな事務を擔當し、更に、「世上新聞紙出版御許ニ相成候間市中ノ人民ニ至ルマテ遍ク知覺致シ存寄ノ者ハ學校へ願出候様可致候事」と、出版物取締をもその権限内に置いたものです。

ですから、會々近時論議される「大學の顛落」に思を致すならば、果して「顛落するもの」は、大學の學問的な自由であるのか、將又、大學のかゝる官僚性であるのかを疑ひたいのであります。

我國大學の發達は、西歐の如くに中世の自由都市に育まれたものではありません。藩閥的要素を多分に含んだ官吏養成の爲めのものであつて、それは絶対に、國家的必要から生れたものです。大學が顛落し始めた、といふことは要するに「官吏養成」の役目は何等かの理由に依つて自らを否定せるの意に外ならないではないでせうか。

この系列としては、更に明治八年創立にかゝる陸軍士官學校があります。これは明治元

年八月に兵器司が置かれたと同時に京都に設立された兵學寮の後身です。

以上で、産業、政治、兵事の各々の指導者養成の機關を挙げましたが、これらの補助機關として設置されるのが私立の各大學専門學校であります。一二の例を云へば、先づ攻玉社は明治二年の創立に係り「海陸の測量練習所を設け盛んに子弟を愛育し」その門下からは多數の海軍々人を輩出しました。又、明治十三年を中心として、東京専門學校（早稻田大學）、明治大學、法政大學、専修大學等が創立されたのですが、それは當時の機構的な確立期によつて刺戟せられたものと思はれます。

三

教育の對象を二つの極より見れば、一つは以上に述べた社會生活の指導者を養成することであり、他の一極は、これらの指導者に指導せらるゝ國民教育であり、就中我國に於ては、義務教育を授けらるゝ小學校教育であります。

一つの極が官僚化したり、國民から遊離した教育となるならば、他の極は教育から隔離

せられるか、又は形式化せる畸型の教育を授けられる。

徳川封建治下の人民は、教育や教養から、殆ど完全に隔離せられてゐたし、又教育そのものも形式化してゐた。それ故に、明治五年八月に「學制」が頒布さるゝや、「自今以後一般の人（華民士族、農工商及婦女子とも）必ず邑に不學の戸なく家に不學の人なからしめんこと」を期したのでありますし、又同年、文部省の「小學校教導場ヲ建立スルノ伺」には「其之ヲ教ユルモノ四書也五經也タトヒ勉勵シテヨク之ヲ暗誦ストモ今日ニ用アル何ニ有ル是亦其不學ナルモノト相去ル一間」と喝破してゐます。

併し、實際問題として、當時やうやく封建の暗を脱け出した明治初年にあつて、このやうに理想的な教育が實施され得るでせうか。

「學制」の定むるところによれば、全國を七大學區に分ち、一大學區を三十二中學區に分ち、更に一中學區を二百十六小學區に分ち、といふから當時の人口六百について小學校一校を建て、總計約五萬餘の小學校を建てる勘定になる。昭和の現在ですら二萬五千の校數ですから、「學制」の理想には未だ半ばに過ぎないわけだ。

加ふるに、第一節に述べたやうに、一國が資本主義を普及せしむる爲めには、先づ資本の構成が低い産業、例へば纖維工業のやうなものから始め、それが漸次に、或ひは急速に農村に滲透して其處から膨大な労働力を吸収しなければならず、しかも其の際には、労働者の文化的向上は直接には必要ではありません。況んや、零細な耕作を基調とする取り残された農業部に於ては申すまでもありません。

そこで、教育さるゝ者は國民一般とは云ふものゝ、寧ろ國民の中の或る一部を強固なる教育活動で以て精神的技術的に統制し、その仕事が完成された後にやがて漸次に、國民一般に對してこの教育活動を擴充するといふ方針の方が最も効果的なわけであります。

然らば、かゝる効果的方法を實行するにはどうしたらよいか。それには先づ、舊來の封建的な教育機關と教育内容を打破するか、又はこれを近世的に變質せしむること。第二には、國民の被教育體の中堅を集めるか、又はそれ以外のものを一應教育活動の圏外に置くこと。この二方面の工作が必要となります。

明治五年の學制、明治十二年の教育令及び翌十三年の同令改正令が即ちその具體的な

現はれとなるのです。

四

第一表 庶民教育機關設立數

年	號	期間	鄉學數	私塾數	寺小屋數	合計
萬延・文久・元治	四年		五	一二八	一、五六三	一、六九六
明治元一五年	五年		四二七	八四	三八〇	八九一

備考 石川謙氏著「日本庶民教育史」ヨリ算出ス。

第二表 寺小屋私塾廢止數(鄉學ヲ含ム)

年	府縣名	東京府	神奈川縣	群馬縣	長野縣	以上合計
明治元一四年		二六	六六	一五	二一	一二八
明治五一九年		一三三	二六九	六三	五四	五一九
明治二〇一四年		六八	—	—	六	七四

備考 「日本教育史資料」第八卷ヨリ算出。長野縣ハ私塾ノミ。

第三表 公私立中小學校數。

年	度	小 學 校		中 學 校	
		公 立	私 立	公 立	私 立
明治十二年		二六、七〇	一、三五	二八、〇五	一〇七
同十三年		二七、四七	九三	二八、四〇	一三七
					六七七
					七六四
					一八七

備考。文部省第七、第八年報ニ據ル。

こゝに三つの表を掲げました。これは通覽すべき表ではありますが、資料が不十分な爲め、凡その傾向しか判りません。併し大體は正しいものと見做すべきです。

表のうちで郷校といふのは、幕府時代の公立學校のやうなもので、主として村費とか、學校組合費で支辨經營せられたものを云ひ、表一の如く明治元年から五年までには随分多く設立されました。これはそのまま、小學校に組み入れられたものと見做しても宜敷いでしょう。兎もあれ明治五年から九年までの間には表二に見る如く、大體の傾向より見ても舊幕

時代からの寺小屋私塾等は殆んど潰滅せられてしまいました。

以上を第一期とすれば、第三表の明治十三年頃は第二期とも云はるべきで、この期には私立學校が急傾斜をなして減少します。

實に十三年度を中心としての一兩年は、私學排除の劃期的な時期であつて、教育令及び教育令改正令の偉力が遺憾なく發揮された觀があります。即ち、十三年度に於ては「普通學ノ二三科ヲ授」くるものを「各種學校」の部類に入れ、又「教育令第四條」の「正格ニ合セサル」ものをも排除したが、更に十四年に至るや「眞ニ小學校タルノ資格及ビ資力ノ具備セサルモノハ校主自ラ其校舍ヲ閉鎖」する者「其種相接」するに至り、遂には「私立學校ノ絶無ニ歸セシハ京都府外七縣ナリ且東京府下ニ在ル私學校ハ其教規等未タ改正ヲ了ヘサルヲ以テ其數尙五百四十五箇ノ多キヲ存シ全國私學校總數ノ三分ノ二強ハ獨リ該府ノ占領スル所」となりました。

引用は主として文部省年報第九に依ります。特に注意すべきことは、全國私學總數の三分の二は東京府にあつた、といふことで、このことから當時の教育的統制の重點が、都市

よりも寧ろ農村に置かれてゐたといふ一事であります。

五

第四表 明治七年度府縣公學費歳出入額表

費目	出入		概計	
	歳入	概計	歳出	概計
寄附金	一、〇八〇、八四五圓		數員俸給	一、二九五、六八六圓
學区内集金	一、四五八、六一〇圓		建築營繕費	六四三、五三六圓
生徒授業料	三〇一、六〇三圓		其他	略
文部省小學扶助金	二七二、三三〇圓			
其他	略			
合計	四、三六二、二三三圓	合計	三、一九五、二七八圓	

備考。文部省第二報ヨリ算出。

第三節の末文に敍べたところの、第一の仕事たる私學の排除は前節の如き經過で、一先

づ明治十三年にその完了を見ました。

次に第二の仕事は、教育対象の限定又は、教育活動の圏を一應整理する件となります。

明治五年の學制頒布當時、中央教育財政は平均年額二百萬と見做してゐた。どうしてこの金額が算定されたかといへば、田中不二麿子の「教育鎖談」に「従前幕府及び各藩に於て文武教育事業の爲めに支出せし諸費用を調査せしめ、概計金二百萬圓なるを知り、因て新政府は同金額を以て」教育費豫算としたものと申します。

然るに學制の中核たる義務教育制八ヶ年の、しかも前述の如き大中小學區域の膨大を以てしては、二百萬圓の豫算では何とも恰好がつかなくかつた。

第四表に見らるゝ通り、文部省小學扶助金といふのがあつて、普通之を「委託金」と稱したのですが、之は學制の第九十九章に規定さるゝ「教育ヲシテ普及ナラシメントメ府縣ニ委託シテ其學區ヲ助クル金額」に當るものです。男女に拘はらず就學人員一人宛九厘の割で總計二十九萬三千五百二十七圓六十一錢一厘を三府六十縣に割り當て、補助したものです。

假に三十萬と計算して全豫算の一割五分の見當となる。どうしてもこの教育活動を繼續する爲めには他の歳入の途を構ぜねばならないところから、他の三項の費目たる、寄附金、學区内集金及び授業料が必要とされた。

生徒授業料は「學則第九十四章授業料」の定むるところによつて、小學校兒童は月二十五錢乃至五十錢（地方によつては六錢乃至十二錢のところもあつた）を納めることとなり、又、學区内集金といふのは地方によつて異つた方法をとりましたが、例へば、千葉縣では「管内十一萬千八百五十九戸之を上中下ノ三等ニ分チ、上戸ハ毎年七十五錢、中戸ハ五十錢、下戸ハ二十五錢ヲ出サシメ」又、足柄縣では總戸數を四等に分ち、各々五十錢、二十五錢、十二錢、六錢を出金せしめ別に「束脩」十二錢を出さしめたし、奈良縣では「毎戸家族僕婢ニ論ナク都テ一般ノ人口ニ課シ」更に「各戸ノ間口に課税ス」と、夫々報告されてゐます。

次に支出費目中の二割を占めてゐる建築營繕費といふのは、主として校舎の新築費や、私宅寺院公有建築物の買收費から成りたつてゐて、これは前節の私學排除とは密接な聯關

を持つてゐます。次に簡単な表を掲げて本節を終りませう。

府縣名	小學校舎數	新築校舎數	府縣名	小學校舎數	新築校舎數
東京	一〇三	三一	廣島	六二四	五〇
愛知	五四九	五〇	長崎	八九	四三
京都	二二八	一四九	新潟	七八一	一六四
宮城	二二四	六三	備考。文部省第三年報ヨリ算出。		

各府縣は各々その大學區の代表名をとつたものであります。

以上の關係は、教育の圈を國民の一定部分に限定させることゝなつたことは、國民經濟力から見て當然のことでありました。

六

そこでこの教育圈一應の限定作用が、何に表はれるかといふに、先づ端的には小學兒童

の就學率に表はれて來るわけです。

田中不二麿子の「理事功程」に、一八三九年各國下等教育進歩の比較が出てゐます。

プロイセン	六人につき……一人
ノールウエー	七人……一人
オーストリア	一一・五人……一人
イギリス	一一・五人……一人
フランス	一一・六人……一人
アイルランド	一八人……一人
ローマ	五〇人……一人
ロシア	三六七人……一人

この表を、明治六年（一八七三年）の我が國人口百人中、就學率四・二四乃ち二十三人五分について一人になる割合から見れば、當時の就學率は三十五年前の、乃ち統一以前の伊太利にも該當致しませうか。

明治七年には、學齡兒童約四九〇萬中、就學兒童約一七〇萬、即ち三四%の就學率。

明治二十一年には就學兒童數は三、二七七、四八九で、不就學兒童數は三、六四二、八五六となつて居り、就學率は約四七%。

この文部省の報告と、明治二十五年の議會で一人の議員の質問として、

「二十四年十二月の調査に學齡兒童は七百十九萬五千四百十二人で、其内公立學校に就學してゐるものは三百十九萬八千六百十人、私立小學校に就學してゐるものは四萬八千八百六十二人、其外幼稚園、官立師範學校の幼稚園に這入つて居ります者は五百五十八人、先づ此計算を見ますといふとざつと三分の一しか就學して居らぬのであります」とを比較すれば、某議員の云ふ三分の一はちと大袈裟で、議員の唱へてゐる數で勘定すると矢張り四五%程になつてゐますから大體文部省發表の如くに、明治二十年から二十五年頃までには大約十人のうち五人までが就學するやうになつたと見てよろしいでせう。

然らば、次の問題は、この不就學兒童の内容は何かといふことになる。文部省第十五年報に據れば、「勞力者の子弟」に最も多いことゝなつてゐます。實狀にてらしてみると、

内閣統計實地調査の大正十三年十月現在では、工場勞働者の五・八五%及び鑛山勞働者の一九・九五%が不就學者であり、この不就學者に小學校中退者を合算すれば、前者は二〇・七三%、後者は四七・二三%となり、兩者の平均は約二五%乃ち四分の一が不就學又は不完全就學者となつてゐることになります。

種々の方面から推論すれば結局この不就學者は所謂「勤勞者の子弟」特に、輕工業や採掘鑛業などとか、更には農村の下層等に多かつたわけです。

明治十九年の學校令は、要するに我が國々民教育の中樞を設定した意味で、歴史的なエポックを置くものでありますし、ここに文部大臣森有禮の不滅の功勞も認めらるゝわけでありませう。

七

國民の中で、一先づ教育の圈外に放置されたものは誰かといふことは、前節まで、大體の限定はついたが、然らば眞の國民教育の對象物となつたのは如何なるものか、といふこ

とを一言したい。

國民教育の中堅たるもの——それは一言にして云へば我國農村の中堅的地位を占むるところの「中農」特にその「上層」であります。このことは我國の經濟構造からの推論に俟つ外ありませんが、特に之を教育の部面から推定しようとならば、國民教育の直接の當事者たる小學校教員編成の歴史をたどるのが最も捷徑であり、この歴史を見る時、私は今更ながら森文相の、時代に透徹した耿眼及びその手腕に敬服する者であります。

この點については、別章「森文相傳」を参照してもらふこととし、此處には明治二十年以前までの小學校教師の風格についてお話致しませう。

明治十五年三月の初旬に、時の自由黨總理板垣退助は、竹内綱、宮地茂春、安藝喜香等を隨へて東海道遊説の旅に出ました。

途々静岡を過ぎ名古屋を経て、「將に濃飛の地に入らんとす、沿道風を聞いて沓至し、車蓋を望んで景從する者、數を知らず、其の岐阜に達するや、遠近麤集、道路殆んど方駕

すべからざらんとし、勢望大いに震ふ。」

四月十六日には市外金華山麓の神道教院で總理の歡迎懇親會が開かれることになりました。此の日、板垣は風邪の氣味をおして會に臨み、滔々二時間の口演を續けましたが、心身俱に疲れきつてしまつて、どうしても散會まで臨席することが出来なかつた。

會場はわれるやうな熱狂ぶりであり、しかも二時間にわたる總理の雄辯に魅せられた會衆は、次から次と立つ演者に呼號して、會のいつ果てるやもわからない。

板垣はこの盛會からそつと座をはづして、玄關に出で、黨員の禮送をもことわつて、一人で旅館へ歸らうとした。

丁度午後六時、庭前には葉櫻の木立が夕靄の中に浮んでゐてその背後には金華山の頂が夕映の空にくつきりと壯嚴な輪廓を畫いてゐた。

會場の内部からは、戸板を隔て、會衆の拍手や演者の怒號が聞えて來るが、この庭前はさながらの靜寂境です。

板垣が靴を穿き了えて庭前に下り立つた時、スル／＼とその側に立ち寄つた瘠身長軀

の男があつた。先程、板垣が靴を穿きおえて部下の壯士が會場に立ち去るのを待つてゐたのです。

「國賊！」

その男は、上すつた聲でこう叫ぶがいなや、グツと板垣の胸元にとび込んできた。板垣は竹内流小具足組打の達人だつたので、瞬時つと兇漢の心臓を衝いたが、少しく脇が下つたので腹部に當つた。

兇漢はヨロ／＼つと後ろにすさつたが、再び姿勢をとゝのへて今度は棄て身に板垣の眞正面からついて來た。夕闇の中に白く一線、兇漢の擬した刃が伸びるよとみるまに、板垣身をひねつてガツキとその手首を抑へたが、勢餘つて白刃はその左胸をついた。

鮮血をあびて相争ふ二人はその間一言も發せず。板垣が右手拇指の腹に再び傷を負つて、左手で之を支へてゐる間に、白刃は躍つて空に上り兩人は息をきらしてしばしにらみ合ふ。その時、男の背後から黨員内藤魯一がかけつけ、襟首をつかんで地上にたゞきたをした。板垣は蒼白の顔を男に向けてゐたが、暫らくしたら、つぶやくやうに、しかも腹の底か

らしぼり出した聲をもらした。

「板垣——死すとも自由は死せず」と。

「自由黨史」によつた板垣伯遭難の情況です。

この兇漢は名は相原尙聚といふて愛知縣の士族でしかも小學校教師でありました。事の善悪は兎もあれ、職を教育に奉じて烈々一片の氣概は深く國事を憂へての舉でありました。實に當時の小學校教員は、その多くが舊幕治下の士族でありましたので、未だ武士氣質を忘れず、民権自由の理に氣を吐いてゐた觀がありました。

板垣のこの遊説に際しても、岐阜縣岩村の小學校教師が三四名演壇にあらはれてゐますし、又高知縣では流石に板垣伯の地盤だけに「政黨の風潮に感化せられたる爲動もすれば其温良の美德に乏しき」傾向がありました。

西園寺公の「明治教育史要」にも之の間の雰圍氣を敍べて「當時我政治社會には民権自由の説行はれ（中略）教育界に於ても自然其影響を受け、學校職員にして政治に關係し、又政論をなす者少なからず」と云つてゐる。

そこで岐阜事變の翌々月には、政談演説等に學校を使用する事を禁じ、學校生徒の政談演説を禁じました。尤も、十四年六月に布達第十九號がすでに出されてゐて「政治及ヒ宗教上ニ涉リ執拗矯激ノ言論ヲナスコトアルヘカラス」と規定せられ、次いで「學校教員品行檢定規則」が發せられて、或る地方では教員の「誓約書」中に「矯激ノ言論」をなさざることを一筆書き入らしめたところもあります。

師範教育の革新が必要だつたのも、直接には以上のやうな當時の状態から出でたものでありました。

八

これまで敍べたところに依つて、我が國の教育體制が、如何なる點を覗つて、如何なる方法に依つて確立の一路へ向つたか判ること、思います。

そして、かゝる體制が一先づ出來上つたのが、明治二十年を中心とした歴史的な時期であることもわかります。

成る程、我が國明治五年の學制は、佛蘭西の學制をとり入れたものであり、明治十二年の教育令はアメリカのそれを、而して十九年の學校令には、多分にドイツの血が流れてゐたことは争はれない事實でありませう。

だからと云つて、私共は、この日本の教育制度を一概に翻譯制度だ、と片附けるわけにはゆかない。この制度が、外國の長を執り短を棄てつゝも一路その目的の下に衝き進んだ途上には、幾多の尊き血も流れたであらうし、幾多の迂回路もあつたことです。

とまれ明治中期に一應確立した上からは、更に教育圏を擴張する必要がすぐ次にひかへてゐる。そして擴張された。

就學率は向上し、學校は増され、視學制度は擴充され、つひに明治四十二年、六ヶ年義務教育制を施くに至つて、教育の第二の轉回がなされることとなつたのであります。

本章の目的とするところは、我が國學制の確立の次第を敍べ、併せて我が國の教育上の機構が何を中心として旋回してゐるか、平たく云へば我が國教育制度の本質は何か、といふことを主として論じたものであります。

この問題が解明せられれば、少く共次の諸問題に就いて、比較的はつきりした意見を持ち得るわけであります。幸ひに讀者が、私の云はんと欲する所を把握されて、夫々の問題について十分研討論究されるならば、私の幸ひとする所であり、他日又筆を改めて私見を開陳したいと望むところであります。

(一) 教育理論の問題。

教育の圏を規定し、その中堅たる階層を定めた上には、その指導的理論にも一定の限界や一定の特色をつけねばならない。

随つて、諸多教育理論の我が國に入るものに對しても、なまのまゝ之を採入れることが出來ず、そこに幾多の論戰や妥協が混入する。

この見地より我が國明治以後の英米獨佛其他の教育學說輸入の歴史は、眞に日本的な學說の交錯を思考に入れつゝ、新たらしく検討されねばならぬ。

(二) 學制改革の問題

學制の改革は常に叫ばれてゐるし、又有識の團體及び學者から、常に次から次へと具體

案が提出されてゐる。

或るひとは單に労働者教育に力點を置いて、改革を叫んでゐるが、これは前述「非教育圏」が、いかなる内容を有するものかを理解せぬものであつて、労働者は「非教育圏」の單に一半を構成するものに過ぎないといふ點から、及び、労働者教育が如何なる本質を有すべきかを全然反省しない點から、多くは默過され、又は自らの誤謬につまづく。

又或るひとは、人格主義・人物養成の教育案を提唱するが、往々これは、分散的な私塾復活案に陥入り、このことは、折角きづき上げた「教育圏」をも「非教育圏」にまで引き下げ、總體に國家の文化水準低下を視野の外におく誤りを犯す。

要するに、學制改革を案出する爲めには、我が國の教制の本質をきわめる事が必要であると共に、次にはその本質自體の歴史的な發展や矛盾を適確に把握する事が大切であります。その他「教科書の問題」「國家の問題」「教授法の問題」「視學制度の問題」等々は、凡て以上二つの大きな問題に合流するものであり、私共は今更に、我が國教育史を問題とする時、その如何に深く、廣いかに茫然たるものがあります。

第六章 王朝時代の教育

— 綜藝種智院を中心として —

一

乙女らに男たちそひふみならず

西のみやこはよろづよのみや

數百の男女が青すりの細布衣をつけ、紅の長紐を垂れ、歌ひつゝ舞ひつゝ、行くく曲節毎に袂をあげる——

このあでやかな歌垣のさわめきに今しも柳櫻の朱雀の大路は盛な人出であります。

時は淳和天皇の天長三年の春、當時飛ぶ鳥を落す右大臣冬嗣公は、この平安の都の華やかさと、藤氏一門の榮達への歩みとに酔されながらも、政治家的な冷靜さを失はなかつた。

彼を乗せた豪華な牛車は、靜々と雑沓を縫つて、眞言の大伽藍東寺の前に停りました。

空海は待ちまうけてゐたやうに、彼を迎へ、一室に請じ入れました。

「空海さん」

冬嗣は、考へ深さうに語り始めました。

「吾々政治にたづさはつてゐる者は、人民の信頼を得るといふことが肝要でして、例の施薬院の設置も、動機はそこにあつたのです」

（は、あ、何か仕事をせずには居れない冬嗣公、又何ぞ計畫を持ち込んだな）空海は、さう感付き乍ら、

「全く、近來の様に、人民の飢餓窮乏、それに疫災等のひどい時期には、施薬院式の救濟と共に、私共の祈禱宗教の靈驗を信じさせることも益々重要性をもつて來る様に思はれますな」と上手に相槌を打つ。

「ところで空海さん、教育事業は如何です、現在の大學や國學は、極く限られた貴族の上層だけに利用されるものだとすると、人民の不滿はさういふところにもある。地方はい

さ知らず、せめて都の中だけでも、もつと開放的な學校を設ける必要があると思はれます」
空海は肉付きのいゝ太もものあたりをボンと打つて、

「それは、拙僧も兼ねぬ、思つてゐたところです。神佛習合は拙者年來の持論でありましてその立場から見ますれば、そこいらの學者や僧侶のやり方は實に物足らぬ。儒者は儒學一點張りで融通の利かぬこと夥しいし、僧坊の僧徒達は佛典にばかり嚙り付いて、下らない論議に日を暮してゐるといふ有様です。さういふ偏狹な非現實的な態度を排して、もつと総合的、實際的態度をとらねばなりません。儒書を學び度い者も來れ、佛典を學び度い者も來れ、又何ぞ技藝を身につけ度いと思ふ者も來れ、かういつたやうな學校が生れてもいゝ様に思ひます。さういふ目新しい學校を以て世間の注目を買つておくことが、つまりは、貴公の氏族繁榮、延いては眞言弘布の爲め何程役立つかわかりません」
空海はこゝで、こんな最後の切札みたいなものを出したでもあらう。

「是院（綜藝種智院）ハ閑院左大臣藤原冬嗣ノ持念ニ依ツテ氏族ノ繁榮スルコトヲ悦ビカヲ合セテ造立シ給フ所也」（塵添鹽囊鈔十三）といふ文句から、私共は、以上の様な場

面を想像し得ないであらうか。

二

扱て當時宗教界の錚々空海と、政治界の大立物冬嗣との協力の下に綜藝種智院が生れることとなりました。

此の院は今の京都西九條の附近、その當時の西洞院大路と大宮大路にはさまれた所、西洞院川に沿つた地點にあつた様です。それは冬嗣の粹を盡した邸宅をそのまま使用したのださうです。空海は綜藝種智院式、即ち設立趣意書といつたものの中に「松竹風來つて琴箏の如く、梅柳雨催して錦繡の如し云々」と、院のあたりの風物を、修飾たつぷりで述べてゐます。

此の院は周知のやうに「三教の院」と申しまして、神・儒・佛の総合的な修道場であるといふ建て前であります。つまり、儒者は儒學、佛者は佛典といふ偏狹な立場を守つて、直譯的な高踏的な理論ばかり並べてゐても何にもならん。さういふ時代はすでに過ぎた、

もつと民衆の中に下りて行つて、その文化的水準を高めることに努力しなければならぬ、といふやうな意味のことを空海はその「式」の中で言つてゐるのであります。

従つてこの院の教育内容は實に廣範圍のもので、九流六藝に綜通することを以て眼目としたのであります。九流といふのは、儒家流、道家流、陰陽家流、法家流、名家流、墨家流、縦横家流、推家流、農家流のことで、六藝とはいはゆる禮樂射御書數でありまして、要するに、當時ありとあらゆる方面の學問を網羅したわけであります。そして之等を教授するために佛典を教へる爲めの師と儒學を教へるための師とを招き、「貧富の別をつけずに、慈悲慈愛の心を以て教へ導けよ」と言つてゐます。

ところで、この院の事業は果してどれだけつゞいたものか、又どれだけの効果をあげたものか、それ等の點について信馮すべき資料が皆無に近いので知る由もないのであります。たゞ、空海以前にも吉備眞備が、やはり二教院といふのを設け儒佛兩道の立前から、人を集めて教へたといひ、又石上宅嗣も、同様の主旨の下に芸亭といふのを設けたと言はれてゐますが、それ等が、どうしたものか皆失敗に終つてゐます。ですから、空海自ら「式」

の中で言つてゐる様に、綜藝種智院に對しても既に次の様な皮肉を言ふ者がありました。

「吉備公や石上宅嗣等も、それに類した仕事をやりましたが、皆始めあつて終りなし、人去つて跡穢れたりといふ結果に終つてゐますよ」と。

空海はそれに對して

「私の場合には太政大臣、左右大臣から諸貴顯の方々が皆支持して下さるのだから、百世の後までもつゞくものと確信してゐる」と、平安貴族の永久的繁榮を確信するものの如く、大見榮を切つてゐます。

又或る人は「そんな學校一つ位やつたところで霹靂の下で蚊の鳴く程の効果もないでせう」と突込めば、空海は入唐僧のプライドを示すかの如く、

「あちら（唐）では、長安城の坊々に閭塾といふものがあり、又縣には郷學といふものがあります。つまりそんな風に全國的な擴大をもくろんでゐるのです」といつて、之を反駁してゐます。

ところで、百世の後迄もつゞく筈のこの院、全國的民衆教育機關にまでも發展する筈の

この院が、空海の没後二三年の中に、彼の門徒によつて賣却され、それによつて得た一千四百貫文は、丹波國大山庄の田地十四町と化し、眞言の本據東寺の傳法會科とされてしまふのであります。まさに人去つて跡穢りたりの感が深い。史家の中には、この院が開設されたか否かすら疑ふ者がある位です。東寶記によれば、「將に經史を設け、教業を備へ、田園を配して支用に充てんとす。宿心未だ畢らざるに人化し時遷り、功業の期する所、方に觸れ濟し難し……」とあつて、設けようとした經史にも、備へようとした教業や經費にも手を觸れぬ中に、院は消滅してしまつたのかも知れない。とすれば、まことに「始めあつて終なし」の言葉そのまゝです。

扱て、綜藝種智院が、その設立の趣意の輝かしさにも係らず、何故にかくも龍頭蛇尾に終つたか、又その當事者空海の意圖を私共は如何に理解すべきか、更に又、眞言イデオロギーを含めての、その時代の文化は如何なるものであつたか、そしてそれ等が如何なる時代的规定を受けねばならなかつたか等——之等の諸點を採つてみるによつて、私共は、綜藝種智院及びその時代の教育についての、やゝ明瞭な觀念を浮び上らせることができる

のではないでせうか。それは、つまり、事物の理解を觀念からでなしに、それが據つて立つ土臺の理解から始めるといふ方法なのであります。

三

「太平記十二」に次の様な話が載つてゐます。「桓武天皇の御代、平安遷都と共に、朱雀門の東西に二寺を建てられ、東寺には、高野大師（空海）、西寺には南都の高僧守敏僧都を置いて國體の長久を祈らせられた。ところが、延暦十三年弘法大師は求法の爲に入唐する、その留守中、守敏僧都は、朝夕玉體に近づき、寒い日には火印を結んで御手洗の水を暖め、暑い日は水印を結んで冷氣を送るといふやうな神變自在の術をやるので非常な御寵愛を蒙つた。然るに弘法大師の歸朝と共に守敏の火印も水印も一向ききめがなくなる、それで『星の光は朝日に消え、螢の光は曉の月にかくる』と、弘法から嘲笑され、之に憤慨した守敏は『天下に大旱をやりて四海の民を一人もなく飢渴に逢はせん』と、三千界の龍神を捕へて小さい瓶の中に封じ込めてしまふ。ところが印度の無熱達池といふところに住む善

女龍王だけは捕へられなかつた、めに、之が空海の請雨の祈禱によつて神泉苑にその金色の姿を現はし沛然と雨を降らすこととなる。失敗した守敏は、今度は軍荼利夜叉の法を行ひ、空海の大威徳明王の法と太刀打したが、途中で空海が入滅のデマを飛ばしたため、守敏は安心して戒壇を破つたところ、忽ち心身惱亂して佛壇の前で往生してしまふ。

空海が東寺を賜つたのは嵯峨天皇の弘仁十五年であり、神泉苑に請雨祈願の御修法を行つたのは淳和天皇の天長元年で、此年天下大旱であつたことは事實です。太平記のこの話はそんな事實の前後關係等は一切おかまひなしで、南都佛教の眞言による壓伏と、眞言の有難味とを宣傳する爲めに作られたやうなものです。事實、平安遷都の當時は、南都佛教は侮り難い勢力を持つてはゐたが、その講壇的、直譯的性格の故に、當時昂まり行く社會不安に對しては理論的にも實際的にも無力化して行つた。

社會不安といへば、咲く花の奈良の都の時代から、すでに普遍的のものとなつて、宿命的な、色濃い時代の影を作つてゐました。桓武御略記によると、御在位二十餘年間に、大小併せて十回程の飢饉の記録があります。勿論天候其他の自然的原因はあるにしても、如

何に當時の人民が一般的疲弊に陥つてゐたかを物語るものであります。

延暦二十四年群臣を召して政治の得失を議せしめられた時、參議藤原緒嗣は、「方今天下の苦しむところは兵と土木にあり」と卒直に述べてゐます。申すまでもなく、當代の大事業は、北邊の征略と宮殿造營でありました。北邊に備へるために坂東の民が如何に疲弊に陥つたかは、田租減免の記事が屢々出てゐることによつても知られます。延暦九年の如きは、坂東の民は年來の徵發で最早丈夫な男もなく、又生活力も無くなつてゐるといふので、京畿七道の「土着、浮浪、王臣佃戸を論ぜず」その「郷里姓名を録し之を奉らしめる」ことを、太政官から奏上してゐるやうな有様です。又各國から都の造宮のために徵發されて來る百姓達が、食費自辨で年六十日公役に就く義務を負つてゐた時代とは言へ、全く着物も不完全、身體も仕事に堪えぬといふ程の有様です。

かういふ時代に、迷信深い都の貴族や、醫藥の代用としての禁厭呪術を信賴する民衆の心を捉へたものが、眞言密教であつたことは故あることであります。ですから僧最澄の場合にも、歸朝當時、都で最も喜ばれたのは、歸途の片駄賃に順曉阿闍梨から傳承した不完

全な密教でありました。しかるに空海によつて傳へられたものは、「嚴重なる壇を設けて種々の佛具を並べ……劍を立て護摩を焚き、眞言を誦し印を結び、最も莊重町重にして人心を悦服せしめ畏懼し悚動せしむるに足るべき威嚴を備へ、調伏息災請雨除疫等其れくの場合に應じて特異の法を修し、一心不亂に珠數を採み、加持祈禱の秘奥を盡す」といつた風のもので完全な密教であります。

この時代をヒットした密教が、京師の宮廷貴族の間にひどく歓迎されました。耽眼の空海は、その身沙門に投じた時すでに、僧侶としての顯達の道はどこにあるか、時代は如何なる宗教を求めてゐるかを見抜いてゐたのでせう。ですから、當時勢力ある門閥以外の者の榮達への唯一の手段と稱せられた「入唐」を敢行した時、最澄と共に天台山には登らず長安入りをして惠果阿闍梨から、眞言密教を傳へて歸つたのであります。

四

此の眞言密教の勝利を可能ならしめるやうな社會において、貴族的香りの高い平安文化

の指導者達によつて興された諸々の教育機關が果して如何なる運命を辿らねばならなかつたか。成程、王朝初期に、全國的規模において大學及國學の設立を見ましたけれども、前者は五位以上後者は郡司の子弟に限られた官吏養成機關でありました。そして一方勸學院、獎學院、學館院等の私學の簇生と相俟つて、此等の官學も菅原氏、大江氏等を中心とする私學への道を辿り、平安中期以後は、その傾向が益々度を加へ「祕傳」「祕授」といふやうなことが行はれるやうになつて、學問の自由討究とその普及は益々妨げられることとなるのであります。學問は唯單に貴族の教養を示す道具となつたといはれる時代に、そのやうな性質の文化に對して、兵と土木と重租とに疲れ切つた人民が、何の希望があつて手出しが出来ようか。

空海が閭塾と郷學との方向へと唱へて設けた綜藝種智院も、此の現實に眼を覆ふたユシトピアであり、それには早晩突當る可き限界があつたと言ふべきであります。

第七章 江戸時代の教育

——水戸藩學制改革を中心として——

一

水戸の儒者、會澤安の著書に「學制略説」といふのがあつて、それには支那の周禮による學制と比較のもとに當時の水藩の學制を論じてあります。

「郷黨の學は軍制に本づきて制したるもの也」といふ冒頭から、周の國では軍制の單位を伍、乃はち五人一組とし、この伍が五つ集まつたものを兩とし、兩が四つ集まつて卒となり、五卒が一旅を成し、五旅が一師、五師が一軍、それが六軍即ち七萬五千人となつて、王之を統率するといふ。

丁度、この軍制と對應して造られるものが周の學制であつて、五家を比とし、五比を閭

とし、四閭を族とし、以下、五族一黨、五黨一州、五州一郷、六郷七萬五千戸を以て王城を廻らす。

さてこれらのうち、比・閭・族の子弟は家塾が之を教へ、その上に黨庠・州庠・郷庠が夫々配置されて、最高の學府としては、天子及世子が自ら學ぶところの大學が置かれるのです。

勿論、このやうな統一整備された軍制・民制・及び學制が、このやうに一糸亂れずに維持されたかどうかは別としても、古來よりの政治が、いかなる理想を畫いてゐたかは、略々察しられるところであつて、同時に歴史を貫く軍制・産業・學制が、あたかも三位一體をなしてゐることが察せられます。

尤も、一概に三位一體と云ふても、例へば英吉利の教育制度がその國の産業革命、特に工場立法に出發し、佛蘭西の學制が、その國の農民制度・特にナポレオン法典に出發し、又、普魯西の義務教育がその國の兵制、特にフレデリック大王の法律に由來するなど、多分に夫れ／＼の國の特性を顯はしてゐるものやうであります。

今、我が國封建制度下の教育機關としての一面を成す郷校及藩校の説明に當つて、その一事例たる水藩の學制を検討するのは、この問題が、我國の學制・特に義務教育制の生成發展に對して、鋭い批判點を與へるものがあるからであります。

二

安政四年丁巳五月九日に、水戸城の西第三郭内に在る弘道館の開館式が舉行された。館の規模としては、廣さ方四町、周圍には檀をめぐらし、湮（ぼ）を穿ち、東方に正門が設けられて府城と相對してゐる。正門を入ると玄關があつて、直額を掲げ、題するに弘道館。之を正廳と名づけ、北方一帯には文館があり、南庭には武館があつて、この文武二館の中央、正廳の西側には鹿島の神廟を設け、少しく北方には孔子廟を祀つてある。館の西半面は廣い調練場をなし、その周圍には馬場を廻らし、西南の方には砲場を設けた。

此の賀日、鹿島神社の遷座式を行ひ、孔子の神位を廟中に安置し、その社廟祭事は、老臣中五位のもの一人、之が攝行に當り、了つて衆士に祭飯を賜ひ、布衣・物頭・教職・手副以上には神酒を賜はり、その後は封内の庶民に館内を縦覽せしむること三日といふ。盛んな祝典でありました。

弘道館の建設費について云へば、弘化元年十二月、普請奉行川瀬教忠の調書に、總額一萬四百二十四兩とあり、尤も、學校の維持費としては別に、久慈郡太田郷に五千石を計上してゐます。

ところで、弘化元年といへば、開館式のあつた安政四年よりは、約十五年の昔に當るのであつて、事實、假開館式は既に天保十二年の八月に行はれてをり、隨つて、工事に着手したのは天保九年、有名な弘道館記は更にその前年に起草されてゐたのです。

何故に、天保末から安政まで、十數年間も學式が延びたかといふに、丁度この期間は、烈公齊昭が幕府に忌まれて、封を順公慶篤に譲つた期間に當る。といふのは、弘道館の開設そのものが、齊昭の獨特な強行政策の一つであつて、この館の開設に當つては、藩内のあらゆる反對を押し切つて行はれたのであるから、烈公の失意・得意の時期々々に應じて、

弘道館の運命も、立ち上つたり取りやめになつたりしたのです。

既に天保五年、齊昭が、神儒一致文武不岐の大方針を宣明した時に、國老藤田貞正等が、費用の點から弘道館開設に反對した。齊昭の主張に賛成する者は、彰考館儒、會澤安、藤田彪、青山延宇等の學徒のみであつて、國元で同する者は、殆んどなかつたのです。

併し、齊昭の決意は既に堅く、當時、青山延宇への手簡には「學校の義凶付借上等も出候へば云々」と申候共内實は家督の節より我等目論候義にて學校建立可致金子は外に備有之事にて何も家中より取上候金子にて出來候事には無之皆手元金の貯のみにて出來候事故」とあつて、天保九年六月に、館の地域を先づ定めたのであります。

文面にも見る通り、當時凶年にも拘らず、何故にかく急遽、齊昭が、一藩の教育中心たる弘道館開設を強行したかといふに、それは當時宇内の騷然たる形勢に應じようとして、齊昭が行つた農政・兵制に必須不可缺の一政策たる、一藩義務教育制の創始を劃する爲めの、貴重な一石が即ちち之であつたからに依るのであります。

三

一藩内の教化施設に關しては、既に二代の義公光圀が大いに稽へてゐたところであつて、當時、明の遺老朱之瑜を師として學制を考究するところあり、彼の口授に因つて、彼の地の學制を模したる書を府庫に藏して、後人に俟つところがあつたと云はれる。

のみならず、寛文十二年に、大日本史編纂の爲めの、彰考館を建て、毎月六回づつ、士太夫の爲めに館内に講筵を設けて、國史編纂に當る當代諸學者の聲咳に親しく接するの機會をつくられた。又、久慈郡馬場村に講堂を建て、月に三回、館の當番儒士をして、行つて經書を講ぜしめ、庶民の教化に當らせたといふ。

義公の理想から云へば、更に家中士一般の教化を徹底せしむる爲めに、學校を設置することは必要なことであつたが「今諸侯の城下に備へ設けんとするに行し難き事有其家中の諸士各役儀番等の勤多ければ日を定めて會集すること能はず」（西山公隨筆）といふわけで、誠に微溫的ながら、館儒の出張講演で間に合せざるを得なかつた。

かくて、義公より十代の後、烈公齊昭が始めてその祖宗の遺志をついだわけになるのです。

天保十二年に弘道館が一先づ落成をみた時に學則も成りました。それに依れば、入學者の就學年齢は十五歳以上の男子であつて、布衣以上並びに三百石以上の當主及嫡子は月十五日、次男以下は十二日詰となつてゐて、以下諸士の次男の月十日詰までが義務的な就學。諸士以下、被召出以上は「定日無之勝手次第」として、事實上は就學の義務がなかつた。

諸士以上の子弟が年十歳に達すると、館とは別な、家塾に入らねばならない。こゝで、句讀書札及び素讀を習つて、十五歳に達して「文義稍々通ず」れば、家塾の師匠が、其の姓名年齢を書いて、館の總教に呈出する。

館に入ると先づ講習寮に入所して、會讀生といふのになつて經史の講義を受け、次に輪講生といふのになつて論語孟子春秋左氏傳を習ひ、次いで居學生となるのです。

又、家塾に通つてゐて仲々素讀を卒へることが出來ずに、二十歳に達する者は、館の講習別局に入らせられた。といふ處からみれば、この學則による、諸士以上の藩士の就學期

間は、略々十歳より二十歳まで、といふたてまへと見て宜しいでせう。

以上は文館の方ですが、他方、武館への入所には試験を要せず一律に十五歳よりとし、諸士以下諸卒以上の者が文館に入所するには所定の請願及び許可が必要なのに反して、武館には當然入所を許されてゐたから、藩士たる以上誰でも此處に入つて武を磨くことが出來たわけです。

要するに弘道館は、諸士以上の子弟を目標とする一藩の義務教育制の中心であつて、特に、三百石以上の者には、特設の寄宿制があり、又、通學日には公務を半減詰とされてゐたのです。

四

齊昭が意圖したものは、單に水府城内の上士に對する教育の強化には止まらず、更に廣泛な教化網を施かうとしたのでした。

文化三年頃から、郡宰の小宮山昌秀が延方に一つの郷校を建て、之を經營してゐた。齊

昭はこれに着目して、天保年間から處々に、醫學館と稱する學校を設置し、後には更に、武場を附設して、名も郷校と改めることにした。延方郷校・小川郷校・湊村敬業館・太田村益習館・大久保村歸修館・太子郷校・野口村時雍館・其他、鳥羽田・小菅・大宮・潮來・玉造・馬頭・町田・秋葉の各郷校合せて十五所。

以上の中、最も有名にして、しかも齊昭がとつて以て範としたのは延方郷校であつて、その内容に就いては「日本教育史資料卷三」に比較的詳しく出てゐる。創立者は前に述べた小宮山昌秀（楓軒）であつて、烈公時代には久保木竹窓が主教授で、郷校守は澤田弘、彼等は孰れも錚々たる水戸學者です。

主教授、校守の年俸は各々三口俵及び二口俵を賜はり、校全體の諸經費は、楓軒の時代から郡廳に千兩程の基本金を置いて、その利子で賄つてゐた。

講筵日は月に五回乃至六回あり、その中二度は稍々學者向きの話をし、あとの三、四回は近隣の有志を集めて、小學近思錄朱子學的呂氏郷約等を口演することになつてゐた。

大體、郷校に參集する者と云へば、農閑の農民といふことになつてゐたのだが、天保度

からは、主として郷士と防海卒であり、彼等の訓練場として用ひられた。又、烈公の期待を郷校にかけた主たる對象も、郷士・防海卒の訓練にあつたこと、思はれます。

十有五を數へる郷校の設立は、水府弘道館の設置と略々同年頃に當つてゐるのであつて、日を前後して、かく藩校郷校を續々と建て備へたことは、當時の水藩の財政状態から云へば、決して樂なことではなかつたでせう。

といふ譯も、當時、水藩の方針たる攘夷から、廣く兵力の充實・訓練が必要な時代であつたので、郷校・藩校とは云ふものゝ、單なる文武の教化が目的ではなく、さしせまつた政治的な目論見を負はされたものであつて、この意味から郷校は弘道館の如くに義務的な就學制ではなかつたが、一種の青年學校のやうなものであつた。随つて、その訓練も相當嚴格なものであり、後には一方の力を有するまでになりました。

例として、湊の敬業館に就いて云へば、同館は天保七年に設立され、始めは、七斗九升五合の猫額の民有地を校地に充てたが、後、安政四年に至つては、これに武場を設け、敷地も二段一畝八歩に擴げられ、文武館と改稱した。初めは寺小屋風の古状揃、庭訓往來、

實語教等の素讀を主として教へたが、後に、堀川潜藏が館守となるや、有志の者には經史を授けるやうになり、遂には小川館・潮來館と相結んで、府南正論派の一根據をなすに至つたのでした。

齊昭公設立の郷校は、それ自體、弘道館の設置と相通するものであり、寧ろその理由を廣く封内に擴充したものでありますが、政治的には更に尊攘論の具體的な手段となつてゐたことは、注意すべきことと思ひます。

五

烈公齊昭の學制改革は、決してそれ自體が目的のではなく、一には藩政の改革、二には攘夷の實行が、究極の目的なのでしたから、隨つてこの學制改革は、當然、公の農兵制の大改革と相俟つて行はれたのであります。

水戸藩の財政は、既に藩創立の當初から困難なるべき運命を背負はされてゐたのであつて、格式は親藩三家の筆頭にありながら、尾紀二公が夫々六十萬石なのに較べて、二十五

萬石の封領でしかなかつたことは、當然、内帑の困窮をもたらしたのでした。

藩財政の困窮は、必然、その農政の苛酷を招致し、寛永度の檢地では「山の半腹谷の間尺寸の餘地も纏入」をなし、しかも文祿檢地の時には六尺五寸を一坪となしたものを方六尺を一坪として、しかもその石盛は、文祿のまゝとした。即ち、入會地の纏入と、二割の増税が行はれたわけです。

併し、これだけではとても藩財政の切り盛りが困難となつて、後代になると更に、延米を二割とし、口米を三升收納し、更に、三雜穀切返法といふ仕方をして價格の差額による増収を計つた。このことは、藤田幽谷の「農政或問」其他に精しく述べてゐるところです。

このやうな租税法は見る／＼農村の疲弊をもたらし、租入額の率だけでみるに、延寶年間に四六%のものがその後上昇せず、毎年三五%を上下してゐたことでも解ります。

又、夫役は、藩の位置が、幕府にとつて樞要の地である關係上、諸種の土木事業が行はれ、特に、水戸街道の助郷賦役は、平均一年數十日に達して、長岡村附近五十ヶ村は疲弊の極に達してゐる、と幽谷は述べてゐる。

勿論、藩廳でも之が對策に腐心し、二代義公光圀は、かゝる農村窮乏への補助として、國內各地の物産を移植し、地味に適する農産工業を助長しましたし、又、種々の保護政策をも執つたのです。

古内の茶、赤土村の國府煙草、久慈の蒟蒻、或ひは麥光紙の製造獎勵などが前者であり、漁村の舟庄屋・津頭などは後者の例でせう。

けれ共、このやうな物産獎勵は、當然、農村の中に貨幣經濟の進出を促し、小商人の跋扈が夥だしく、この點が寧ろ封建制維持の邪魔ものとなつて、高野昌碩といふ學者は「一村夥敷店共仰山に相はびこり」農村の富を奪ふと心配してゐる程であつた。

一方には開墾も七萬石以上行はれたし、又用水堰の土木も起されて民の用に供されたが、又一方には散田棄作、要するに農民の逃亡が行はれて、結局は人口の減少といふことになり、享保年間の人口三十二萬といふのが、寛政度に至ると二十三萬、前後七十年間に九萬人、三割の減少を見るに至つたのであります。

烈公齊昭は、銳意この窮狀打開に腐心して、襲封以來直ちに五年計畫の檢地を行ひ、次

いで、義倉・常平倉を設置し、更にこの對農政策を兵制改革に結合せしめて、當時宇内風雲の急なるに際しては、實に驚嘆すべき程の成功をおさめたのであります。

六

十九世期の初葉から中葉にかけての期間は、歐米では産業資本の確立期に當つてゐて、所謂、近世的植民制策が東洋に延び、印度から支那、支那から日本へと、次第に侵略の方向を進めて來たのです。即ち、天保十年（一八三九年）には阿片戦争があり、安政四年（一八五七年）には大ムガール帝國が、英國の手に葬られて、一先づこの近世的慘虐が、ピリオドを打つたのですが、次いで來るべきものは日本を中心としての米英佛植民政策の争覇であつた。

既に寛政四年（一七九二年）露國の使節、ラクスマンが根室を訪れて以來、太平の夢は屢々破れて南方東方の海上海邊は、夷船の爲めに恐慌を呈してゐたのです。

水戸藩では特に、兇暴なる英國船の來寇を受けて、文化七年（一八一〇年）に英船員の

大津浦上陸事件を始めとして、文政七年・八年と次々に瀕繁たる不祥事を見るに至つた。

齊昭公は文政十二年に襲封するや、深く之を愁へ、直ちに那賀港に砲臺を建設せんとし、且つ自ら「震天動地」とか「一發塵虜」などの大砲鑄造を督せられ、天保嘉永の間に、二百九十一門の大砲を造つた。三眼銃といふ連發銃を創製したのも、反射爐を建造したのもこの頃のことでありました。

併し、兵器の改良は兵法の改良なくしてはその威を振ふわけにゆかず、兵法の改良の基礎には兵制の大改革が必要である。そこで公は、一方には指揮官たる武士團の戦闘訓練と、他方には廣く民兵の養成訓練といふ、二大重點を兵制に置いた。

當時、水藩の武士階級は、永年の經濟的な逼迫と、太平による柔弱化によつて、實に、救ふべからざる状態にあつたので、公の武力養成の第一着手は、先づ此の際武士全體に對して、強硬なる土着化を行ふことであつた。

その爲めに、先づ、官借財の徳政を行ひ、江戸表在住の武士を悉く在國に轉じ、百石以上の士には總て知行割朱印狀を交附して土着せしめようとしたのです。戰國時代の兵制に、

六貫一騎十五卒といふのがあつて、武士は土着しながら不時の際にはその貫高によつて兵士を引具する要領になつてゐたのですが、豊臣時代から兵農がはつきりと分離したので、この農兵制度も、もはや古制となつてゐたのです。

所謂、本來の意味の郷士といふのが之に當るのであつて、水戸藩封内にも、昔はこのやうなものがあつた。乃はち、藩祖威公が初めて水戸に轉封した時には、それ以前から常陸の地に覇を唱へてゐた大塚氏・江戸氏・佐竹氏等の遺臣が野に下つてゐて、陰然たる勢力を持つてゐたのです。であるから、水戸藩の農政には、最初から、この土着武士の勢力削減策が盛りこまれて居たわけであつて、農村疲弊の反面には土着郷士の衰亡がもたらされたことは疑ふべくもないことであり、このことは同時に藩の兵力經濟力をも自壊せしめたもの、所謂、撓角殺牛の自己矛盾であつたわけでありませう。

かゝる素朴な、剛直な兵力を、烈公は太平二百年の後に、再び地に蒔かうとした。目的とするところは、屯田兵の設置であり、古の郷士の復活であつたわけです。儒者、船橋亘は、古制への復歸には、當時の十倍に當る經濟力が必要であるとその著「こんでゐばな

し」に論じてゐます。

兎に角、烈公は着々その目的に邁進し、郷足輕・所足輕・門地の者を利用して外夷打攘ひに用ひ、又、介川・友部・大沼・磯濱など樞要の地には、再三に亘つて家老・物頭・同心などを土着せしむるなど、凡ては、在來の郷士の流れを利用したり、また新たに武士を土着せしめようとの計畫に基いたものである。

要するに公の政策は、一には貧窮化せる武士の經濟的更生策であると共に、一には強兵策でもあつた。しかも、これら武士の上層に對して、嚴密に文武の訓練をし直すものが水戸の弘道館であり、又、土着化せる武士・本來の郷士、更には次に述べる防海戍兵の教育機關が前述の郷校であつたのです。

七

天保十三年頃のこと、烈公齊昭は水戸海岸の漁師の中から、特に身體強健の者で、二十歳から四十歳までのものを募集し、之を海防手先同心及び船手頭に分屬せしめて、所謂、

防海戍兵の組織をつくらうとしました。

この計畫は、丁度前に述べたやうな事情で公が隱居された爲め、實行にうつさぬうちに沙汰止みとなつたが、其後、安政二年の秋、公が再び一藩の牛耳を執るに至つて直ちに實行され、磯濱・湊など海岸の要地に、總數十二組六百人が配置さるゝことゝなりました。

この度の戍兵は、前に計畫されたものよりも大規模なもので、この六百人の外に、有志五百人、獻金引立五百人、合せて千五六百人の動員力を有することゝなり、これらの中堅となつてゐるものは前述の、在來・新設の郷士であり、それに百姓・漁夫の壯丁が加つたものであります。

大體以上のやうにして、比較的上層の武士は、弘道館を中心として文武を練り、民兵は諸處の郷校で教育を受ける、といふ仕組でした。しかも、この間の教育精神は、かの弘道館記、乃はち初代威義二公より連綿とつながつたところの、水戸學精神の流れでありました。

烈公の農・兵・學、三制改革は、かうして着々效を奏し、天保十三年には、寛永・文化

以來の軍制を改めて洋式を採り入れたる兵制を組織し、千束原に於いて大逐鳥野——といふと今でいふ大演習——を行つたのであります。

以上のことは、精しくは、水戸藩史料にありますし、又、當時の演習のことは、水藩雜錄に圖解入で説明してあるから、参考までに述べて見ます。

八

大日本史編纂に始まり、弘道館記に於いて縮約せられた水戸學的精神は、烈公に至つて更に具體的に「尊王攘夷論」といふ政治的な運動形態を執るに至りました。

抑々水戸精神、或ひは水戸學といふのは何を本體としてゐるか。勿論、この精神は、直接には維新の一動力ともなり、維新の志士間の精神的合言葉ともなつたのですが、その發生から見ると、之を一言にして云へば「封建的反對」の指導觀念であつたと見るべきでせう。

この精神が滲み込んだ部面は、一般には當時の知識層たる武士の階級に限られてゐたし、

又、その中でも特に武士中の革新勢力たる下層武士に最も強い共鳴を呼び起したものであります。

ところで、水戸藩には、傳統的に上下武士間の黨閥的争が以前からあつて、この争ひは年を経るに随つて激しくなり、或ひは藩治の方針に、或ひは藩主の相續事件に、或ひは彰考館總裁の改任に、或ひは大日本史編纂の、改修増訂などに、ことごとくに現はれてきたのであります。

烈公齊昭が藩主の位につく時には、特にこの争ひが激しく、公が、十一代將軍の子清水恒之丞との相續競争の裏には、幕府方の上層武士と、齊昭方の下層武士との間に、屢々血の確執さへあつて、結局、正論派たる下層武士が勝を占めて公の位置を定めたのです。

随つて公の立場は實に同情すべきものがあつて、その藩主たる・親藩たる地位の上からは親幕的態度に出でざるを得なかつたでせうし、又、その勢力の地盤たる下層武士の、下からの壓力に對應する爲めには、進歩的・革新的な政策を執らねばならなかつた。

このやうな關係から、公の一つ一つの政策は、常に幕府に對する妥協と強行との、きは

どい一線を縫ひつゝ進まねばならなかつたので、この意味から公の攘夷論は、表面幕府の御爲であると共に、事實上には下層武士の改革的氣運の發散を抑へる好個の題目であつた。後年に至つて、齊昭攘夷の眞意が兎角問題となる原因もこゝにあつたわけです。

併し、公のこの政策は、幕末政局の急速な進展に副ふて進むわけには行かなかつた。幕府にとつてはその祖法たる鎖國が到底維持し切れるものでなかつたし、それ故にこそ公は自らの政策に束縛され、失意のうちに薨じたわけです。時に萬延元年八月。

今や楔を失つた割木の如く、水藩の上下武士の對抗は正面に、衣着せずに向ひ合はねばなりません。妥協論たる公武合體論はけし飛んでしまつて、開達・非開達（討幕の勅書を上の開達するか、開達せぬかの論のこと）の二論が、下級と上級の武士相互間に、必至の衝突をまき起し、つひには收拾すべくもない大混亂に陥ち入つたのでした。

脱藩者の續出・暗殺の流行、そして櫻田事變の糸をひく東禪寺事變・長岡屯集事變・坂下門事變等々の血腥い事件がつゞいて、最後には元治元年の筑波山天狗黨の戰爭に至つては遂にキヤタストロフに至り、總てと無とを賭けての内紛にたち至つたのであります。

しかも、この戰爭に至つては、烈公の英斷によつて行はれた藩治改革の根本的な矛盾ともいふべきものが、はつきりと表面にあらはれてしまつたのです。

即ち、それは、弘道館を主體とする諸生黨と、各地の郷校を中心として集まつた正論派の抗爭、即ち、故烈公が藩教學の兩極として設けた二つのものが、互ひに反撃し合つたことに於いて見られます。

又、烈公の心血をそゝいで行つた農民政策は、藩論の正否執れにも、何等の地盤を與へなかつた。そのことは藤田等の筑波黨が國外に脱出したこと、及び、市川等の諸生黨が、維新の戰爭に對して、反抗らしい反抗も示さずに逃亡したことによつても解るのであります。

九

教育及び文化の事業は短日月に築かれるものではありません。烈公の藩治改革は、凡そ時代の要求に應じて行はざるを得なかつたことではあります。その方針と云ひ、その要

領といひ、公の英邁なくして行はるゝところではなかつた。

しかも、水藩の維新後落莫たりし所以のものを考ふるとき、私共は枯れはてた封建制が、歴史の法則の下に於いては、人力の大を以てしてもどうすることも出来なかつた、といふ見本を見るやうな思ひがする。

と同時に、明治以後の教育史が、英主齊昭の幕末に執れる方向に如何に相一致してゐるかを思はざるを得ないので。

第八章 福澤諭吉論

一

西暦一八六二年の春から冬にかけて、歐羅巴諸都市の人士には、思ひもかけぬ好話題が提供されてゐました。極東の新らしい國から、サムライの一行が四十名程それらの都市を歴訪したので。

彼等の頭には、見なれぬ髪束が載つかつてゐたし、殺伐にも兩刀佩びて白晝濶歩するし、その服装はといへば、異國的な——あまりにも空間を無視した鋭角状の翼を大袈裟に擴げてゐたし、それにも増して人々を驚かせたものは、彼等の極端な儀禮であつて、彼等は凡そその數々の儀禮を司祭が神の前で行ふやうに一糸亂れず次から次へ繰擴げたわけです。彼等は威儀の中から生れたやうなものに見えた——徹頭徹尾眞面目であつたし、又決し

て笑顔などは見せなかつた。パリーの都に入つたとき、この一行と共に入京したのは、十數臺の行燈であり、一年分の米味噌でありました。

このやうな異風景を迎へて、パリーの人々が先づ、好奇と好意を半々にしたやうな歡待を始めたわけであります。

この日本人の一行は、徳川幕府から派遣された修好使節の一行でありました。一八六二年と云へば、我が國の文久二年に當ります。修好使節といふのは、この年から四年以前の安政五年に締結した幕府の通商條約で三百年の鎖國が解かれた結果、改めて歐米諸國に開國の挨拶に巡るといふ意味のものであります。けれ共、この一行の任務は、その實決して單なる儀禮のみのもではなくて、修好と同時に、開港の延期・關稅率引上・及び樺太の境界確定など、いふ重大な使命を持つてゐたものなのです。

平たく云へば安政の通商條約は結んだものゝ、さてその實行といふ點になると、仲々事情が許さない、といふいはゞ借金の云ひ譯けみたいなものであり、幕府としても見透しあつての使節ではない。寧ろ條約國からみれば、これを機會に、もつと有利な條件を幕府に

押しつける口實とならぬでもない——といふ誠に不利な役目の使節であつて、これが成功して歸るなどは、どうしても望みやうのない状態のものなのでした。

加ふるに、日本では生麥事件其他の對外人の不祥事が起つたりしたので、益々交渉が行き惱みとなるなど、兎に角、見事に失敗して歸國したわけなのですが、たゞこの封建武士の一行は、この旅行によつて、當時の文明諸國の社會情態に關しては、相當な知識を得て歸つたことは、むしろ幸ひなことでありました。

この小論の主人公たる福澤諭吉先生（以下尊稱を略す）は、實にこの四十數名の武士中に、一員として加はつてゐたのでした。

二

當時の福澤諭吉は未だ二十九歳の青年であり、しかも幕府翻譯方の一小吏に過ぎなかつたとはいへ、もうこの時までには蘭學も修めてゐたし、又、前年の萬延元年には既に北米合衆國の土をも踏んでゐたのでありますから、彼の眼には、驚異的な西洋文明も、他の同

輩や上級者達程には強く映らなかつた。

前回、合衆國へ渡航した時すら、かの地の所謂文明の利器なるものについては、もう既に學生の時代から蘭書で學んでゐたので、蒸氣機關と云ひ、電信機と云ひ、そんなに膽を消す程のことはなかつたのだが、たゞ、どうしても納得のゆかなかつたことは、泰西の社會事情であつた、と自らも云つて居ます。

アメリカへ行つた時のことであるが、某外人に、ジョージ・ワシントンの子孫が今どうしてゐるかと問ふたら、某は知らないと答へた。合衆國獨立の恩人の子孫についての、國人のこの無關心と、日本の徳川家康が幕府創立の功績をその子孫代々にまでも將軍職として傳へたことと、この全然根柢を異にする二つのことを比較するのだから、流石の新進學徒たる福澤も當惑したのは全く無理のないことであつたらう。

又、第二回の渡歐に際しても、どうしても郵便の仕組が解らないので、巴里滯在中の數日間は、専らこの郵便制度に對する質問で費やしたといふし、慶應二年には爲替手形の仕組に疑念を以て、わざ／＼米國の貿易商館員に説明を求めに行つたといふ。

當時の錚々たる洋學者を以て自らも任じた福澤にして、このやうな五里霧中にあつたのだから、況や其他の人々については想像に難くないでせう。福澤の義弟が、江川太郎左衛門のもとに鐵砲の稽古に通つてゐたとき、福澤が試みにその掃除の仕方を訊ねたら、井戸水で筒を洗ひ、錆が出たら磨砂でゴシ／＼こするのだといふ答にあきれ返つたといふ。彼の「雷銃操法」翻譯の動機がすでにこのやうなものであつたのです。

維新後、明治八年に福澤の著はした「文明論の概略」中に「英に千艘の軍艦あるは唯軍艦のみ千艘所持するに非ず、千の軍艦あれば萬の商賣船もあらん、萬の商賣船あらば、十萬の航海者もあらん」と、正鴻を穿つた觀察を敍べてゐるやうに、「單なる兵備の完備」といふことは絶対にあり得ないことです。如何なる時代でも兵器は、その時代のあらゆる學理の結晶とも云ふべきものであつて、その兵器の製造には一定の社會的條件がなければなりません。こゝで福澤が述べてゐることは、要するに、その條件としての世界市場のことなのです。

煎じつめたところ、福澤の當惑も、江川の無智も、要するに當時、世界市場から切りは

なされてゐた日本の孤立に原因するものであり、更につきつめれば、日本の封建制そのものゝ然らしめたところと云ひ得るでせう。

三

さて、行論上こゝでいさゝか理屈ばつたことを述べねばならない。といふのは、以上に記した如く、維新以前の福澤が、その洋學の錚々たるに拘はらず、幕府の封建制に對して何故に疑問を有ち得なかつたか。又、彼が、西洋の社會組織に對する疑點を、何故、彼我構造上のそれへまで想到しなかつたのか。といふ點を少しく考へてみたいからなのです。

勿論、福澤其の人は、後に述べる通り幕府の祿を喰んでゐたので、その身分上の立場がかゝる傾向をたどらしたものと見られぬこともない。併し、明治中期は兎も角として、我が國には維新前に、眞の意味の近世的啓蒙者は全く見當らぬのは何故でせうか。

茲に至れば、當時、洋學の鏘々たる第一人者として福澤を見、福澤の思想を開化の先鋒として取扱ひ、而して彼の思想を解明せしむることは、同時にこの第二の大問題への一歩

前進であると共に、福澤其の人を歴史的に理解する謂に外ならないと信するのであります。

福澤諭吉には、著書として纏つたものだけでもその生涯に約五十篇あつて、その内彼の初期に當る明治五、六年頃までのものが約十篇で、之には安政四年の「ベル氏築城書」や、萬延元年よりの刊行にかゝる「華英通信」等を代表とする諸外國の事情を紹介したものが多く、次に明治十五年頃までのものには、社會政治評論が多く、その代表的なものは明治八年「西洋文明の概略」及び同十五年の「帝室論」であります。この後彼の晩年二十九年の「福翁百話」までの著作は、殆んど平坦な道義論に終つてゐる。

彼の著作の十分の一は兵論に占められてゐることも一つの特徴であります。前期中期後期と、三段にわけた著作年譜のうち、前期乃ち明治維新前のもものでは、特に「西洋事情」が當時の啓蒙的役割を果してゐるやうに思はれるのですが、この書に於ける彼の政治及社會への無關心が災ひして、甚だしく微溫的なものになつてゐます。

このやうなことで、前述の滯歐米時代の彼の述懐とから觀る時、彼れの不徹底な啓蒙者たりし所以のものが單に福澤の身分上の地位とか、彼の個人的不明に歸せられるとは思へ

ない。

凡そ一國が資本主義化する、即ち近代化する爲めには、色々な條件を必要するものであつて、單に其の國の封建制が行き詰つたから、早速次の資本制へ席を譲るといふわけにはゆかないものであります。

資本主義といふものは、商品と貨幣を兩極とする絶えざる一聯の環の流通に基礎を置くには違ひないのだが、一方の貨幣資本が蓄積されたからといふて必らずしもそれが産業資本の發展を約束するものとは限りません。更にその國の商品生産、一般にいふ生産力が、或る程度に發達してゐなければ、兩極の疏通は行はれないわけです。

然るに、幕末當時の我が國の生産的水準はどうであつたか、といふに、「大阪の商人一度怒れば、三百の諸侯愕然たり」とまで云はれた貨幣の代表者たる大阪の商人は、未だ全國を支配するまでもゆかないミゼラブルな商人資本家でありましたし、又、初期的な産業資本の萌芽をなすマニユファクチュアは、當時の状態では封建の壓力に壓されて十分の發芽を見てゐなかつた。かゝる低い生産水準の状態へもつてきて、アメリカの資本を始めと

して、英國佛國露國等のそれが觸手を伸して來たのですから、我が國の獨立を確乎たらしむる爲めには、先づ對外的武裝が急務であり、随つて國內のことから云へば、舊きものゝ破壊よりは、それとの妥協が急務であつたわけせう。

誠に簡單粗雜極はまる當時のスケッチですが大略以上のやうにして、時代は一轉變したのでした。

「啓蒙」とは寧ろ、世界史的な用語であつて、其處には歴史の法則をば妥協なく進展せしむる意味を含んでゐるのであります。であるから、この日本の當時の事情と、洋學者福澤との聯關を考へる時、到底そこには、かゝる世界史的意義を有するところの「啓蒙者」たるの地位を與へる餘裕がないことを斷定せざるを得ない。しかも、このことによつて、私共は大福澤の人物上の價值を決して過小視するものではありません。

四

併し世には、福澤諭吉を以て、明治年初の一大啓蒙家となし、之れをフランスの、ブル

ボン王朝末期に於ける啓蒙家ルーソーとも比較すべし、などの論も少くないやうに思へるので、次に、教育の分野からみての近世教育の基礎を提起せるジャン・ジャク・ルーソーと、スイスの先覺者たるヨハン・ハインリヒ・ペスタロッチイの二人を擧げて、その比較を試みることも、決してこの際無駄なことではないと思います。

十八世期の後期は、フランスの古典的な絶對王制支配の終末期でありました。この政治形態は、その基礎を封建的土地所有と資本制生産との相反するものに置く形であります。随つて、資本にとつては封建の桎梏が益々耐えきれぬものとなるだらうし、又、その資本の背後には、日に昂揚する労働者の勢力が陰然たる力をなして來る。であるから特に十八世期の末期になるにしたがつて、資本の力はあらゆる反封建的勢力を糾合して、かの歴史的な一七八九年に備へるのであり、その爲めにこそ啓蒙家の群が社會的に必要となるわけです。この場合の啓蒙は、内部的條件が成熟した上に立つ啓蒙であり、それ故に啓蒙の内容といひ、形態といひ、極めて健康な、典型的なものを含んでゐるわけであります。

ルーソーの著たる「エミール」が、到る處に於て封建制及びその教育を否定し、同時に

近世的な要求を公然と示してゐる所以です。この點に就いては諸君が、該書（岩波版）について一〇五・一一〇・二七三頁等を検討さるゝことを希望します。又その立論の基礎に於いて、當時フランスの、膨大なる農村流出浮浪軍の存在を認識してゐた所以でもありません（同上六三頁、宮原氏譯「新エロイズ」二二頁等）。

次にペスタロッチイを見ませう。

彼の生涯の歴史こそは、彼の全著作よりも以上にその立場を明瞭ならしむるものがあります。

彼の生國スイスは、十七世期中葉に、ドイツ的な封建から完全に離脱し、農民は所謂「獨立農民」となつてゐました。ところがその後徐々に、スイス國內のマニユファクチュア生産に壓されて漸次、その獨立の地位を侵され、十八世期の後半には色々な形で農村が都市に反抗したが、つひに自らバラムにぐれされるやうな状態になつた。

大學生時代に於ける反抗兒ペスタロッチイが、其の後ノイホーフの農業經營に失敗し、續いて浮浪兒教育への轉換をとり、最後には「白鳥の歌」にあらはるゝ純粹の人間教育提

唱となつて了る。

總てこれは一七六七年から一八二六年までの彼の過程であり、同時にこの期間は、没落しつゝある近世小農民が資本の下に再編成される過程でありました。其處には目標のない反抗から牧歌的な懐古、更には敗殘の屈伏に至るまでの、あらゆる小農民が苦痛を嘗めつともひきずられゆく、かの悲歌が貫通してゐます。

彼れの農民的な執拗さと、彼の分散的な理論とは、到底彼れに啓蒙者としての地位を興ふべくもないが、彼れの精神は當時のドイツ聯邦や、南北戦争後のアメリカ合衆國には生きて、その説は採擇され、國民教育の理論を形成してゐます。何故かといふに、ドイツはスイスの後に踵いて強力に大規模にその歴史を繼承し、アメリカはその國の雇役制度を維持する爲めには彼の理論を必要としたから。

有名な哲學者フイヒテは、其の著「獨逸國民に告ぐ」の中でペスタロッチイを批判するに「頭腦の不明瞭」(同岩波版一五一頁)を以てした。が、「不明瞭」なのは決してペスタロッチイ其の人の頭腦ではなく、彼れの立つ社會が然らしめたものでせう。

さうかといふて、彼の後學にして進歩的な學者たるアドルフ・デイステルウエクや、ロマンチストたるフリードリッヒ・フレーベル、或ひは純粹にビスマーク的なヨハン・フリードリヒ・ヘルバルト等々が、一括して彼の理論から發せるの故を以て、一概にペスタロッチイを教育の神様のやうに説く説も亦、眞に彼を知るの説とは云ひ難いと思ひます。「啓蒙」といふ言葉を、このやうに世界史的意味から限定するならば、其處には當然、ルーソーとペスタロッチイの價值批判も下されますし、又、わが福澤諭吉の歴史的地位の決定も、自ら明瞭となるわけでありませう。

五

福澤諭吉は、天保五年十二月、大阪堂島中津藩の倉屋敷に生れ、翌々年三歳にして父百助に死別、それから安政元年二十一歳までは母と共に豊前國中津に居住、これから長崎に出て蘭學を學び、安政二年の春から五年の秋までは、主として大阪の蘭醫緒方洪庵に就いて勉學し、安政五年十月には、江戸にある中津藩主奥平氏の招きによつて出府、始めて築

地鐵砲洲に蘭學塾を開く。時に壯齡二十五。

この歳に幕府は米國と通商條約を結び、神奈川の開港となり、これに刺戟せられて、福澤の語學研究は英語に轉じ、萬延元年一月、米國への修好使節に附隨して幕府の軍艦咸臨丸に乗組んで渡米、同年五月歸朝するや幕府の翻譯方となり、翌文久元年十二月には最初に述べたやうに渡歐使節に隨伴して歐洲各國を巡歴、翌二年十二月歸朝。

元治元年外國方翻譯局に出仕して、慶應三年一月より六月まで再び米國に使して歸る。

福澤の官途についたのは六ヶ年で、二十七才より三十四歳に至る間は、殆ど對外關係者の一員となつて、前後三回歐米に渡航し、六年の三分の一の期間は完全に歐米の地に過したわけです。

明治元年からは、彼の生活は、その一斑を慶應義塾の基礎確立に傾倒し、他の一半は著述に費やした。明治十五年には時事新報の創刊を見、明治三十四年二月に享年六十八歳を以て卒しました。

福澤がその慶應義塾に於いて、如何に人物の養成に盡したかは、かの彰義隊戦争の時、

上野の山にとどろく砲聲をきゝながら、芝新錢座に於いて泰然としてウエーランドの經濟學を講じてゐた、といふ有名な逸話でも解ることゝ思います。

次に、氏の著作を中心としてその思想なり、行動なり、背景などを一應調べて、この章を終りたいと思ふ。

六

氏の思想的變遷の後をたどるに、最も都合のよい著作は「學問のすすめ」十七篇であつて、これは明治五年の二月から、九年の十一月に至る約四年半に亘るものであります。

この書の目的が、所謂無學無智の人々に讀ませようといふので、比較的端的にその考へを發表してゐる點と、その著作期間が比較的長期に亘り、且つ本書そのものが、彼の社會上の見解を出してゐる點とで、極めて興味深いものであります。

その冒頭には、「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずと云へりされば天より人を生ずるには萬人皆同じ位にして生れながら貴賤上下の差別なく萬物の靈たる身と心との

働きを以て天地の間にあるよろづの物を資り以て衣食住の用を達し自由自在に人の妨げをなさずして各安樂にこの世を渡らしめ給ふの趣意なり」と書いてある。

この文章と氏の著「文明論の概略」にある「都て世の政府は唯便利のために設けたるものなり」といふのを比較するならば、實に彼こそはルーソーにも勝る程の民約論者であるやうに思へる。

が、同じ「學問のすすめ」の中で、すぐ彼は斷り書をしてゐる。「人は生れながらにして貴賤貧富の別なし唯學問を勸めて物事をよく知る者は貴人となり富人となり無學なるものは貧人となり下人となる」従つて「己が無智を以て貧窮に陥り飢寒に迫るときは己が身を罪せずして妄に傍の富める人を怨み甚だしきは徒黨を結び強訴一揆などとして亂暴に及ぶことあり恥を知らざるとや云はん法を恐れずとや云はん」。

こゝに云ふ「徒黨」云々なる文句は、當時各地にはびこつてゐた農民騷擾のことを指すのですが、これによつて彼のいふ平等の人間は少く共或る特定の範囲に限られてゐることを知るわけです。

この點、福澤は極めて明快に己れを披瀝してゐることは、「文明論の概略」(明治八年刊)中に「今の世に人民同權の説を唱ふる者少なからずと雖も其これを唱ふる者は大概皆學者流の人にして即ち士族なり國內中人以上の人なり」「然れ共結局余も亦日本國中に在ては中人以上士族の列に居たる者なれば、自分の身分より以上の者に對してこそ不平を抱くことを知れども以下の百姓町人に向ては必ず不平を抱かしめたることもある可し、唯自ら之を知らざるのみ、世上に此類の事は甚だ多し、何れにも其局に當らざれば其事の眞の情實は知るべからざるものなり」といふのでも解るのです。唯これを見て誠に遺憾なことは、彼のいふ學問の範囲が極めてせまい範圍の者に限定されてゐること、隨つて彼のいふ人民同權の範圍も相當綿密に調べねばならぬことです。

勿論福澤は、政黨反對論者ではない。それは彼の「丁丑公論」の中で、大西郷の死をい
たみ、若しも西郷にして智者ならば「民會論」と「發言の自由」を、穩當な形で政府に要求すべきであつたと、彼の爲に惜んでゐる程であります。

併し、福澤は、當時の自由黨の如き野趣漫々の運動も好まなかつた。希望するところは

議會政治的な自由ではあつたが、しかも「在野の政黨に與するものに非ず又今の政府の官吏に左袒するものにも非ず」として、既に明治七、八年頃から官民調和を説いてゐたし、又明治十四年の十月政變の起るまでは、政黨尙早論でもあつたのです。では、福澤の好んだ政黨といふのは、抑々どんな政黨であつたか。

七

明治十四年に、北海道開拓使官有物拂下事件が起りました。この事件の内容は、當時の北海道開拓使長官黒田清隆が、政商五代友厚に、時價數千萬圓に上る開拓官有物を、三十萬圓で、しかも三十ヶ年々賦無利息で拂下げようとしたことに端を發したものである。

この問題が當時の薩閥對抗の暗闘に火を點じた緒をなし、更に政府部内から野に擴がつて、國會開設請願運動の重大な契機となり、次いで同年十月十二日の國會開設の詔勅の運びとなつたわけなのです。

ところでこの事件にあつて、政府部内から最初に點火した者が大隈重信であり、その爲めに大隈は煥發の前日、參議の位を去らねばならぬことゝなつた。その大隈侯の實話として次のことが云はれてゐる。

「其の頃の言葉で、吾輩が叛亂を謀てたといふ譯で、我輩はとう／＼謀叛人になつて了つた。しかもこの大隈の謀叛の裏には福澤諭吉が參謀となり、軍用金は三井・三菱が出してゐるとまで政府側で云ひ出した」と。

眞偽は兎も角として、岩崎彌太郎・大隈重信・福澤諭吉の一系列は「自由黨史」その他のものゝ中に大抵あらわれてゐて、しかもその大隈によつて、明治十五年三月十六日に、改進黨が組織された。「老成にして名望あり、資産ある、智識ある各階級を網羅する」政黨だつたのである。

要するに福澤の唱へた人権論——彼は人権と政權とを國民の權利として「自分の争ふところは唯人権のみ」と云ふてゐる——は、以上のやうに極めて狭い範圍のそれであつたわけです。

かうして「學問のすゝめ」は、篇を降るごとに段々と常識的な道義論となつてゆきまし

た。最後に彼の學校に對する考へを紹介して、本章を了ることゝします。

「是に於てか我輩の大に冀望する所は帝室に於て盛に學校を起し、之を帝室の學校と云はずして、私立の資格を附與し、全國の學士を選で其事に當らしめ、我日本の學術をして政治の外に獨立せしむるの一事に在り（中略）斯の如く新に高尚なる學校を起し、又在來の私學校には保護を加へ又或は時に隨つては、今の官立學校の取るべきを取て一度び帝室の御有となし、更に之に私立の資格を附與して従前の教官等に授くる可ならん。」

これは明治十五年の出版にかゝる「帝室論」中の一節であります。當時の官營工場拂下にあつて、國內の有志大いに事を爲さんとする意氣込にも似て、「我れ立つて教學の任に當らん」とも云ふべき福澤の意氣が溢れてゐるではありませんか。

第九章 森有禮傳

一

明敏多才の士森有禮は、明治維新大業の中心勢力をなした薩摩に生れ、既に十九歳の若年を以て英國に留學、明治元年六月歸朝後、當時のあはたゞしい新政府部内にあつて、議事取調御用掛、學校取調兼勤、軍務官判士等々の官職を矢つぎ早にふりかけられ、一舉時代の寵兒となりました。

ところで、この英國仕込みの青年紳士にとつては、チョンマゲ帯刀の昔ながらの日本侍の姿が餘程氣に喰はなかつたと見えて、明治二年四月早速、廢刀の建議に及んだのであります。

明治二年といへば、明治政府にとつても、未だ百事草創の時であり、函館が陥つて間も

ない頃でもあるし、甲斐田安郡の農民一揆が起るなど、何となく未だ騒然たる氣風をはらんでゐる時期であつたので、刀の廢止の必要を感じる者など殆どない。殊に高格士族の連中は、轉換後の文明開化の風には一應靡き乍らも、牢固たる封建イデオロギーは、さうあつさり捨てるわけにも行かず、武士の魂は肌身はなすまいと思つてゐた時期でもあつたので、森の建議は喧々たる反對を蒙つたのであります。大久保は何度か彼を呼んで建議の撤回を迫つたが、彼はあくまでも頑張つたゝめに、とう／＼官位を免ぜられて、郷里鹿兒島に歸つてしまひました。

此の森の廢力論事件は、成程彼の華々しい「意氣」と「直言直行」といふ様な一面を物語るものではありませんが、この意氣と頑張りは、果してどのやうな程度のものであつたか、又果してどのやうな性質のものであつたか、私共は暫らくそこに注目したいと思ひます。

一應徳川封建制を打倒し了へた明治維新政府の手に未だ残された問題は、あらゆる舊封建の残りかすを洗ひ落すことと、先進諸國の開化制度をどし／＼取り入れて之を植ゑつけることでありました。明治に入るや、これ等の諸方策が決河の勢を以てとられたことは周

知のことでもあります。この切迫した革新の時期にあつては、廢刀論の如き、時期は一寸早かつたにしても、當然言はるべきことが言ひ出されたまでとあつて、その主張者を免官追放を以て罰したといふ當時の政府部内の輿論に對して、私共はむしろ奇異の感を抱くのであります。このことは、明治政府が、既に成立の當初から舊勢力に對して徹底的に闘ひ且つ之を揚棄する力を持たなかつたことを示す一例となるではないでせうか。既に當時において、心ある者はその不徹底さにあきたらなかつたのであります。現に森の實兄横山正太郎安武の切腹は端的にそれを物語つてゐます。人一倍弟思ひの兄安武は、廢刀事件による森の追放を聞くや、切齒して藩閥政府のやり方を憤り、時弊十ヶ條をあげ、悲痛の文字を列ねた遺書を残して自害して果てたのであります。

二

その後、森は雌伏一年有半、三年十月徵命により上京、小辯務使に任ぜられ、米國在勤となつて海を渡りました。時に二十四。

かつて大唐文化東漸の時代、「時勢に敏き士」とつて、最善の立身出世の道は遺唐使の船に乗り込み、危険を冒して入唐を敢行することでありました。若年の森にとつて、かつての渡英の目的が、果してさういふところにあつたかどうかは兎も角として、新政府にとつては森のやうな人物はどうしても必要であり、森自身も亦、新歸朝者のプライドと抱負とを藏して之を待つてゐたであらうと推察されます。

彼は官職を愈々受けようとする前夜、深更、兄安武氏の墓に詣で、任官の苦衷を訴へ、許しを乞ふたと傳へられてゐますが、さういふことがあつたかどうかは兎も角として、廢刀論の一件から僅かに一年有半、その間、政府のやり方其他において多少の轉換はあつたにしても、兄安武氏が死の憤激を投げつけた藩閥政府部内に、易々として入り得た森の態度に對して私共は疑問を持つのであります。安武氏は、或は地下にあつて「それでもいゝ」と淋しく笑つたであらうと、そゞろ同情の念を覺える。

このことは同時に森の廢刀論の程度を更めて考へさせるものです。成程彼は、飽くまでも、職を堵して頑張り通した、けれどもその頑張りは、果して、僅かに刀一本にすら反對

を巻き起すほどの、政府の不徹底な構成を全面的に衝く爲めの頑張りであつたでせうか。それは唯單に、自己の英國式の教養と、若年者流の意怙地とのこんがらかつた個人的な動機からの頑張りではなかつたでせうか。

それにしても私共は、かの明治言論史上の黄金時代と稱せられる明治六、七年頃、民間思想開發に貢献するところの多かつた明六社の同人の中に、輝ける森の存在を見落してはなりません。森は明治六年すでに米國から歸つてゐました。當時、この明六社を中心として集つた者には福澤諭吉、西村茂樹、津田眞道、加藤弘之、神田孝平、箕作秋坪、何禮之、中村敬宇、阪谷朗等のメンバーがありました。

後ればせ乍ら、封建の殻から生れた近代日本は、西歐文明國を向ふにまわして之と太刀打ちするためには、諸々の經濟的整備と並んで、自由主義的イデオロギ―を急速に輸入する必要がありました。かくて、フランス、イギリスの自由思想が上記の明六社のグループを中心として、決河の勢ひで流入し、ルソー、ミル、モンテスキウ等々の譯書が續々紹介されました。此等の新思想家群の中にあつて、森は、男女同權論をふりがざして大いに氣

を吐き、自分の結婚に際しても、「この約條を廢棄せざる間は、共に餘念なく相敬し相愛し……」といったやうな婚姻契約書なるものを取り交はし之を社會に公表したと云はれてゐます。これは、當時殆ど無批判的に西洋を模倣することを以て念とした上流社會人士の間にすら、大きなセンセーションを巻き起したらしい。

一體森は、男女同權論、延いては自由主義一般に對しても徹底し得たから、さういふ行動を易々と取り得たのでせうが、私共は之に對して否と答へねばなりません。そのことは敢て森一個人ばかりでない。明六社の自由思想家達、及び六、七年頃の農民騷動に呼應した自由民權論者達すら、十年以後になると、次第にその主義と言葉と行動を捨て、滔々として國家主義に轉向して行つたのであります。それはこの時代の趨勢とでも言ふべきものでした。森の自由主義とて何等その例外ではあり得なかつたのです。

彼の婚姻契約書の公表といふ行動についても、私共は、惜しむらくは廢刀論の場合と同様な動機を推定せざるを得ないのであります。

三

森有禮の前半生は、日本の明治初年の自由主義者が踏んだ道程とも言へるでせう。かうして彼は、明治十八年十二月、内閣制度成立と同時に、起つて文相の要職に就きました。私共は暫らく、彼の中心的な業績、教育政策の内容に立ち入つて見たいと思ひます。

明治二十一年、文相森有禮が奥羽地方學事視察中、次のやうな告示を與へてゐます。曰く「學校の小使等は廢して、教職員が率先して生徒と共に、學校の拭掃除草取水汲等一切の事をなし、自辨自理の實を擧げよ……」と。この告示が端的に示してゐるやうに、彼の採つた教育策は言はゞ緊縮政策でありまして、一名「經濟主義的教育」と稱せられたものであります。

先づ教育費の方面について見るに、明治五年の學制では、原則として民費によるものとして一人五十錢の授業料の徴收を認めてゐましたが（米一升五錢の當時にあつては、ずいぶん高い授業料です）、森文相の時、劃期的な教育制度充實に際しても、教育費は平年並

とされてあつたため、授業料徴収を以て補はねばならぬ始末でありました。即ち児童の父兄は増大する租税の外、授業料の支出によつて教育革新の一端を援助せねばならぬわけです。

このことは相當地方人民には痛手であつたらしく、かの學校令發布の翌年、明治二十年には、就學率を低下し、順位を云へば、最も多いのは商業者の子弟、次いで農工者の子弟、最も少いものは労働者の子弟であつたと文部省年報に記されてあります。

従つて授業料徴収の方法も極めて含蓄的のものとならざるを得なかつたのです。同年報によれば、埼玉縣浦和にて、この授業料徴収に際して最初「下等を五錢、上等を十錢」としたが、案外一つも異議がなかつたので、「更に之を進めて下等を十錢、上等を三十錢」としたがやはり生徒の減少も見ないといふので、再び之を増して、下等を十五錢、上等を五十錢としたが一人の退學者もなしと一地方視學が報じてゐます。一年足らずの間に三回も授業料値上げには一寸封建的な味がある。

扱つてこの森文相の所謂經濟主義的教策が生れねばならなかつた根據は何でせうか。

明治初年以來の外國制度文物の移植模倣のために經費はかさみにかさみ、その上、明治十一年の西南の役では多額の費用を使ひ相當の痛手を負つてゐました。殊に、明治十七、八年は未曾有の産業沈衰期と言はれ、産業伸張確立の前夜に當る緊縮の年であり、しかも、その産業伸張そのものが、早くも明治二十三年の第一回の恐慌につき當るといふ心細い有様でした。森文相に與へられた教育制度の確立といふ課題は、この經濟的な制約を脱することは出来ませんでした。

併し制約は單に經濟的のものにのみ限られてゐたでせうか。

四

河野敏鎌は次のやうなことを言つてゐます。「蓋しその政府の如何に關せず苟も文明を以て稱せらるゝ國にして普通教育の干渉を以て政府の務めとせざるはなし。是豈普通教育はその國運に關する最大なるが故に非ずや」

教育に對する政府の干渉が、よいことか悪いことかなどと開き直つて論ずるのは勿論本

稿の目的ではない。教育史を取扱ふにあつて、特に問題となるのは、「干渉そのもの」ではなく、「干渉の性質」でなければなりません。同じ統制といつても、例へば英國に見るやうな自由主義を基礎としての統制もあるし、ドイツ、アメリカ等に見るやうな各支分國に委任しての統制、フランスの如き劃一的國家統制もあつて、各國それ／＼の特殊相によつて教育統制上の特色や條件を持つてゐるのであります。私共の問題とするところは、この特色や條件が、どのやうな理由で生じ、どのやうに發展して、しかもどのやうな長所なり破綻なりを現はして來るかといふことであります。

明治六年、征韓の議に敗れた西郷南洲等が、挂冠して野に下ると、翌年征台の役があり、越えて十年代の中期から三十年にかけて朝鮮を中心とする積極的活動が行はれたことは周知の事實であります。この一聯の歴史をながめてみると、西郷等失脚の眞の原因は、實は征韓論などにあるのではなかつたことがわかるでせう。否むしる征韓論こそは明治全期を通じての日本の宿題であつたやうにさへ思はれます。「甲午朝鮮内亂始末」といふ本にかう記されてあります。「朝鮮は東洋のバルカン半島なり。四隣其の爪牙を磨し其の内を

窺ふこと久しと雖も、亦如何ともするなきなり。魯決して之を併することを得ず、英敢て之を犯すこと能はず、支那又之を己に隸屬せしむることを得ず、我國亦容易に之を動かし難し」と。その通りであつて、若し朝鮮の併合を強行する一國があつたならば、彼は少くとも或る一國と公然干戈を交へることを覺悟せねばならぬ状態にあつたのであります。

殊にその地理的な關係から、日清兩國の朝鮮における對立は、政治に經濟に、事毎に尖鋭化し、明治十七年を轉期として、兩國交戦の勢は最早や必至の状態に立ち至りました。かくて國內百般の事態は、俄然異常な緊張の下に整備せられ、あらゆる自由主義は、その萌芽を摘み取られて、統制が強化されたのであります。

以上のことから見ても、森文相の教育策がどのやうなものでなければならなかつたかは容易に推知し得られるところでありませう。

この意味において、彼の制定にかゝる諸學校令及び明治三十二年の改正諸學校令、大正六年の臨時教育會議から降つて昭和二年の總動員等、此等一系列の諸政策は、各々皆さし迫る非常時への前奏と見られるわけであります。

とも角、森文相がその畢生の教育制度を確立するためには、財源の涸渇と日支關係の緊張との二つの條件に制約されなければなりませんでした。

五

そのやうな制約の下に生れた教育制度として見る時、最も特徴的な部分はその「師範教育」であります。學校系統内のこの特殊な存在は、森文相によつて更に特殊な色どりを蒙つたのであります。

師範生について必要な三つの徳は「第一、柔順なること、命唯之從ふの義なり。第二、相扶くるの情。第三、威儀あること」にあるとし、兵式體操は全く前三箇條の目的を達するのに利用すべき最良の方法であつて、之を「道具攻めの法」と稱してゐます。即ち「第一に軍人の至要として講ずるところの從順の習慣を養ひ、第二に、軍人の各々伍を組み其の一伍には伍長を置き、伍長は一伍の爲めを思つて心を勞し情を厚くし……第三に生徒に兵卒となり伍長となり、或は司令官となつて之を統督することによつて威儀をつくる」と

いふ點で、師範教育の三つの目標に達し得るものであると規定されてゐるのであります。

教育者とは要するにこの三徳を廣く生徒に普及すべき任務を持つものであつて、當時、この方針を極端におし進めた或る論者の如きは、國民全體に對するスパルタ式教育を提唱するに至つたほどであります。

かゝる教育方針は、當時にあつては絶対に遂行せられねばならないものでした。全國の師範學校は、高師を先頭として兵式體操に熱中したもののやうです。寄宿生活は云ふに及ばず、日常作法服裝に至るまで、凡てが軍隊式に訓練されました。當時文相は東京高等師範學校長に陸軍少將山川浩を採用した位です。特に秋田師範においては、「從來在學の生徒を全部解散して新たに選舉入學せしめ」といふほどの徹底ぶりで、「規律を守ること兵式におけるが如く」なつたと文部省年報に報告されてあります。

此のやうな師範教育が一方「經濟主義の教育」と結びついて廣く小學校教員の生活を緊張させたことは勿論であります。

明治二十四年の文部省令十二號では、教員一人につき生徒七十人まで受け持ち得ること

になつてをり、當時すでに教員の過勞を指摘して待遇改善を要望する者もありました。「貧民教育策」といふ本に、その筆者柏倉某の體驗が記されてゐます。「曾つて余の學校（師範學校）に在る時、同校の生徒一級三十四人なりしに、卒業に至つて僅かに十五名、而して卒業以來袂を連ねて普通教育に従事せしこと滿十年なるに、其内四名は死亡したり……殆ど三分の一の死亡なり。かの西南戦争は世界の激戦と稱すれども猶其の死亡は全軍の五分の一に過ぎず云々」と嘆じてゐます。此の筆者は、森文相の方策を體驗したせいか、教育と戦争とをいつしよにして、ピントの外れた比較を試み、教員の劇務により肉體消磨を慨嘆してゐますが、それにしても以上の諸改善に對する要望は、現在に至るも、むしろ擴大された要求として残されてゐる根本的な問題でせう。

六

擬て今日私共が森文相のこのやうな師範教員對策及び廣く教育對策を見る時、一見して一種の壓迫的緊張を感ずるのでありますが、このスバルタ式ともいふべき方策は、無論多

少の無理をも押し切つて強行されねばならなかつたでせう。と同時にそれを永續させるためには、どのやうな方法を以てしたか。先づ、「天職」としての威儀と信念とを與へて、従順な觀念を養成するやうに仕向け、一方視學制度を緊張せしめることにより監視監督を充實させるといふやうな一聯の行政上の對策が取られねばならないわけであります。ここに視學制度の如き、實際教授の指導といふ假面は持ち乍ら、その本質は以上の如き機能を果すべきものとして設置されたことは明かであります。

米津某といふ視學の著書「視學の眼」といふ本に教員監督の秘訣が語られてゐます。曰く「余は、一校統理の方術について研究せしこと多年、而も之ぞといふ名案を得ず、偶々淺草公園に遊び、ルナパークの活動寫眞にて、一人の牧者が數千の羊群を飼ひ、思ふやうに連れ廻れるを見、豁如として秘法を體認せり。即ち牧者は、只先頭の一匹を直接に導くのみにて數千の群は之に従ふなり。思ふに校長にして只一人の首席訓導を操縦せんか、二番目の者も三番目の者も、其の後に従ふべく、皆がさうなるに相違なかるべし。蓋し獸類の中に羊が従順なるが如く、人間の中に教員ほど従順なる者なければなり。若しも皆の

行く方に従はず勝手の方角に迷はんか、羊は深山にふみ込みて、餓死すべく、人は教員の地位を失ひて飯にありつけざるべし。人を馬鹿にしたやうな話なれども實の所本當の話なり」と。全く人を馬鹿にした話などといふ所は通して、此の筆者の常識と教養の程度も、さこそと想はれるやうな語り草であります。

それにしても次第に視學制度が完備するにつれては、この監督法を恰かも大工場の監督に比較して「時間の經濟を圖り」「勞役の效果を増す」といふことが視學の要訣である等と云はれるやうにもなります。何れにしてもこれは森文相の教育策の重要な部分を占めたものであることは明かであります。

ところで更に一層重要なことは、廣く教員一般の生活を安定せしめることでもあります。しかるにそれが前述のやうに安定を許さぬといふ状態にあつたとすれば、教員層をば、どのやうな社會層に求むべきかといふことに目が轉ぜられます。そこで裕福とまでは行かなくとも先生をしてゐれば、どうやら相當に暮して行けるといふ人々が要求される。當時は未だ社會の重點が農村にあつたから、所謂「中農」の部に入る者が、教員の絶對多數を占

めてゐたことは以上の理由から自然の勢でありませう。現に森文相の明治二十年師範學校長訓示中にも「師範生徒募集には一つの關所を設けたり。郡區長の推薦之なり……將來は悉く推薦生のみとすべき見込みなれども……」とあり、之が反映は十五年報の視學報告にあらはれ「新たに入學の者は郡長の推薦に係る者多し」となつてゐます。

かうして森文相の教育策は、あらゆる方面から隙間なく構成され、學制の全般的整備を打立てたものであります。

七

明治二十二年二月十一日、輝かしき憲法發布の日、西野文太郎といふ男が、堂々刺を通じて文相官邸に乗り込み、森文相を一撃の兇刃の下に倒してしまひました。時に四十四。このテロ行爲の原因は何であつたでせうか。雜誌、「學界の指針」に記されてゐるところを見ればかうであります。

「天道惡を許さず、賊も其の場に殺されたれば、如何なる怨よりの起りにや得て知るよ

しもなければ、仄に聞くところによれば、先年大臣伊勢大廟に詣で給ひし時、不敬の舉動あらせ給ひしと跡形もなき訛傳ありしを、西野は確く謬信して……今日少壯血氣の輩を見るに饒々口舌を事とし、神を敬し佛を拜するを以て身の恥と心得、帽を戴きて拜殿に上り、杖を以て寶物を玩ぶが如き者少からず、是眞に禮を知らざる者なり……森文相は身に覚えなき訛傳を受けたるのみにてすら猶且つ毒手に倒れさせ給へり云々」と。

眞相は、文相が大廟參詣の折、禁制の區域に足一步ふみ入れようとして、神官に押し止められたといふやうな事實であつたらしい。このことが傳聞されて囂々の聲があつたので側近者が、文相に對して頻りに辯明を進めたが、文相は恬として受けつけなかつたのとこととであります。文相の態度が果して反國粹的であつたのか、それとも、西野の狂信的な態度が、傳へらるゝ出來事を反國粹の頂點にまででつち上げたのか、さういふ吟味は兎も角として、私共の注目したいのは、それ等の背後に横はる意味であります。キリスト教系を以て目さるゝ前記の雜誌においてすら、此の事件につき暗に文相への非難を含めた態度を、遠慮勝ちにしるとつてゐるといふ事實、この點の消息をもつと端的に示してゐるのは、雜

誌「教師の友」の「森文相の死を弔し併せて後任者に望む」といふ一文であります。

「今や我が國は憲法の發布によりて、一年ならざる間に立憲代議の國民たらんとするものなり……然らば百般の制度において、政府のとりどころの方針も亦干渉の旨義を廢して極めて自由放任ならざるべからず、殊に我が教育部面の如きは、國民元氣の養成所なれば……」と、遠廻しに干渉的教育政策を攻撃してゐます。まことに伊藤博文の言葉を以てすれば「豫期の如く官僚政治と民主的分子との軋轢が激烈を極めた」のであります。

傳によれば、森有禮は、外遊中、憲法取調べのためドイツに派遣されてゐた伊藤博文と彼の地で會ひ、伊藤は、森の抱く教育策にいたく共鳴して、其時すでに文相たるの椅子が準備されてゐたといはれてゐます。何れにしても當時、即ち憲法發布前後の事情より推して、日本の政界は著しくビスマルク式の鐵血主義に彩られてゐたことは事實でありませう。

爾來日本の行路は眞に多難多岐を極め、戦争と恐慌とは踵を接して去來しました。明治二十三年第一回の恐慌に續いて二十七八年の役、ついで三十年三十一年の恐慌、三十八年の役、續いて四十年、大正三年の恐慌並に歐洲大戰等々、これ等の現象が教育にひびいて、

その度毎に教育活動は緊張の度を加へ、同時に経済的な壓迫が加はるのであります。

此の過程において、日本の教育界を流れてゐる諸々の教育改革の試みは、そのすべてが、明治十九年の森文相による學校令を中心として展開されてゐるではないでせうか。しかもその學校令及びそれを中心として展開した諸々の教育制度の整備と、それを制約する土臺との聯關を想ふ時、所謂教育革新の對象は、單に一個の學校令に集中すべきではなく、自ら社會の奥底に進出することでありませう。

スパルタの傳説的政治家リクルダスは、祖國の教育制度を残して放浪の旅に上つたと傳へられてゐます。彼はスパルタ教育の母として、スパルタ貴族の薰育の爲めに一身を犠牲に供しました。我が國教育史上に大きな足跡を残し、身を鮮血に染めて去つた子爵森有禮は、近代的なスパルタ教育の片影を止めました。彼果して日本のリクルダスであつたでせうか。

第十章 新島襄論

一

明治元年三月、京都に於てのかの新大綱が宣布せられた二日後の十六日附で、左の布令が太政官から出され、全國の津々浦々に高札となつてはりめぐらされました。

「切支丹邪宗内の儀は是迄の通堅く御禁制なり若し不審なるもの有之ば其筋の役所に申出づべし御ほうび下さるべき事」

と随分皮肉な觀がないでもないが、歴史といふものには、このやうな皮肉が間々現はれて、しかもそれは、必らずしも一がいに喜劇にのみ終るものではないのだ。

明治維新を中心として、我國に基督教の入つた経路は、大體三通りあつて、第一は九州を中心とする在來の天主教勢力であり、第二は北海道函館を基點とするギリシアカトリツ

ク勢力、第三は横濱、神戸を基點とするアメリカのミツシヨン勢力であります。

この三つの宣教勢力の消長を検討することはこの章の意圖するところに重大な關聯を持つと共に、又單に日本の文化的な性格を判定するにも、あながち無駄なことでもないと思ひます。

二

明治文化全集第二卷の政史篇、明治元年四月二十二日の項に、次のやうなことが記されてゐます。

「九州天主教徒事件につき在京諸侯に詢ふ該事件の顛末は左の如し。長崎近傍浦上村住民三千人天主教を信じ幕府之に手を下さんとするに數千人集合す。維新に會し新政府之に當る。四月十七日加賀薩摩以下三十四藩に令して捕へし者三千四百三十四人を分割し、開發地土工或ひは石炭採掘其外夫役等に勝手に召使はしむ。各國領事之をきいて詰問す。明治六年三月十四日に至り該囚徒を放免し、金子を與へて歸村せしむ」。

本文の如くに、この浦上村宗門事件は、すでに幕末からのひきつぎであつて、この正月には新政府からの九州鎮撫總督の參謀であつた大隈大八郎（後の重信）と井上聞太（後の馨）の兩名が長崎に赴いて天主教徒狩りを行つてゐます。

この宗徒に對しては、井上が最も強硬で、刑に斬首を當てんと主張し、部下の者からは往昔の踏繪の案が出た、といふ。結局宗徒三千人の各藩分割といふことで梟がついた。

ドミンゴ仙右衛門といふ宗徒がその中に居た。津和野藩にあづけられて「ころび」を強要されたが頑としてきかず。とう／＼水責めにあはされ、寒中の池に投ぜられて失神したが、最後まで「ころび」なかつたといふ。

宗徒達は、明治六年三月まで、滿五年間といふもの、各藩に分割されて勞役に服した。生還したもの二四八一名、といふから約一千名の者がこの間に失はれたわけです。

九州の基督教事件といふのは、大體以上のやうなもので、この事件は當時の外交問題をひき起し、ひいては我が國の條約改正問題にまで響いた程有名なものになつてしまつた。

一方、函館、仙臺を中心としたハリスト正教會にもこのやうな事件がつきまとつた。北門に於けるギリシア・カソリックの布教史は、文久元年（一八六一）の露國宣教師の渡來から始まります。この時の宣教師はイワン・ニコライ師で、現在の駿河臺にあるニコライ聖堂の創始者である。

ところで、北海道東北の信徒は、舊幕關係の封建武士が中核となつてゐるのであつて、この點、九州の信徒が農民を中心としたところと區別されます。

始め土佐浪士澤邊琢磨が、ニコライ師の唱へる基督教に反對して、場合によつては一刀兩斷の意氣込で師の邸宅に乗り込んだ。

ところが、色々と師から教へらるゝところがあつて驕然として基督教に轉向し、この純情と熱血と青春の力を、其の後の宣教生活に傾けることゝなりました。

彼の第二の兄弟は、同じく浪士酒井篤禮、浦野大藏等であつて、これから追々信徒の數

も多くなつた。たまく／＼維新の變亂に遭つて、この地に榎本武揚、大島圭介等の脱走組が集まることゝなり、茲に、之等反新政派と、基督舊教徒とが、妙な因縁で相結ぶことゝなりました。

信徒の中でも有名なのは、元仙臺藩回天組の隊長金成善右衛門、同藩士新井常之進等で、この人達はひそかに舊藩地仙臺に還り、信徒糾合を名として、其の實反軍を糾めようと計つた。

「或ひは基督教を利用して其の心中の勃せる野心を充さんことを夢想せしものなきにしもあらず」といふやうなわけで、函館中心の基督教が、仙臺に飛び火し、しかも、このやうな野心的な信徒もどし／＼ふえたのであるが、明治二年五月には五稜廓が陥入り、榎本等の投降となつて、維新の擾亂が一先づ鎮まると、これらとり残された勢力は、純然たるクリスチャンとなつて、仙臺を中心に鞏固な地盤をきづいてしまいました。

かういふ團體が爲政者の眼に觸れぬ筈はない、果然、五年一月に突如迫害の手がのびて、先づ仙臺では澤邊等が捕へられ、同年三月に入ると、北海道拓殖使黒田清隆の手によつて、

酒井、津田の徒が獄に下された。

次に、當時官吏岡本某と、被告たる教徒津田との問答録を掲げる。政府が、この信徒を、どのやうな眼で見てゐたか、明瞭にわかること、思ひます。

津「然らば切支丹を御禁制になる理由は、邪を以ての故か、抑々亦正を以ての故か」

岡「孰れにしても國禁は國禁なり。之を學びしは國禁を犯せしなれば恐れ入りたるならん」

津「否、只正道を學びたるのみにて、國禁を犯したる覚えなければ更に恐入るべき理由なし」

津田氏は士族であつたので、白洲に於ても床几に腰かけることが許されてゐたせいもあるが、仲々當るべからざる鼻息だつたと想像されます。

岡「御身は露國宣教師ニコライより月給を渡されてゐたのは眞實か？」

津「然り」

岡「抑々月給の『給』の字は、上より『たまはる』の意である。然らば御身は日本人に

して外國の祿を食むものである。これにしても未だ國禁を犯さぬといふか」

云々。

同じく投獄された酒井篤禮は、其の後も益々強く信仰を奉じ、獄内にあつては同囚を感化し、獄外労働にあつては、働らき先きの人々を轉信せしめたといふ。

かうして、仙臺、函館の宗徒事件は明治五年まで続き、その四月に澤邊、津田等は自由の身となつたのですが、その身邊の監視は、當分の間嚴重に続けられてゐました。

四

このやうな宗教問題は、國內的、外交的に見たならば、どのやうに解釋さるべきでせうか。國內的に見たならば――

一言にして云へば、舊封建治下の複雑な諸階層の、革新的な新政に對する民主的な要求の一表現となすべきでせう。當時の、廢佛毀釋に對する反對、キリスト教反對、蟹行文字反對歐化反對など、一つ一つが、正反對な原因から出てゐるので諒解に苦しむやうなもの

ですが、之を、浦上村に於ける消極的な農民の反抗と、ギリシア・カソリック信徒の、置き捨てられた武士的反抗との二つの例から見ると、新政草蒙の際に於ける不可解な反対の意味が、其の實一脈の原理から出てゐるやうに思へる。

又、國外的、特に外交問題と宗教との關聯を考へる時、問題は一步を進めることゝなります。

切支丹問題が紛糾してゐる間、外國公使達は、英國のパークスを首導者として、熾んに抗議を申込んでゐましたが、事が浦上村事件といふ比較的センセーショナルな問題になつたら、とうとう抗議も本格的になつて、英米佛獨蘭の五ヶ國公使と、政府の三條・岩倉・澤・大隈等の委員との正式な談判にまで發展してしまつた。加ふるに、明治四年十月、例の條約改正交渉員が歐米に派遣される段取となつては、どうしてもこのやうな宗教上のいざこざは、體面上からも面白くない——といふわけで、最初かゝげた邪教令は、明治六年二月十九日に撤廢され、これから浦上の囚徒は解放され、北國の浪士達は自由の身となつたのです。

扱、こゝで一應、日本の南端と北端で問題となつた兩基督教を考へてみますに、天主教は、云ふまでもなく舊幕から殘存してゐたジエスイト教であり、その祖先は島原の海に血をそゝいだ傳統を有つものではありますか、國際的にみるとこれは、直接的には何等大きな背景を持つものではありません。

又、ギリシア・カソリックのハリスト教は、直接的にはロシアといふ強大國を背景にしてゐるとは云へ、當時の露國は、クリミア戦争敗北以來、むしろ國內問題にわづらはされてゐて、歐洲の國際政局からは追ひ出された時期であつて、これも有力な背景とは云ひ得ないのです。

更に、歐洲の列強は、といふに、それは正に鐵と火花の時代を通過してゐた時期で、ドイツ、イタリアの統一は、フランスのナポレオン三世の野心に結びついて、我國の明治三年（一八七〇）を頂點として、まるで、るつぼの中にあるやうな騒ぎを演じてゐた。

残るところはアメリカ合衆國のみです。而して、この重要な時期に、重要な場所をついて入つて來たのが、その國を背景に有する教團であつたわけです。

即ち、横濱地方を中心とする日本基督教會の傳道がその一つで、有名なヘボン博士やギドー・フルベキなどが活躍した。これは、始めは聖公會の長老派とリフオームド派が別個に運動して築き上げたものです。もう一つは、阪神地方を中心とする日本組合教會の傳導活動で、グリーン夫妻、デヴィス等を中心とし、その背景にはアメリカン・ポールド傳導會社が立つてゐるものでした。

第三のもの、この、我國最初の開港場を衝いて、商品と一しよに流れ込んだ宗教が要するに布教の榮冠を勝ち得たのです。

五

大略、以上のいきさつが維新前後に我國に基督教の流布した最初の歴史であります。

歐米の列強は、安政の通商條約によつて、我國に不平等條約を押しつけ、それは我が國から独自の關稅權を取り上げた。そこで、我國は、その商品と一しよに流れ込んだこの世界的宗教に對して、逆に、鞏固な教稅を擔はしてしまつた。

といふ意味は、これから明治廿三年頃までかゝつて、この世界的な宗教に對して、完全に「日本品」といふレッテルをはりつける仕事に成功したといふことです。このことは、後で説明するつもりですが、要するに日本の基督教は、その教義の如くに、矢張り二回の試練を受けるわけで、第一回は前述の明治四、五年のそれであり第二回は同じく二十三年頃のそれであります。

假に、明治六年以後、即ち禁令の撤廢後から、明治二十三年の前頃まで布教に従事し、しかもその背後に強力なアメリカ資本の力を有する基督宣教師が、その天稟を恵まれて我國に活動したとしたならば——諸君はかゝる人を幸福と呼ばないであらうか。

この意味に於いて、私は、眞摯な敬意を以て新島襄先生をば眞に幸福の人と呼びたいのであります。

六

天の時・地の利を得た新島先生（以下敬稱略）は第三に人の和を得てゐた。人の和といふ

のは、國外、國內有志高官の援助であります、その事情を知るためには、先生の傳略を述べる必要があります。

新島七五太が二十一歳の時、函館に遊んだのは丁度元治元年（一八六四）のことで、都では蛤御門の變があつたり、佐久間象山が暗殺されたり、兎角に血腥い年でありました。函館にはロシアの領事館があつて、其處の教父たる人が前に述べたニコライ師であつた。若年の新島は、このニコライ師の日本語教師をしてゐたが、會々同港の英國商館書記の福士某と親交を結び、その紹介で米國商船長と相知り、遂に、該船が函館を出港するに際して、新島は死を決して密航を敢行したのです。

函館を脱走したのが盛夏七月、それからボストンに到着したら、もう年を越して慶應とならうとする暮の十二月でした。

船長の好意によつて船主アルフューズ・ハーデイに紹介され、それから明治七年、彼が歸朝するまではハーデイの庇護の下に宣教師としての最高の教育を受けたのです。

七五太といふ名前も、いつの間にか米國流の「ジョージ」が「襄」となつて、在米中の

森有禮（小辯務使米國在勤中）とも交際し、又、明治五年三月には岩倉大使一行中の、田中不二麿子（文部理事官）に紹介され、これから一行と共に英佛獨の視察旅行に旅立つことになりました。かの、田中不二麿子の「理事功程」は、新島がベルリンで書き上げた「歐米教育事情調査報告書」に手を加へたるものであります。

明治七年十月、米國傳導會社第十六回の年會が開かれた。その席上、日本傳導新任宣教師として、新島は「基督教主義大學の創立」を叫んで壇上に立ちました。

同志社大學の創立はこの時に約束されたのであつて、寄附金は即坐に集まり、翌年十一月には早くも歸朝の途に就き、超えて八年十一月二十九日には京都の地に「同志社」が開校された。

當時、アメリカン・ボードの宣教中心地は神戸、大阪に在つて、明治二年以來グリーン夫妻が之を擔當し、大阪には南北戦争の老勇士デヴィス氏が布教に従事してゐた。又、はるか熊本には明治四年から細川藩經營の洋學校があつて、其處には米國砲兵大尉ジェーンズが生徒訓育のかたはら、徐々に基督教の宣傳を行つてゐたのです。